

青森県埋蔵文化財調査報告書 第195集

上田遺跡

平成 7 年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第195集

か　み　た
上田遺跡

－国道394号線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成7年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は平成6年度に、国道394号線道路改良事業に係り、その路線内に所在する上田遺跡の記録保存を目的に発掘調査を実施しました。

調査により、縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物と近代の道跡を検出いたしました。これらの検出により、この地域での当時の生活を知るうえでの資料を得ることができました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、地域の文化財の保護活動の普及および啓蒙に役立てば幸いに存じます。

最後ではありますが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成7年3月31日

青森県教育委員会
教育長 松 森 永 祐

目 次

序

目次

例言

挿図目次

観察表目次

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査要項.....	1
第2節 調査経過と方法.....	3
第3節 遺跡の立地と基本層序.....	7

第Ⅱ章 遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物.....	10
1 住居跡.....	10
2 土坑.....	23
3 小穴群.....	32
4 道跡.....	32

第2節 遺構外の出土遺物

1 土 器.....	35
2 石 器.....	51
3 土製品.....	60
4 石製品.....	62

第Ⅲ章 ま と め.....65

付 章 出土遺物観察表.....66

報告書抄録

写真図版

挿 図 目 次

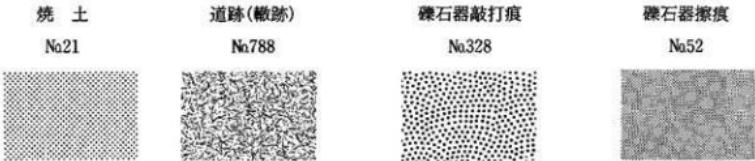
第1図遺跡位置	2	第22図遺構外出土土器（1）	41
第2図調査区と周辺の地形	4	第23図遺構外出土土器（2）	42
第3図グリッド及び遺構配置	6	第24図遺構外出土土器（3）	43
第4図基本土層	8	第25図遺構外出土土器（4）	44
第5図遺構配置	9	第26図遺構外出土土器（5）	45
第6図第1号・第2号住居跡 炉	11	第27図遺構外出土土器（6）	46
第7図第1号・第2号住居跡・出土遺物	12	第28図遺構外出土土器（7）	47
第8図第3号住居跡・出土遺物	14	第29図遺構外出土土器（8）	48
第9図第3号住居跡 炉	15	第30図遺構外出土土器（9）	49
第10図第4号住居跡 炉	16	第31図遺構外出土土器（10）	50
第11図第4号住居跡・出土遺物	17	第32図遺構外出土石器（1）	52
第12図第5号住居跡 炉	18	第33図遺構外出土石器（2）	53
第13図第5号住居跡・出土遺物	19	第34図遺構外出土石器（3）	54
第14図第6号住居跡	21	第35図遺構外出土石器（4）	56
第15図第6号住居跡 旧炉・出土遺物	22	第36図遺構外出土石器（5）	57
第16図第1～6・13号上坑	28	第37図遺構外出土石器（6）	58
第17図第7～10・17～19号土坑	29	第38図遺構外出土石器（7）	59
第18図第11・12・14～16・20～23号土坑	30	第39図土 製品	61
第19図第7号土坑・出土遺物	31	第40図石 製品（1）	63
第20図小穴群A・B	33	第41図石 製品（2）	64
第21図道 跡	34		

観 察 表 目 次

出土土器観察表	66
出土石器観察表	72
出土土製品観察表	73
出土石製品観察表	73

例　　言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成6年度に実施した上田遺跡の発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 本遺跡は、青森県上北郡七戸町字山屋10-1、外に所在する。「青森県遺跡台帳」(平成4年3月：青森県教育委員会)の番号は、41027と41054の一部である。
- 3 本報告書の執筆は、小田川哲彦、相沢治、中村博文、秦光次郎、田中珠美が分担して執筆した。執筆者は文末に示した。
- 4 本報告書における挿図の用例は次のとおりである。
 - 1) 方位 地形図・遺構図の方位は磁北を示す。南北グリッド軸は真北より29度30分西へ傾いている。
 - 2) 縮尺率 縮尺率は遺構・遺物の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については、スケール脇に示した。
 - 3) ケバ 遺構内の傾斜及び落込みは  で示した。
風倒木痕と木根等の攪乱は  で示した。
建設工事や近現代の削平地は  で示した。
 - 4) 小穴 住居跡の小穴と思われるものと小穴群については、検出・精査面からの深さをカッコ内に表示した。
 - 5) 挿図中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。



これ以外のスクリーントーンの表示は、その用例を同図中に示した。

- 6) 土層 遺構外の堆積層番号はローマ数字を、遺構内の堆積層番号は算用数字で表示した。
- 7) 写真図版中の個々の遺物番号については、第15図1を→15-1と表示した。挿図番号と一致する。
- 5 本調査および本報告書の作成にあたっては、下記の諸氏からご協力・ご助言を得た。

(敬称略、順不同)

工藤 大、小山彦逸、瀬川滋、田中寿明

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査要項

1 調査目的

国道394号線道路改良事業の実施に先立ち、当該地区に所在する上田遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資するものである。

- 2 遺跡名および所在地 上田遺跡（県遺跡番号41027、41054）
上北郡七戸町字山屋10-1、外
- 3 発掘調査期間 平成6年9月1日から同年10月31日まで
- 4 調査対象面積 2,940平方メートル
- 5 調査委託者 青森県土木部道路建設課
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査協力機関 七戸町教育委員会、上北教育事務所
- 9 調査参加者
- | | | | |
|-------|-------|------------------|-------|
| 調査指導員 | 村越 潔 | 弘前大学教授（現・青森大学教授） | (考古学) |
| 調査協力員 | 一戸 貞男 | 七戸町教育委員会教育長 | |
| 調査員 | 高島 成侑 | 八戸工業大学教授 | (建築史) |
| | 松山 力 | 八戸市文化財審議委員 | (地質学) |
| | 市川 金丸 | 青森県考古学会会長 | (考古学) |
| | 橋本 正信 | 青森県立田子高等学校教頭 | (考古学) |

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

- 総括主幹
調査第二課長 鈴木 克彦
主 事 小田川哲彦
主 事 相沢 治
調査補助員 斎藤 慶吾
川村真樹子



第1図 上田遺跡位置

第2節 調査経過と方法

調査経過

国道394号線道路改良工事の計画設定に伴い、路線内に所在する埋蔵文化財保護のため青森県教育庁文化課は、平成4年度に表面採取及び試掘による事前調査を行った。路線内には、「青森県遺跡台帳」(平成4年3月:青森県教育委員会)の地図番号22、遺跡番号41027の山屋(1)遺跡と隣接する上田遺跡=遺跡番号41054の一部がかかるており、試掘は山屋(1)遺跡を主体に行われたが、遺物の表面散布状態は上田遺跡に係わる部分が多く、指示書名も上田遺跡となっていたため、上田遺跡として発掘調査を行う事となった。

調査では、作業員の確保について七戸町教育委員会にお願いしたが、町側の調査とも重なり予定の作業員を確保できず、十和田市内からも作業員を募集し調査にあたった。

調査事務所は、試掘調査の結果をもとに、遺物の全く出土しないA区東側に設置する事とした。

9月1日より調査を開始した。掘り下げ以前の環境整備に数日を要したほか、粗掘り作業においては切り株が密集しているため思うように抄らず、加えて土中に大小の石が多く掘り下げに時間を要するものと思われた。そのため、調査当初から重機を導入し、掘り上げた切り株と土地境界用に作られた盛土を処理し、併せて表土も撤去した。

調査はA区東側から着手し、西側に進めていった。排土の捨て場所が周囲にないため、A区東側を排土置き場とするためである。この地点で検出した道路跡の精査も中旬には終了し、その後排土置き場とした。排土に関しては、所定の処理場へ随時重機により搬出する事とした。

9月中旬から下旬には、A区の掘り下げもほぼ終了し、中央部分から西側部分にかけての遺構検出作業に入った。遺構は西側部分に集中して検出し、検出順に精査を行った。調査区が林地の中であり特にA区では、日中全くの日陰となるため土層の判別及び写真撮影に苦慮した。

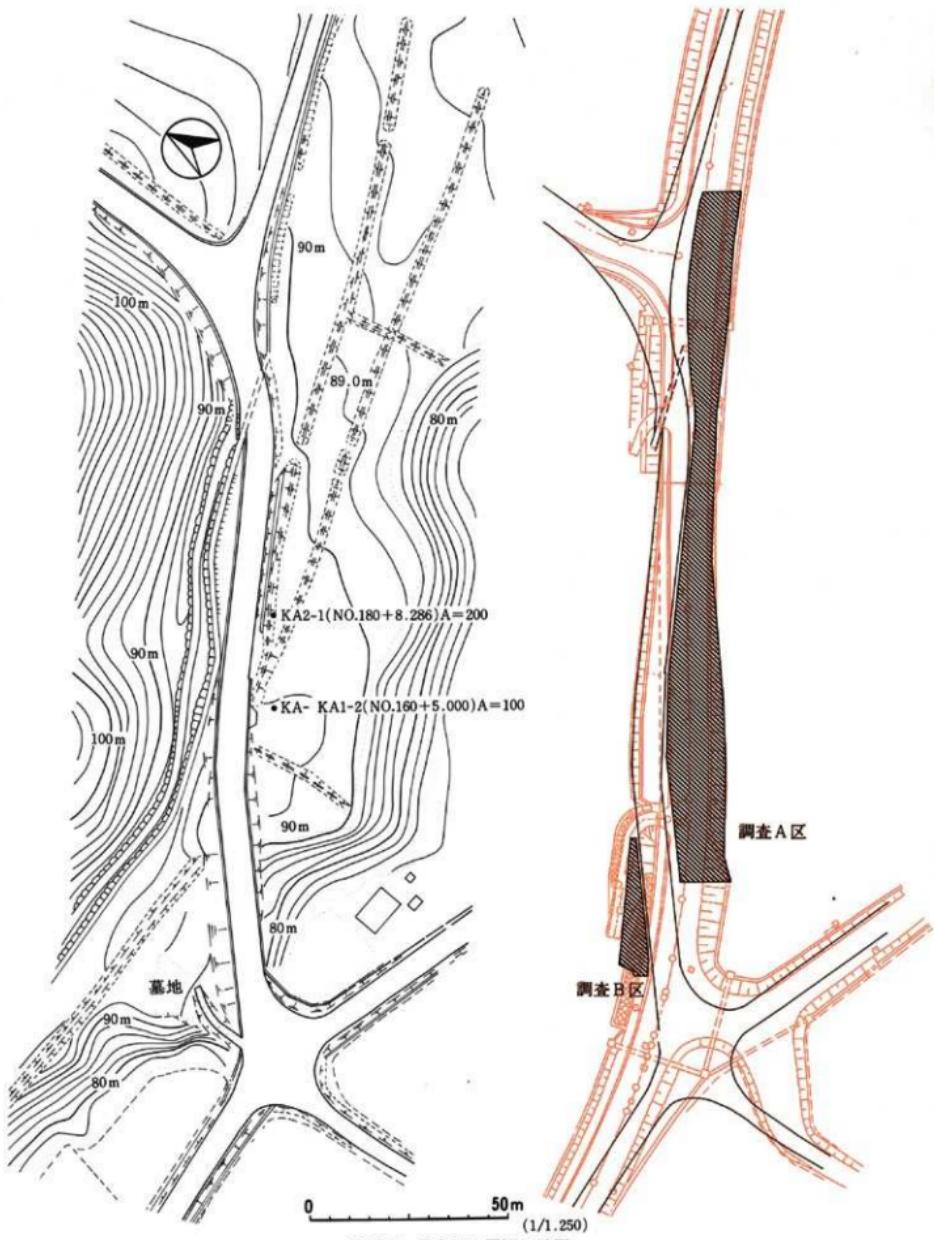
A区西側の急斜面地は、トレンチ調査により現道路建設の際大きく削平されたものであることが判明したためトレンチだけの調査にとどめた。

10月に入り、A区の遺構精査と平行してB区の表土剥ぎを行った。B区の排土処理については、小型運搬機を使用しA区の斜面地に捨てるとした。現道を介在しているため運搬機の扱いには十分注意を必要とした。

B区の西側には墓地へ通じる道があり、その部分については通路を迂回できないことから調査範囲から除外した。10月中旬には、A区の大部分遺構精査を終了し、主力をB区に傾けた。10月31日には無事調査を終了し器材等の撤収を行った。

調査対象面積は2,940m²であったが、現道路部分とB区法面、墓地周囲の調査不能部分を除いた実質調査面積は1,760m²である。

(小田川)



第2図 調査区と周辺の地形

調査方法

調査は、調査区内を現道路が通っているため、道路を境に南側を調査A区、北側の狭い範囲を調査B区として調査A区から調査を開始した。

遺跡の掘り下げは人力を主体としたが、表土層および無遺物層の厚い箇所と調査A区の西側にある地境のために作られたと思われる盛土の撤去には重機を導入した。また、排土と雜木の集積搬出にも重機を使用した。

掘り下げの作業と併行して行ったグリッド設定の基準には、路線中心杭のKA1-2(No160+5.000) A=100杭と2-1(No180+8.286) A=200杭の2点間結んだ直線を東西方向の基準線とし、この基準線に直行する線を南北方向の基準線とした。そして、KA1-2(No160+5.000) A=100杭(Fラインと25ラインの交点杭)から4m四方のグリッドを設定した。グリッドの南北方向線は、真北より29°30'西へ傾いている。グリッドの呼称は、南北線の北から南へアルファベットA・B・C…、東西線の西から東へアラビア数字1・2・3…、を付しこれを組み合わせてA1グリッド・B2グリッドとした。

調査区の標高点は、調査A区東端からおよそ60m離れて設置された工事建設用ベンチマーク(H=82,807m)から引用し、調査区内へ移動し用いた。

遺構の検出は、各層ごとに注意を払い行ったが、大半のものは基盤のローム層上面で検出した。しかし、検出された住居跡6軒のうち5軒は、床面を基盤のローム層上面かその直上層を床面にしており、住居周壁を掘りとばしてしまった可能性もあるが、粗堀り時点では気づかなかった。

遺構の精査は、4分割及び2分割を基本とし土層観察後掘り上げた。堆積土が遺構壁面や遺構底面と峻別しにくいものについては、隨時サブレンチを設け掘り足りない部分が無いように留意した。また、炉跡等については、最終的には断ち割りを行って土層を観察した。落ち込みとして半裁したものでも、土層観察および掘り込みの痕跡が認められない、いわゆる風倒木痕として促えられるものについては半裁だけにとどめた。

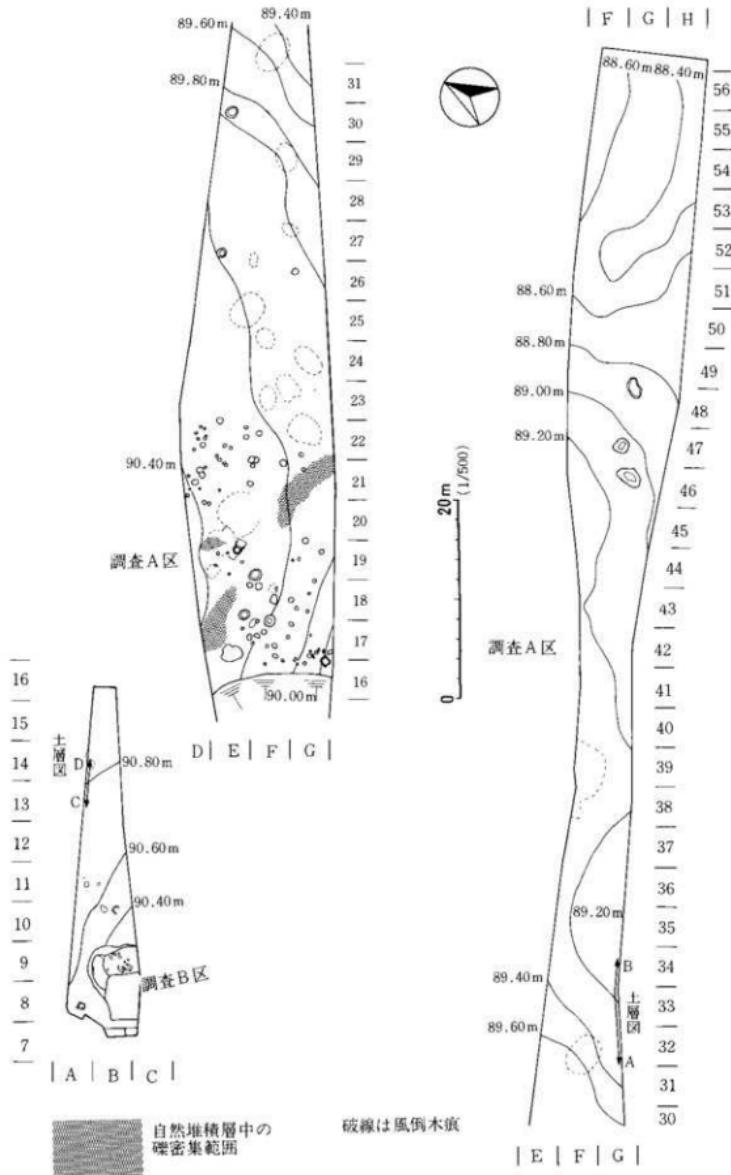
土層観察については、「新版標準土色帖」を用いて土色とマンセル記号を併記した。遺跡内の基本堆積土はローマ数字I・II…と分層表記し、同一層内で分層されるものについてはVa・Vb…と表記した。遺構内堆積土は、アラビア数字1・2・3…を付し表記した。遺跡内に堆積する火山灰については、その堆積範囲を1/200で略図的に捉えた。

写真撮影には、35mmモノクローム・カラーリバーサルフィルムを用いて、同一アングルで同一コマ数を撮影した。道跡のように形状が把握できないものについては、輪郭を白で縁取り撮影した。

遺構の図化は、1/20を基本としたが、小型のもので土器等の遺物が出土した場合や、炉跡については必要に応じて1/10で作図した。道跡と地形図については1/40・1/100で適時作図した。

遺物は、遺構外のものはグリッド単位で層ごとに、遺構内のものは覆土及び床・底面ごとに分けて取り上げた。

(小田川)



第3図 グリッド及び遺構配置

第3節 遺跡の立地と基本土層

遺跡の立地

上田遺跡は、七戸町の市街地より西へ約4.5kmほど離れて所在する。この地域は、奥羽山脈の北端、八甲田山系の東側山裾にあたる。この山地の東側には、山地を刻むように、和田川(高瀬川)、作田川等の多くの河川が東流し、台地が形成されている。台地は、地形面の性質や構成物の違いから、いくつかの台地に分かれる。本遺跡は、三本木台地の西側末端部、八幡岳山地との境に位置し、和田川(高瀬川)の北側河岸段丘上に立地している。

この地域の基盤の大部分が、新第三系中心統の流紋岩質凝灰岩、泥岩、砂質凝灰岩などの岩石で構成されている。全体的に比較的硬質な岩石であるが、岩種構成が多様であるため不安定である。この基盤の上に、段丘堆積物がのり、黄褐色火山灰層(ローム層)を主とする火山碎屑物に被覆されている。このローム層が台地の表層土の基底となる。

遺跡の層序

発掘調査区の現況は林地であり、植林された樹齢50年から60年の杉の切り株が密に並んでいる。また、調査A区の中央部から西側には地境と思われる盛土があり、上位層はかなり擾乱されているものと思われた。調査B区には、墓地の一部が調査対象に入っている、同様に擾乱が懸念された。表土層第I層から第VIII層までの8層に分けられる。以下に、基本層序について記述する。

第I層 黒褐色土(10Y R3/2) 表土層である。層厚は、5～最大20cmである。

第I b層 黒褐色土(10Y R3/1) 調査A区で部分的に見られる地境の盛土である。層厚は最大60cmである。

第II層 黒褐色土(10Y R2/2) 繊密でやや粘性をもつ黒ボク土壤である。浅黄色の火山灰粒子を含む。調査A区で検出した道跡は、ほとんどが第II層上面が使用面で、一部がIV層上面まで達している。

第III層 浅黄橙～黄橙火山灰(10Y R8/3～10Y R8/8)と第II層と第IV層の間に、十和田a火山灰の塊が連続して堆積することから、第III層として分けた。調査A区のグリッド20ラインから東側に見られる。特にグリッド20～25ラインの範囲に厚く堆積しており、層厚は最大20cm程ある。二次堆積である。

第IV層 黒褐色土(10Y R2/1) 層厚は20～最大60cmある。粒径1～10mm程度の浅黄橙色浮石がところどころに見られる。また、微細な岩片も見られる。縄文時代晩期から後期に比定される遺物が、混在して層中より出土する。

第V層 黒褐色土(10Y R2/2) 層中に混入する、中振浮石粒の量から第V a層と第V b層に细分した。

第V a層 粒径1～5mmの中振浮石が斑に混入する。一部の範囲で遺物が出土する。

第V b層 中振浮石の塊が部分的に密である。この中振浮石も二次堆積である。

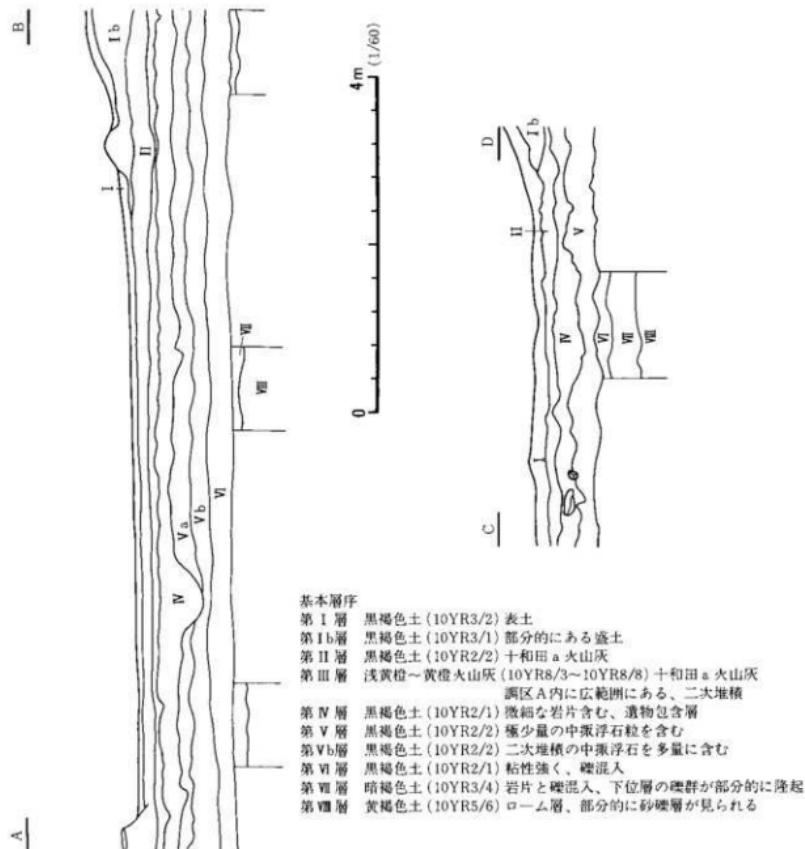
第VI層 黒褐色土(10Y R2/1) 第IV層と同色だが、粘性が強い。F18～20、F26グリッドの狭い範囲から縄文時代早期から前期初頭の遺物が出土している。10～20cm大の礫を所々に含まれる。

第VII層 暗褐色土(10Y R3/4) 5mm～3cm大の礫片を層中に含むほか、10～30cm大の礫群が隆起している。本層の上面は、一部遺構の床面となっている。

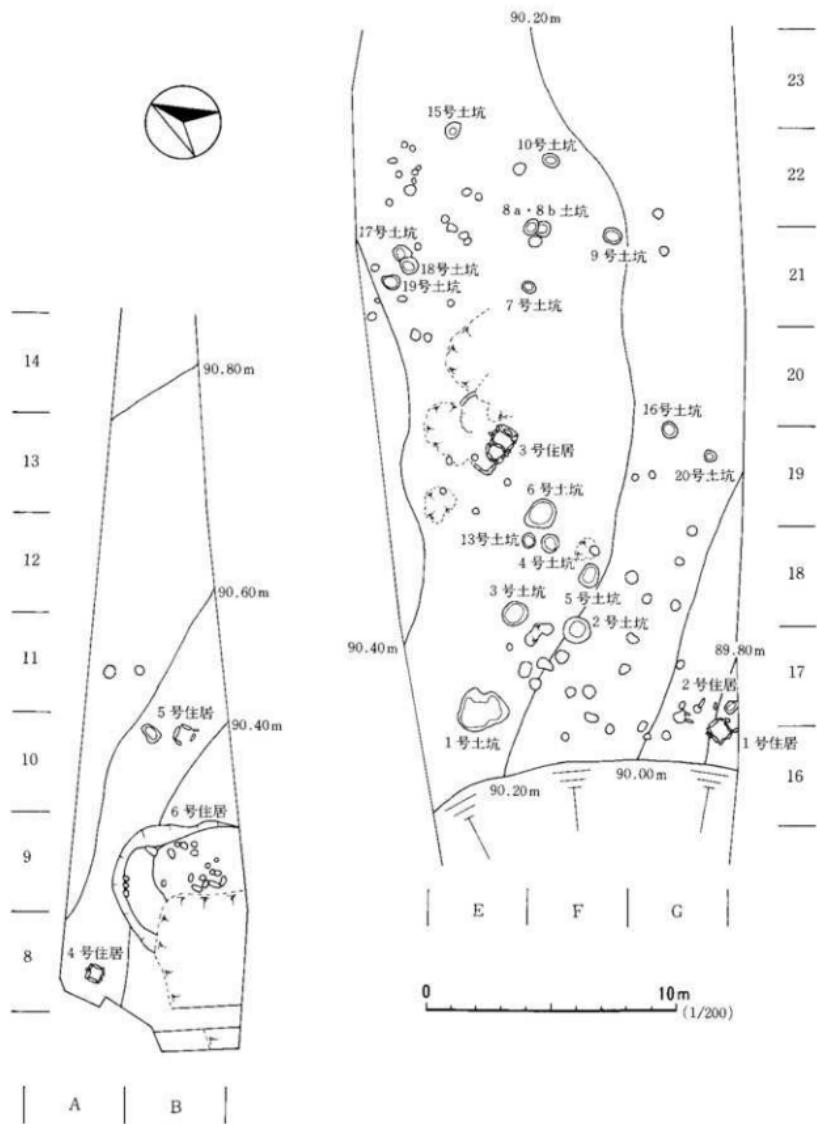
第VII層 黄褐色土 (10YR5/6) 風化したローム層である。部分的に砂礫を含む。

調査B区では、上記の層のうち第III層と第V b層が欠層している。B区の遺物は、第II層と第IV層から出土している。また、A・B 7～9グリッドの範囲は、擾乱の影響が大きく第II層の直下が第VII層のローム面となる。

(小田川)



第4図 基本層序



第5図 遺構配置

第II章 遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物

本調査では、総数6軒の住居跡と23基の土坑、小穴群、近代の道跡を検出した。住居跡は、すべて調査区の西側、標高約90~90.5m程の所にまとまって作られている。大半の土坑と小穴も住居跡の周辺に作られてある。

遺構の検出であるが、掘り下げ時点では、遺物の出土する第IV層および第V層中では、遺構のプランを全く確認することができず、A区では第VI層中および第VII層上面で、B区では第V層と第II層除去後に検出した。住居跡については、当初は配石遺構と思われたが精査の結果、住居内炉跡と判断されたため、第6号住居跡を除く、他の住居跡はすべて住居の炉跡とその周囲の一部床面だけの検出となった。住居のほとんどが、第VI層か第VII層上面を床面としているため、掘り下げの時点で判別できず壁を掘り下げてしまった。

以下に、これらの遺構について報告する。

1. 住居跡

第1号住居炉（第6図）

【位置と確認】 調査A区西側G16・17グリッドの調査区境界に近接して位置する。北側に50cm程離れて、第2号住居炉跡としたものがある。西側は削平された急斜面となっている。本遺構は、第VI層掘り下げ時に四角形に配置された石組遺構として調査した。石組内の土層観察の際、底面より焼けた面を検出したため、土層観察ラインを石組外へ延長したところ、石組の南側の第VII層面が浅く凹み硬化していることが判明した。この石組内の焼土面と浅く凹んだ硬化面から、住居の炉跡と判断した。

【平面形・規模】 掘り下げ時点で、土を判別できず壁を掘り下げてしまったため不明である。調査区境界の壁にも壁の立ち上がりを見つけることができなかつた。

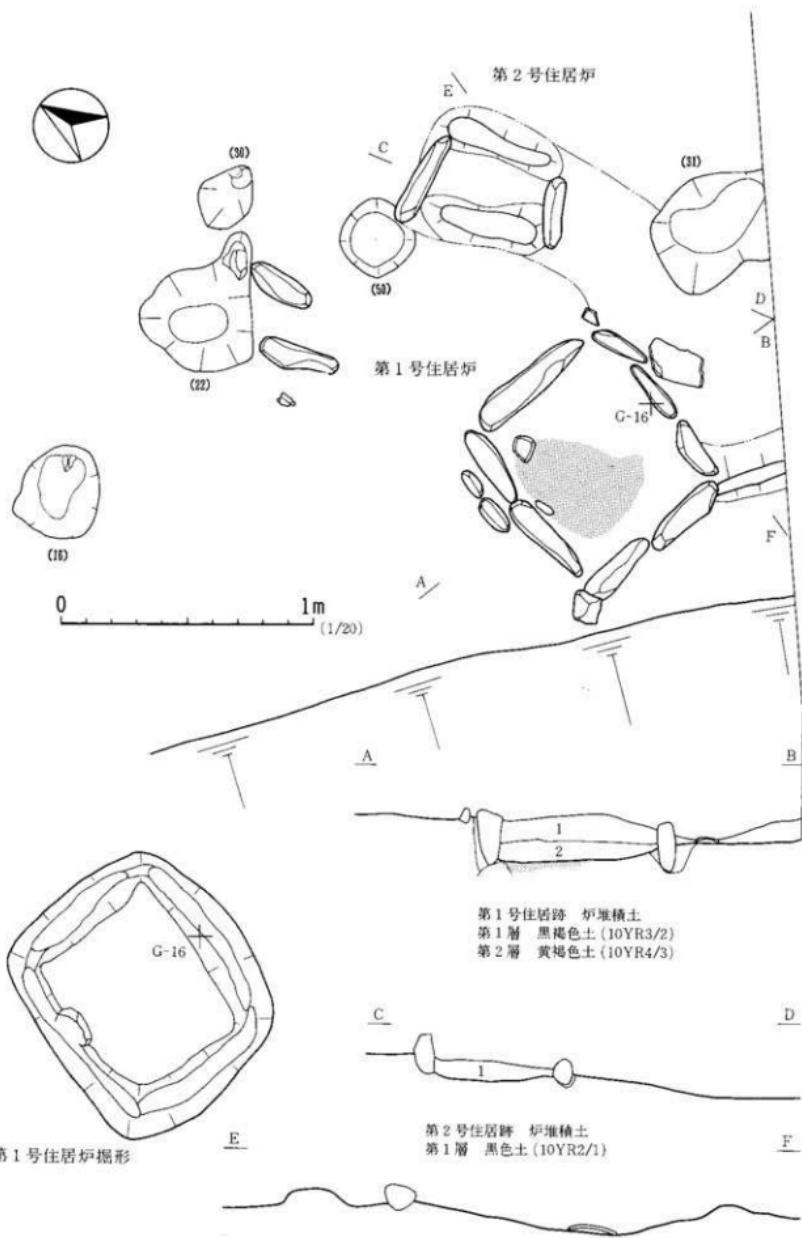
【床・硬化面】 第VII層の基盤層上面を床面としている。石組炉の南側に約50cm×90cmの範囲で硬化面が認められた。この面は、第VII層を3cm~5cm程掘り凹めて作られており、調査区外に延びる。

【柱穴】 石組炉周辺に7個の小穴を検出した。いずれの小穴も本住居に付随した可能性がある。

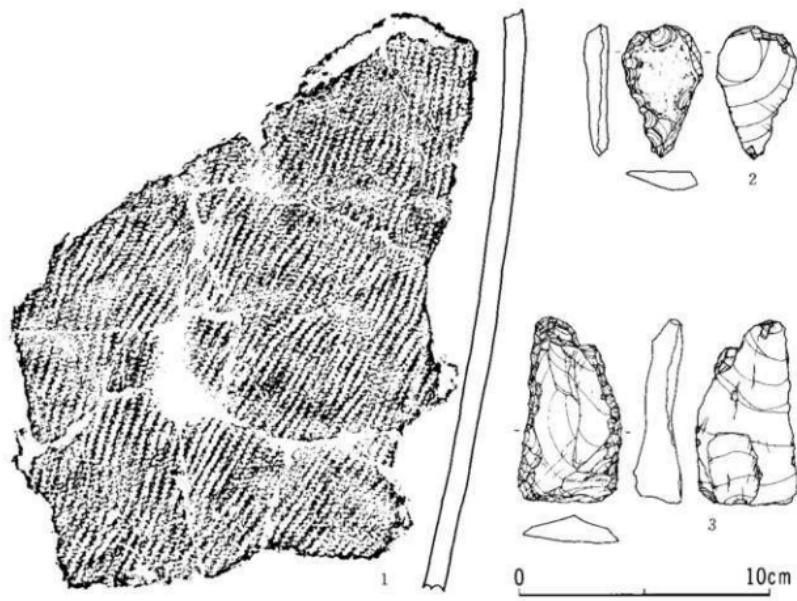
【炉・堆積土】 石組炉である。規模は90cm×80cmで、8個の偏平な河原石を東辺に3個、西辺に2個、北辺に1個、南辺に2個、配置して四角形に作られている。西辺の外側には、小さめの石が2個添えられている。炉内堆積土は2層に分けられる。第1層黒褐色土は、第V層に近似する。炉底面には、50cm×40cmの範囲で焼面が認められ、深さ3cm~5cm程が焼土化している。焼土面は、西片側に偏っている。西片側の石だけに被熱が顕著に認められた。

【炉掘形】 石組と同じ四角形に掘り込まれている。深さは最大20cmで、意図する各部位に合せて掘られている。石は底面と接しているが、周壁からは離れており第1層と同色の土で埋められている。

【出土遺物】 床の硬化面から粗製土器が出土したほか、石組みから70cm程離れて床面と思われる第



第6図 第1号・第2号住居跡 炉



第7図 第1号・第2号住居跡・出土遺物

VII層面に張り付いた状態で、不定形石器が出土した。

[小結] 本グリッドからは、縄文時代中期末から晩期までの土器が混在して出土している。炉跡出土土器から、上記いづれかの時期の住居であったと思われる。

第2号住居跡（第6図）

[位置と確認] 調査A区西側G17グリッドの調査区境界に近接して位置する。南西側に50cm程離れて、第1号住居が位置している。本遺構は、第VI層掘り下げ時に第1号住居炉跡と同時に検出した。検出の状況は、第1号住居炉跡とほぼ同じである。

[平面形・規模] 規模は60cm×50cmで、偏平な河原石を北辺と南辺に各1個、ほぼ平行に配置し、これと直行する様に第VII層を掘り残して土堤としている。全体形はほぼ方形である。土堤から内部までの深さは最大12cmである。

[堆積土] 堆積土は黒褐色の單一層で、第V層に近似する。

[炉掘形] 設置された石は、石とほぼ同形の掘形をもち、底面及び掘形壁と接して設置されていた。

[床・硬化面] 本遺構の内側と周囲は硬化しており、硬化面は傾斜しながら第1号住居炉跡の硬化面へ連続している。土堤は硬化面より更に硬く、赤変は見られないがが焼土化していた可能性がある。

[小結] 本遺構については、第2号住居炉跡として報告したが、前述のとおり確証に乏しい。硬化面が第1号住居炉跡の硬化面に統くことから、第1号住居の何らかの施設であった可能性も考えられる。遺物についても特定できず、時期については不明である。

第3号住居跡（第8・9図）

【位置と確認】 調査A区E19グリッドに位置する。北側は削平された現道法面となっている。本遺構は、第VII層面で東側が開いたコの字状の石組を検出した。

【重複】 本遺構と重複して黒褐色の落ち込みを確認し、調査によりこれらが風倒木痕であり、本遺構が大きく壊されていることが判明した。

【平面形・規模】 風倒木による攪乱のほか、掘り下げ時に住居周壁を掘りとばしてしまったため平面形及び規模は不明である。東側付設部の北側、攪乱と攪乱の間に僅かに壁の立ち上がりが残っている。遺存している壁高は15cm程度である。

【床面】 第VII層の基盤層上面を床面としているため、検出面そのものが床面であった。石組部と付設部の底面は、かなり硬かったが周囲については特に感じられなかった。

【柱穴】 本遺構の周辺から6個の小穴を検出した。いずれの小穴も本住居に付随する可能性がある。

【炉・堆積土】 調査により石組炉であることが判明した。形状は、円形に配置された石組部の西側と東側に隅丸方形の掘り込みが付設する。規模は2.20m×1mである。石組部は、大型の10個の偏平な河原石を円形に配置し、その間に小型の石を充填して作られている。付設する掘り込みのうち、西側のものは、風倒木により一部壊されているが、ほぼ方形に作られていたものと思われる。検出面からの深さは10cmほどである。付設する東側のものは、石組部から連続して北壁と南壁に石が設置されている。東壁直下は、30cmほどの幅をもって一段深く掘られている。

炉内堆積土は、黒土と褐色土の混合する層である。石組部と西側付設部の底面に焼面が認められた。石組部の焼面は底面全体に見られ、底面から10cm程の深さまで焼土化している。石組の内側も強く被熱していた。西側付設部の焼面は、30cm×40cmの範囲に見られた。石組部に比べ焼成は強くなく、底面から2cm～3cmの深さが焼土化していた。

【炉掘形】 石組部の掘形は、実際の形状をある程度意図して掘られている。しかし、設置される石は底面や周壁と密着しているものと、離れて埋められているものがあり掘形とは完全に一致してはない。東側の付設部も同様である。西側付設部の南北壁にも横円形の掘形が平行してある。北側の掘形は、設置される石の倍の長さの掘形である。南側の掘形は石が抜き取られたものと考えている。

【出土遺物】 遺存する壁近くの床から粗製土器片が出土した。

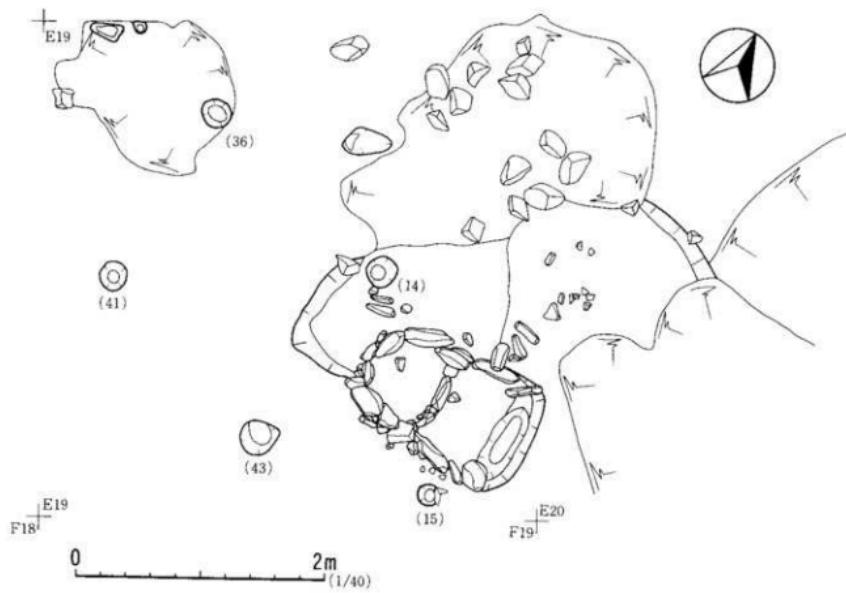
【小結】 本遺構は、複式炉タイプの炉をもつ住居跡であったと考えられる。東側の付設部は、石組部の前部であり、西側の付設部は、本来の複式炉であれば土器埋設部に相当するものと考えられる。炉の形態から、縄文時代中期末の時期に比定されるものと考えている。

第4号住居跡（第10図）

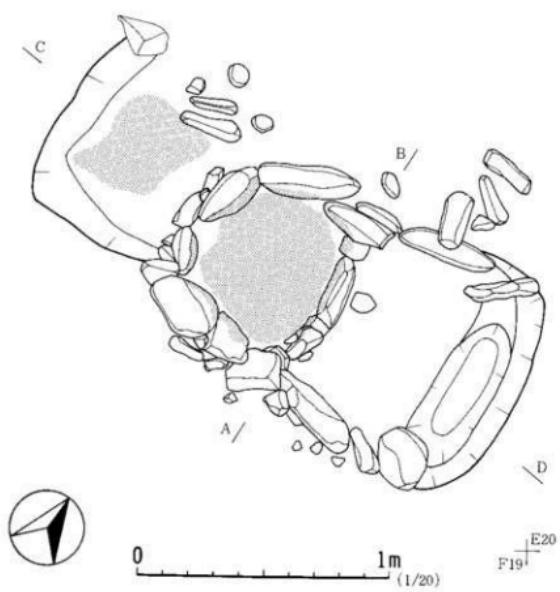
【位置と確認】 調査B区西端部A8グリッドに位置する。南側に第6号住居跡が位置している。本グリッドの周囲は、攪乱が激しく第I・II層直下が第VII層の基盤層となっている。本遺構は、第II層掘り下げ時に、方形に配置された石組として検出した。

【平面形・規模】 周壁を確認することができなかっただため不明である。

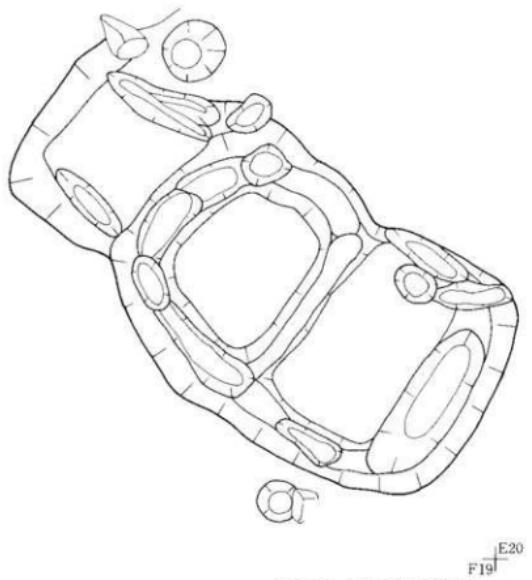
【床面・硬化面】 第VII層の検出面が床面となっている。石組炉の周囲に約1.5m～1mの範囲で踏みしめられた様な硬化面が認められた。



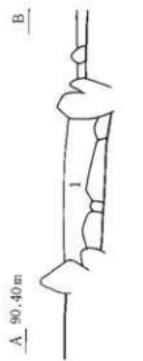
第8図 第3号住居跡・出土遺物



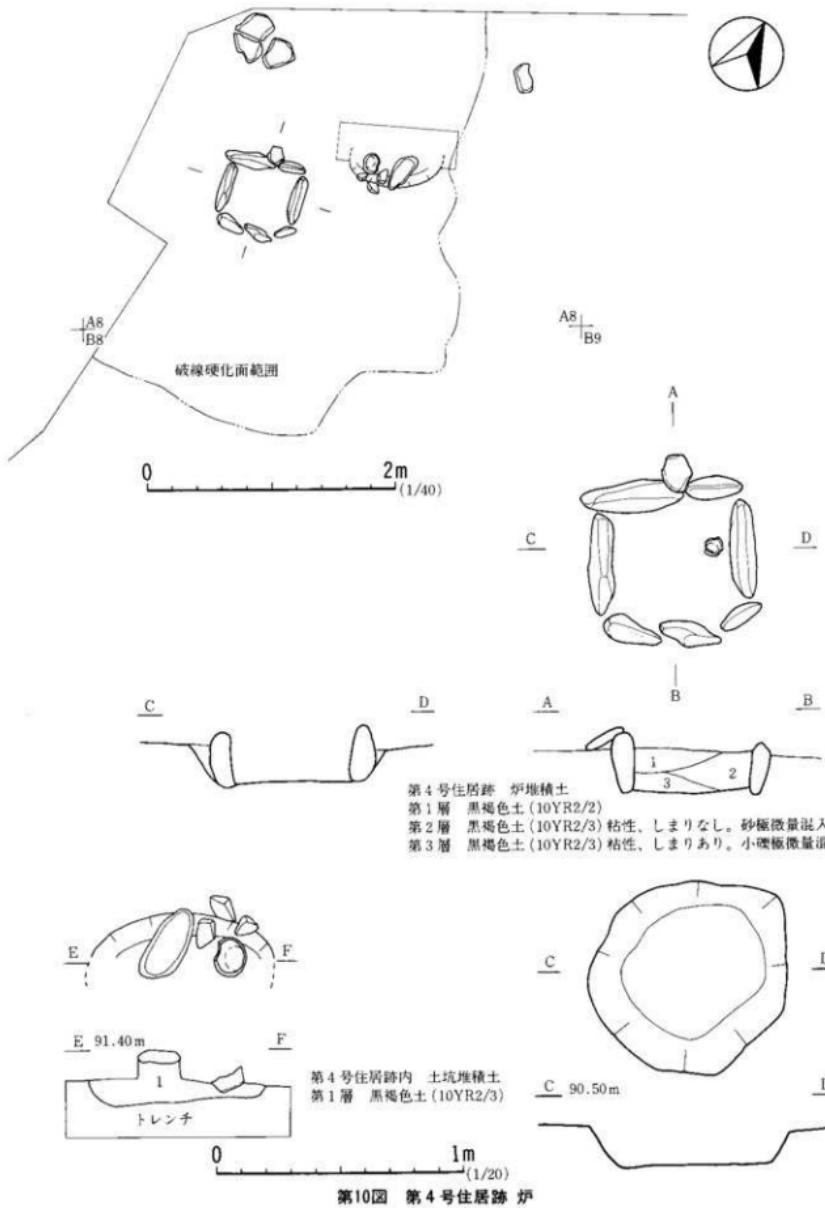
第3号住居跡 炉
第1層 黒褐色土 (10YR3/1)



C 90.50m



第9図 第3号住居跡 炉



[柱穴・土坑] 周囲から柱穴らしき小穴は検出できなかった。石組炉から50cm程離れて土坑が作られてある。住居跡に伴う可能性が高い。

[炉・堆積土] 石組炉である。規模は70cm×65cmで、7個の偏平な河原石を東辺と西辺に各1個、北辺に2個、南辺に3個、配置して方形状に作られている。炉内堆積土は、3層に分けられた。黒褐色土を主体にし、第3層中に極少量の焼土粒と炭化物が見られる。炉底内には、赤変した焼面は確認できなかつたが、かなり硬化していた。焼けているものと判断した。

[炉掘形] 石組とほぼ同規模の不整円形の掘り込まれている。深さは最大16cmで、個別の石を配置するための掘形は持たない。石は炉底面と接しているが、周壁からは離れており第1層と同色の土で埋められている。

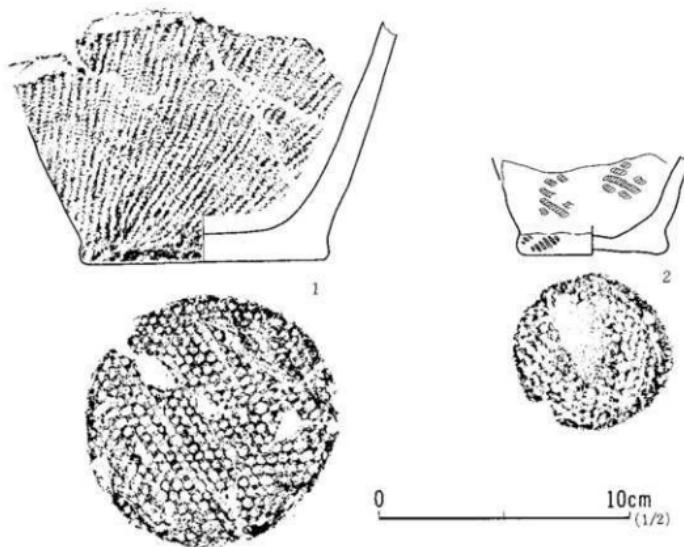
[出土遺物] 石組炉堆積土、第1層中より小型土器の底部が出土した。また、炉跡東側の土坑から土器底部が出土した。炉の北側に厚い偏平な礫が並んでいた。台石として機能したものと考えられる。

[小結] 本グリッドからは、現代の遺物と縄文中期末から晩期までの土器片が混在して出土しているが、炉跡出土土器から、上記のいずれかの時期の住居であったと思われる。

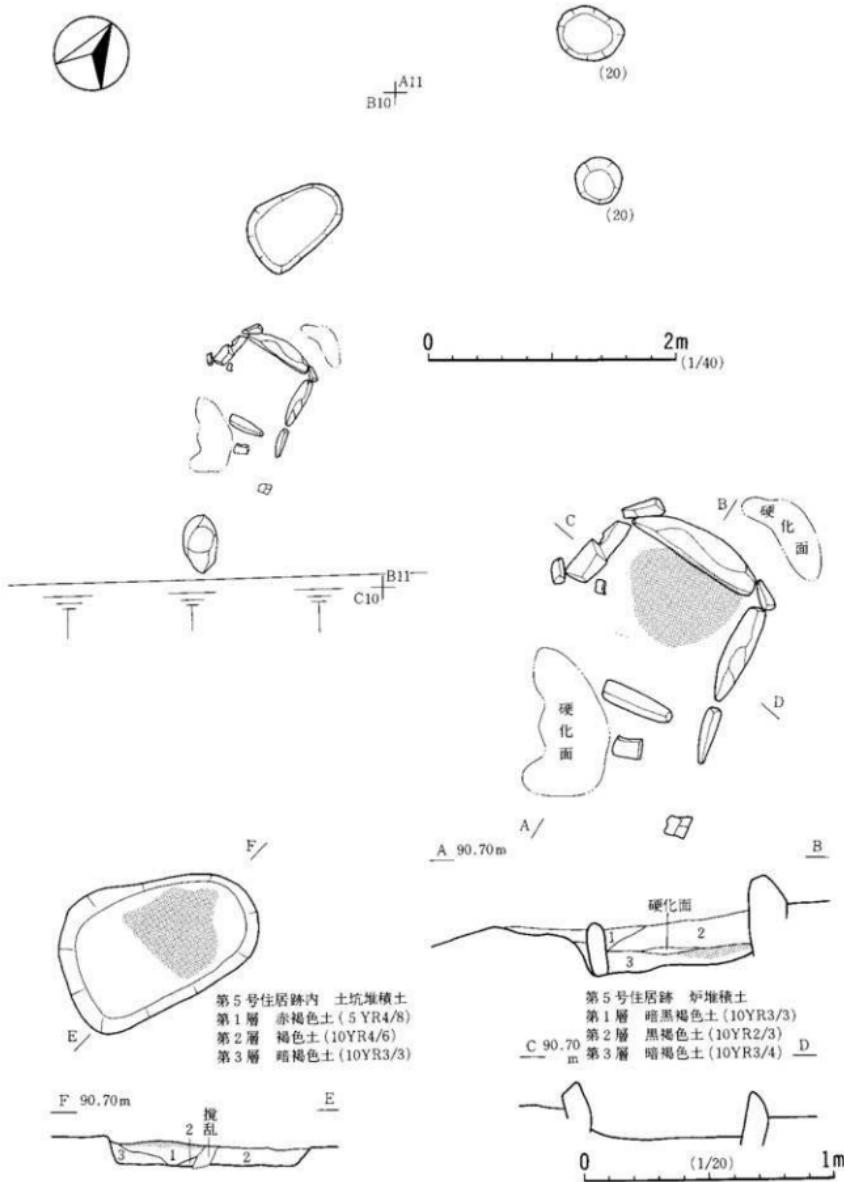
第5号住居炉跡（第12図）

[位置と確認] 調査B区中央部A10グリッドに位置する。第V層中に、南側が開いたコの字状の石組を検出した。石組内に焼面を検出したため、本遺構も第1号住居の炉と同様に住居炉として扱った。

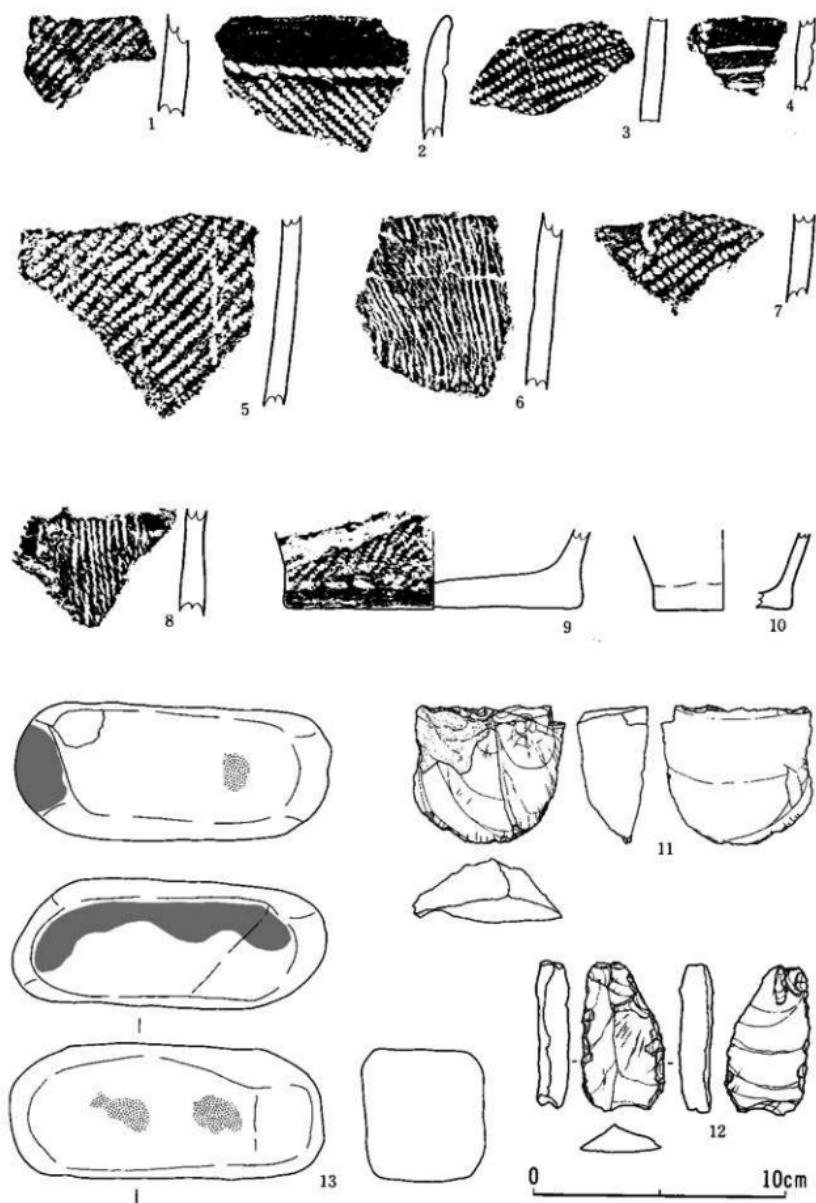
[平面形・規模] 周壁を確認することはできなかつたため不明である。



第11図 第4号住居跡・出土遺物



第12図 第5号住居跡 炉



第13図 第5号住居跡・出土遺物

【床面・硬化面】 検出面が床面となっていたものと考えられる。石組炉の北側と南側の一部に踏みしめられた様な硬化面が認められた。

【柱穴・土坑】 石組炉から3m程離れて2基の小穴を検出したが、炉跡に関連するものか不明である。また、炉跡の北側に50cm離れて土坑が作られてある。堆積土第1層上面に赤褐色の焼土が40cm×30cmの範囲で確認された。炉跡に関連するものと考えられる。

【炉・堆積土】 石組炉である。規模は80cm×80cmで、5個の偏平な河原石を北辺に1個、西辺に1個、東辺に2個、南辺に1個、配置している。北辺の両隅に小型の石を挟みこんである。炉内堆積土は3層に分けられる。黒褐色土を主体とする。第2層は、かなり硬化していた。焼面は、炉底面ではなく第3層上面で確認した。約3cmの深さまで焼成していた。第3層には焼土粒と炭化物が見られた。

【炉據形】 図面作成の不手際から図示できないが、個別の石を配置するための掘形をもっていた。南辺の石は底面と接しているが、周壁からは離れており第1層と同色の土で埋められている。

【出土遺物】 石組炉の南側、硬化面と同一レベルで粗製土器と石器が出土している。

【小結】 本グリッドからは、縄文時代中期末から晩期までの土器片が混在して出土している。出土した粗製土器から、上記のいずれかの時期の住居であったと思われる。

第6号住居跡（第14図）

【位置と確認】 調査B区A9グリッドに位置する。西側に第4号住居跡がある。本遺構の周囲は、擾乱が激しく第I・II層直下が第VII層の基盤層となっている。第VII層面精査中に、黒褐色の不整な落ち込みと、西側に多量の礫を混入する黒色土が重複して検出された。調査の結果、この黒色土の落ち込みは大きな風倒木痕であることが判明した。本遺構の南側は、道路建設の際に削平されている。

【堆積土】 黒褐色土の単一層である。層中に極少量の焼土粒と炭化物が見られた。

【平面形・規模】 西側を風倒木により擾乱されているため不明である。遺存している形状は不整形であるが、おそらく円形ないし橢円形であったと思われる。

【壁・床】 遺存する周壁は脆く、高さは北壁で38cm、東壁で22cmから6cmある。床面に堅さはなく、北側から南に傾斜している。所々に小さな起伏が見られ、北側壁直下から1m程離れてさらに一段傾斜しながら下がる。礫が集中する部分に、貼床された様な痕跡があったが、範囲を確定できなかった。

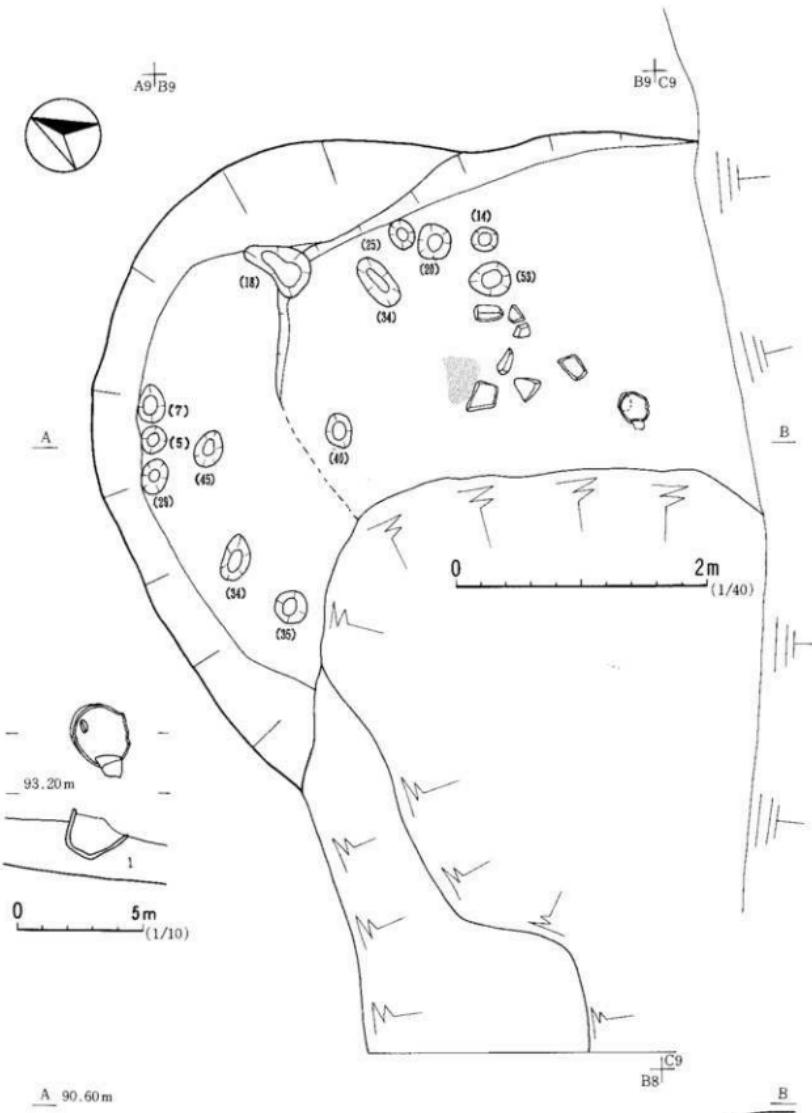
【柱穴】 壁直下とその付近から、13個の小穴を検出した。規模は20cmから45cmで、ほぼ橢円形である。深さは最大で53cm、最小で7cmである。

【炉】 住居のほぼ中央に、約40cm×30cmの範囲で焼面が検出された。焼面の焼成は1cmと浅く、さらに、焼面を断ち割ったところ、焼面の下から別の焼面を検出した。下位の焼面の周辺には、長橢円形と円形の掘り込みが11個検出された。長橢円形のものは、石の抜き取り痕と考えられ、下位の焼面=旧炉を壊し、上位焼面=新炉を作ったものと考えられる。上位焼面の周辺に礫が散在しているが、関連性は見いだせなかった。下位焼面を覆っていた土に関しては範囲を限定できなかった。

【出土遺物】 堆積土中より粗製土器が出土した。炉周辺の礫には、使用痕跡は認められなかった。

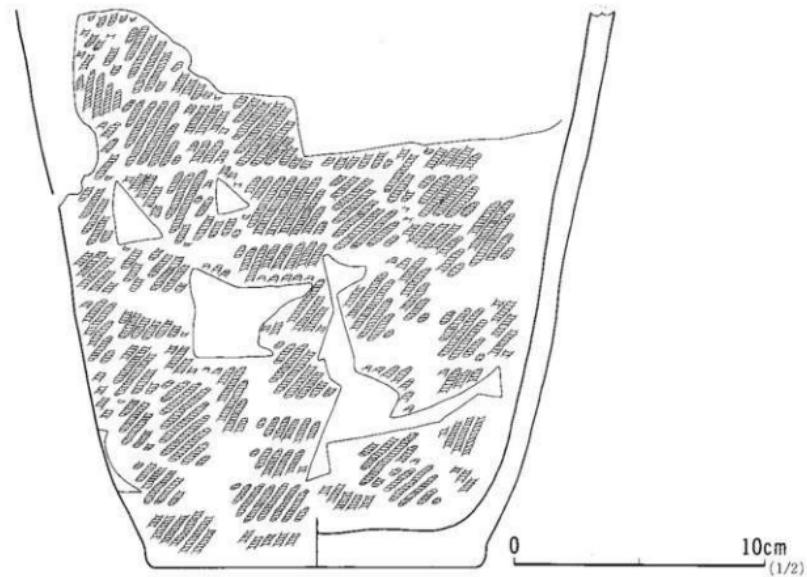
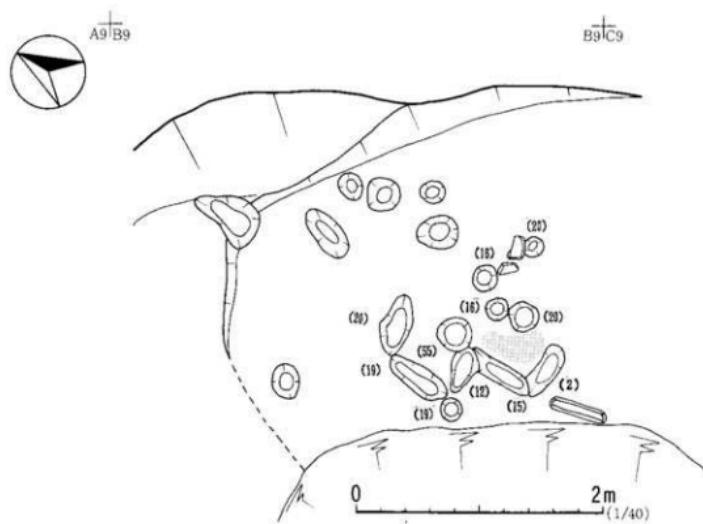
【小結】 本遺構は、道路建設時の削平や風倒木により大きく破壊されている。炉跡と考えられる焼面の重複から、調査時点では炉の作り替えと判断した。しかし、住居プランの屈曲する部分や床面の一段下がる部分など、住居自体が重複している可能性も考えられる。

（小田川）



第6号住居跡 土層
第1層 黒褐色土 (10YR3/1)

第14図 第6号住居跡



第15図 第6号住居跡 旧炉・出土遺物

2. 土 坑

本遺跡の調査では、総数24基を検出した。すべて調査A区にある。

第1号土坑 (第16図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、E 18グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は、西側が張り出している不整形である。規模は、長径201cm・短径164cmである。

【壁・底面】 壁は、東側が中端において段を有するが、他の壁は上端から底面にかけて、なだらかに傾斜している。壁高は、東壁15cm・西壁34cm・南壁26cm・北壁37cmである。底面には、起伏がある。

【出土遺物】 繰が2個出土した。

第2号土坑 (第16図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F 18グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は、ほぼ円形である。規模は、長径106cm・短径104cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて、なだらかに傾斜している。壁高は、東壁32cm・西壁30cm・南壁33cm・北壁30cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 堆積土第1層と第5層から繰が出土した。

第3号土坑 (第16図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、E 19グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は、ほぼ円形である。規模は、長径101cm・短径89cmである。

【壁・底面】 壁は上端から底面にかけて、なだらかに傾斜している。壁高は東壁15cm・西壁16cm・南壁17cm・北壁15cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 堆積土中から5個の繰と、剝片が1点出土した。

第4号土坑 (第16図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F 19グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は北側に丸みを有する不整形である。規模は、長径76cm・短径68cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁18cm・西壁16cm・南壁16cm・北壁15cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第5号土坑 (第16図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F 19グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は北側が張りだしている楕円形である。規模は長径94cm・短径72cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁20cm・西壁17cm・南壁18cm・北壁20cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 底面から、偏平な礫が5個出土した。

第6号土坑 (第16図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F20グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は全体に丸みをゆうする不整形である。規模は長径137cm・短径104cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁10cm・西壁10cm・南壁11cm・北壁18cmである。底面は、北側が一段低くなっている。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第7号土坑 (第17・19図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F21グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は円形である。規模は長径58cm・短径49cmである。規模的には小穴群としたものとほぼ同じであるが、堆積土内より遺物が出土したため土坑とした。

【壁・底面】 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁27cm・西壁24cm・南壁26cm・北壁26cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 堆積土の上位から底面にかけて、廃棄された様な状態で、礫と深鉢形土器（口縁部から胴部にかけて残存）が出土した。土器は、縄文時代中期末葉から後期初頭の土器と思われる。

第8a号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F21グリッドに位置している。

【重複】 土坑の西側で第8b号土坑と重複しており、本土坑が新しい。

【平面形・規模】 平面形は円形である。規模は長径71cm・短径57cmである。

【壁・底面】 壁は上端から底面にかけてほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁54cm・西壁54cm・南壁55cm・北壁55cmである。底面は、鍋底状である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第8b号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F21グリッドに位置している。

【重複】 土坑の東側で第8a号土坑と重複しており、本土坑が古い。

【平面形・規模】 平面形は、残存部から推定すると梢円形である。規模は長径(77cm)・短径62cmである。

【壁・底面】 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁37cm・西壁36cm・南壁36cm・北壁45cmである。底面は、中央部が一段低くなっている。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第9号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F21グリッドに位置している。

【重複】 土坑の上面を風倒木で壠されている。

【平面形・規模】 平面形は、ほぼ橢円形である。規模は長径81cm・短径62cmである。

【壁・底面】 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁40cm・西壁44cm・南壁39cm・北壁38cmである。底面は、西側部分が一段低くなっている。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第10号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F22グリッドに位置している。

【重複】 土坑の上面を風倒木で壠されている。

【平面形・規模】 平面形は、ほぼ円形である。規模は長径66cm・短径57cmである。

【壁・底面】 壁は、東壁が底面から上端かけて垂直に立ち上がり、他の壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁42cm・西壁44cm・南壁45cm・北壁47cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 堆積土中より礫が出土した。

第11号土坑 (第18図)

【位置と確認】 調査区中央部の台地緩斜面、E30グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は、南側が張りだしている不整形橢円形である。規模は長径117cm・短径106cmである。

【壁・底面】 壁は、東壁が底面から上端かけてほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、東壁42cm・西壁39cm・南壁35cm・北壁41cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 底面中央部から礫が2個出土した。

第12号土坑 (第18図)

【位置と確認】 調査区中央部の緩斜面、F18グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は不整形である。規模は長径98cm・短径96cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁19cm・西壁20cm・南壁20cm・北壁19cmである。底面には、起伏がある。

【出土遺物】 堆積土中より不定形石器が1点出土した。

第13号土坑 (第16図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、F18グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は東側が張りだす橢円形である。規模は長径60cm・短径54cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁8cm・西壁7cm・南壁8cm・北壁7cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第14号土坑 (第18図)

【位置と確認】 調査区中央部の緩斜面、G27グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は不整方形である。規模は長径70cm・短径64cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁24cm・西壁26cm・南壁27cm・北壁29cmである。底面は、鍋底状である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第15号土坑 (第18図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、E24グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は南側が張りだす不整形である。規模は長径72cm・短径61cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁18cm・西壁15cm・南壁11cm・北壁12cmである。底面は、鍋底状である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第16号土坑 (第18図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、G19グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形はほぼ円形である。規模は長径67cm・短径66cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁11cm・西壁12cm・南壁11cm・北壁10cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第17号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、D21グリッドに位置している。

【重複】 土坑の西側で第18号土坑と重複している。新旧関係は不明である。

【平面形・規模】 平面形は、残存部から推定するとほぼ円形であったと思われる。規模は長径(73cm)・短径59cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁17cm・西壁20cm・南壁12cm・北壁19cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第18号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、D21グリッドに位置している。

【重複】 土坑の東側で第17号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

【平面形・規模】 平面形は不整円形である。規模は長径76cm・短径63cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁18cm・西壁16cm・南壁15cm・北壁17cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第19号土坑 （第17図）

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、D21グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は橢円形である。規模は長径79cm・短径58cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁12cm・西壁14cm・南壁13cm・北壁10cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第20号土坑 （第18図）

【位置と確認】 調査区西側の平坦面、G19グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は、南側が張りだす円形である。規模は長径49cm・短径46cmである。

【壁・底面】 壁は、上端ふら底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁11cm・西壁12cm・南壁13cm・北壁12cmである。底面は、ほぼ平坦である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第21号土坑 （第18図）

【位置と確認】 調査区東側の台地平坦面、H48グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は、南側が内側にえぐれている不整橢円形である。規模は、長径214cm・短径117cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁13cm・西壁14cm・南壁21cm・北壁19cmである。底面は、西側が一段低くなっている。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第22号土坑 （第18図）

【位置と確認】 調査区東側の台地平坦面、G48グリッドに位置している。

【平面形・規模】 平面形は、北側が張りだしている不整円形である。規模は、長径160cm・短径140cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁22cm・西壁24cm・南壁20cm・北壁21cmである。底面は、鍋底状である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

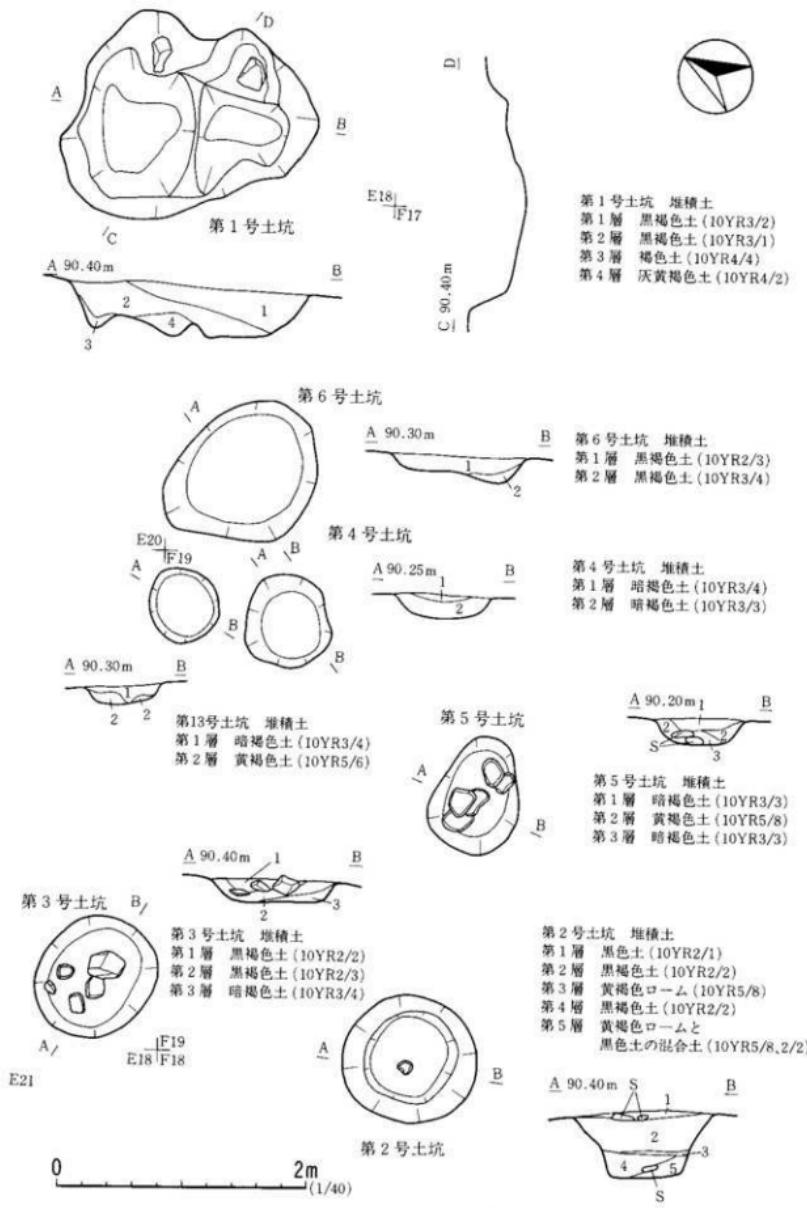
第23号土坑 （第18図）

【位置と確認】 調査区東側の台地平坦面、G46グリッドに位置している。

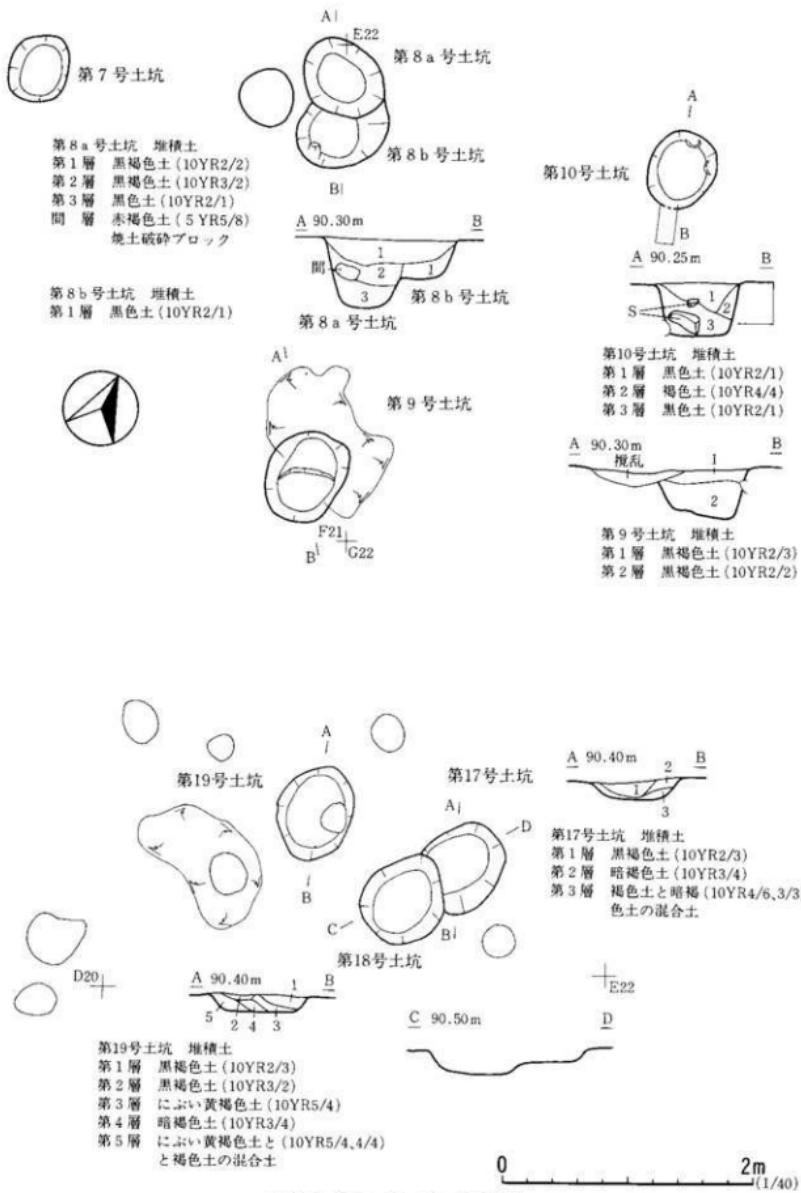
【平面形・規模】 平面形は、西側が直線的で東側が張りでている不整形である。規模は、長径251cm・短径164cmである。

【壁・底面】 壁は、上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁27cm・西壁26cm・南壁31cm・北壁38cmである。底面は、ほぼ平坦である。

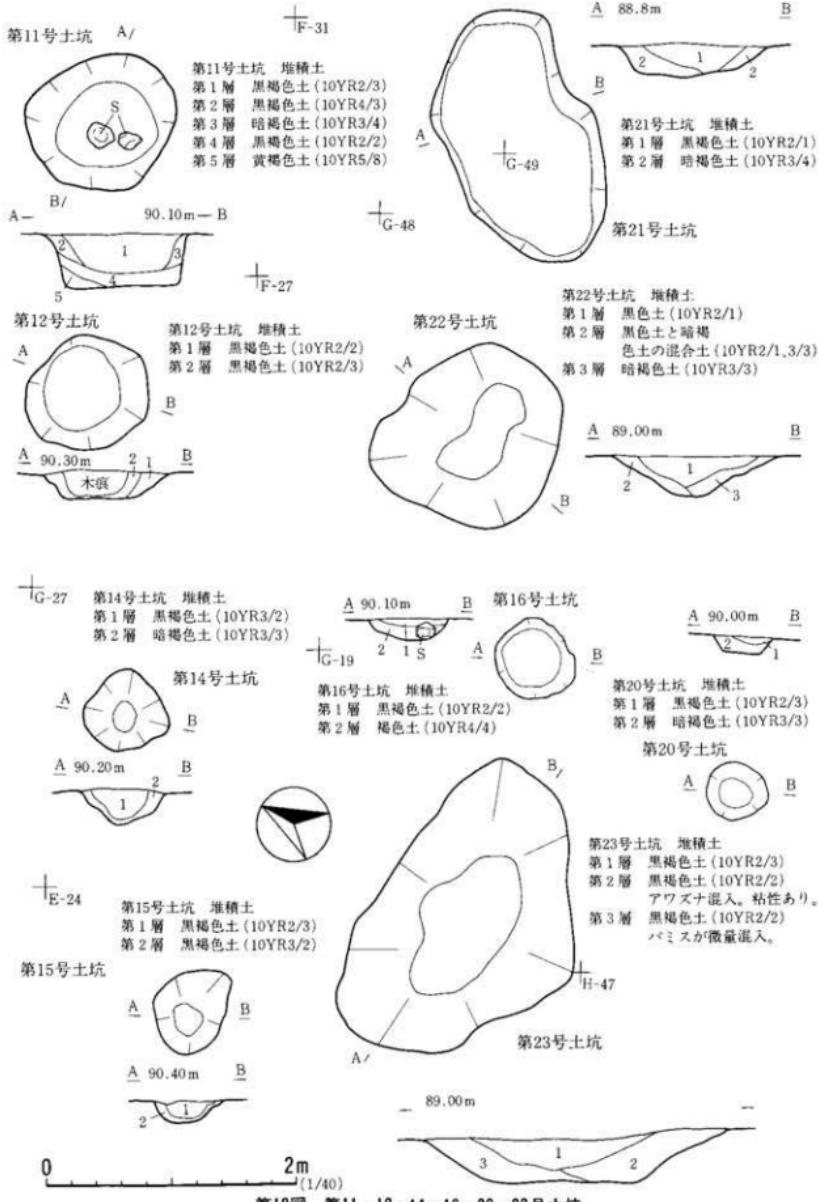
【出土遺物】 遺物は出土しなかった。



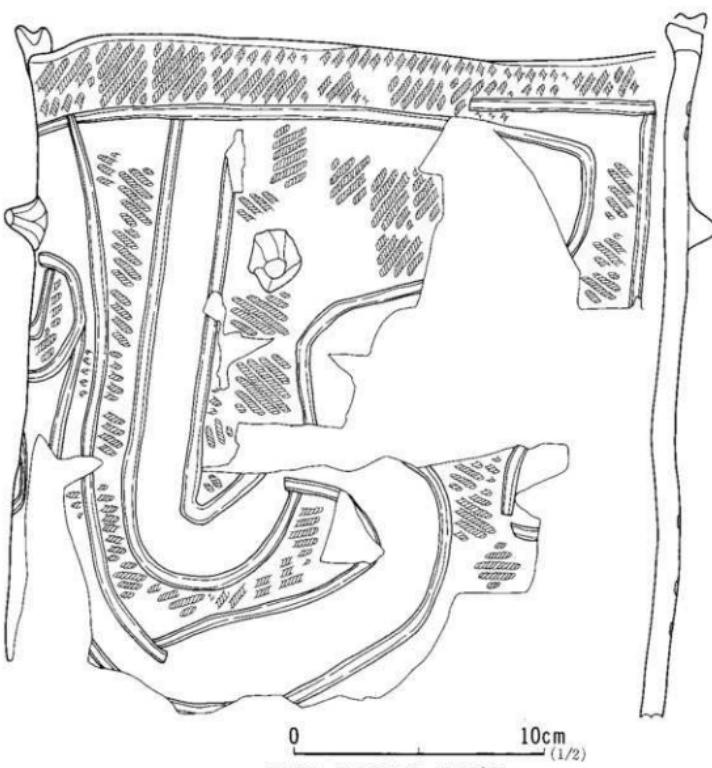
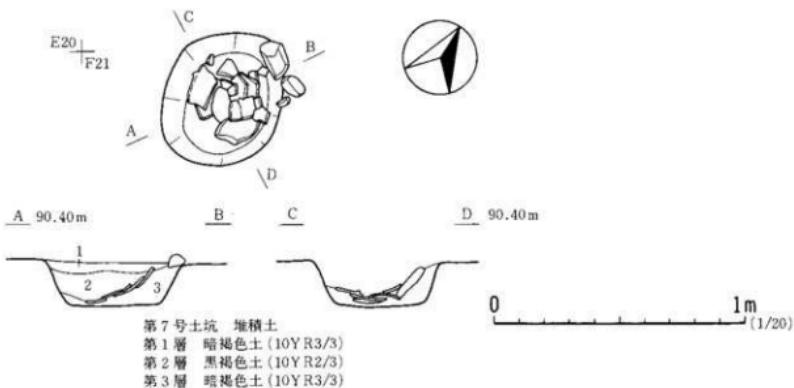
第16図 第1号～6・13号土坑



第17図 第7~10・17~19号土坑



第18図 第11・12・14~16・20~23号土坑



第19図 第7号土坑・出土遺物

3. 小穴群 (第20図)

調査A区西側の住居跡と土坑が作られてある周辺からは多数の小穴を検出した。検出面は第VII層上面である。まとまりの範囲からA群とB群に分けた。

A群は、F・G 17～19グリッドの範囲に位置し、総数24個ある。小穴の平面形状は、橢円形と円形である。規模は、開口部径で最大65cm、最小で25cmである。深さは、検出面から最大38cmある。大半は20cm前後の深さである。形状と深さにバラツキがあり、特に規則性も見られない。時期については不明である。

B群は、D・E 20～22グリッドの範囲に位置する。総数25個である。小穴の平面形状は、橢円形と円形である。規模は、開口部径で最大50cm、最小で20cmである。A群に比べ小型で、やや密集している。深さは、11cmから最大49cmである。A群と同じく、規則性は見られない。時期についても不明である。

(小田川)

4. 道 跡 (第21図)

本遺構は、平成4年度の試掘調査でタタキ状遺構として検出されている。本調査でも、表土撤去後に第II層上面で、2条～6条の硬く締まった面で検出した。(硬化した面を以下、硬化面と表記する)

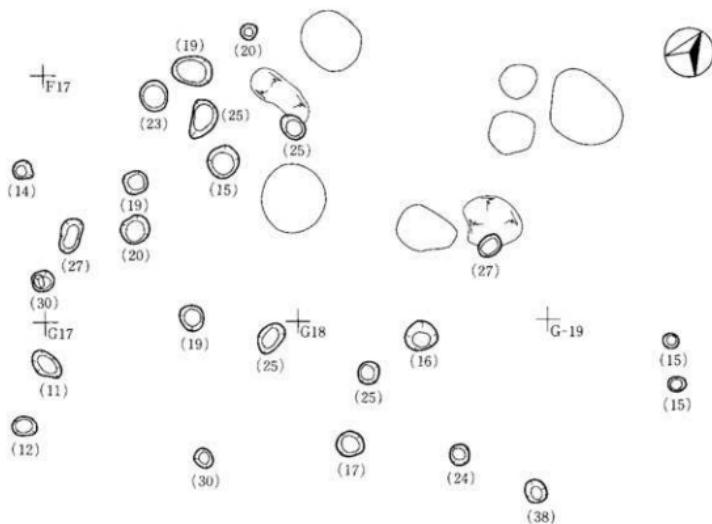
硬化面は、溝状に調査区を東西に延びている。硬化面の最大幅は約1.2m、最小のもので30cm程ある。長さは、各硬化面が部分的に連続し、調査A区東側のグリッド47ラインから調査区境界まで、最長40mある。硬化面は、第II層の土が硬化したもので、大部分に下層の第III層の十和田a火山灰を混入させている。上面は小さな凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。

試掘調査の結果では、調査区境界からさらに東側へ70m程延びているらしく、また、グリッドD・E 28～31の範囲でも、とぎれとぎれに小規模な硬化した面を検出している。このことから、本遺構は、調査B区の東側から調査A区を通りさらに東側に延びているものと思われる。

聞き取り調査により、調査区の付近に、明治から大正時代にかけて伐採木運搬の林道があったことが判明したことから、本遺構はその林道の轍跡の可能性がある。

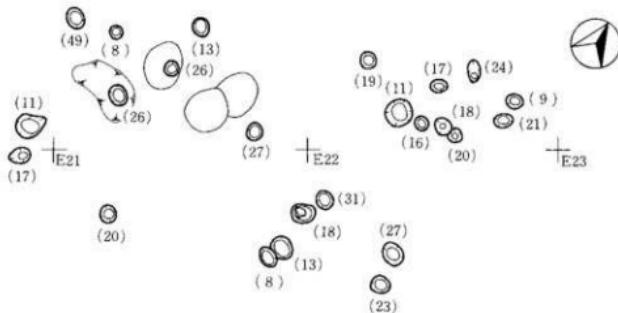
轍跡から推察される道幅は、およそ2～3m程であったと思われる。使用期間は不明であるが、調査区内の立木の樹齢が50～60年であることから、昭和初期には廃道となっていたものと考えられる。

(小田川)



小穴群A

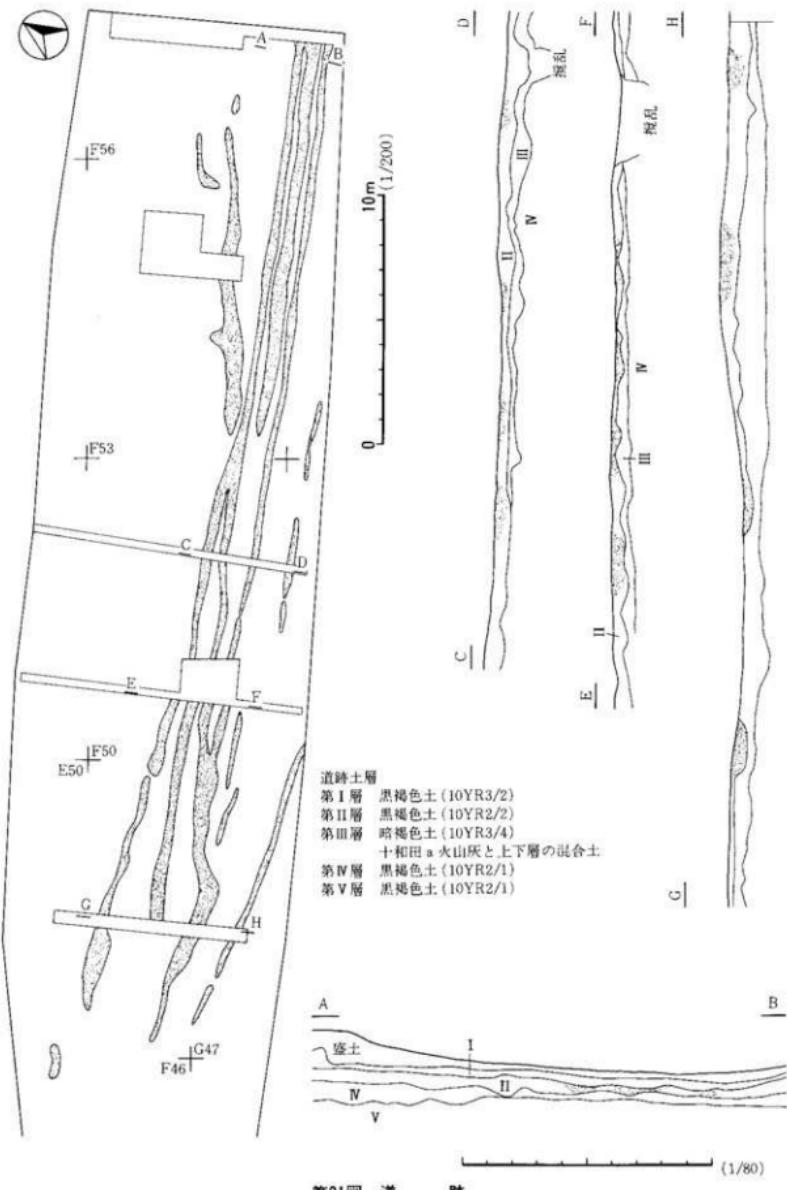
0 4m
(1/80)



小穴群B

F22 (16) F23

第20図 小穴群A・B



第21図 道
跡

第2節 遺構外出土の遺物

1. 遺構外出土土器

土器の名称及び分類は、次の通りである。

第I群—縄文時代早期の土器。

a類—早期の白浜・小船渡平式前後に位置すると思われる土器。

第II群—縄文時代前期の土器。

a類—前期前葉の表皿XIII群（青森県教、1989）又はその前後に位置すると思われる土器。

b類—前期後半の円筒下層式と思われる土器。

第III群—縄文時代中期の土器。

a類—榎林式に比定される土器。

b類—最花式に比定される土器。

c類—大木10式に併行すると思われる土器。

第IV群—縄文時代後期の土器。

a類—後期初頭、牛ヶ沢(3)遺跡（青森県教、1984）第III群土器に相当する土器。

b類—十腰内I式に含まれると思われる土器。文様構成でさらに4類に分類した。

IVb-1類 磨消縄文による文様を持つもの。

IVb-2類 沈線のみで文様モチーフを構成するもの。

IVb-3類 刷毛目状沈線を施した沈線区画帯によってモチーフを構成するもの。

IVb-4類 その他無文土器等。

c類—a・b類に含まれない後期の土器。

第V群—縄文時代晚期の土器。

第VI群—縄文時代中・後・晩期の粗製・無文土器。

a類—口縁部に無文帶を持つ深鉢の類。

b類—a類を除く、区画された文様帶を持たない類。

VIb-1類 口縁形状が外反気味になる類。

VIb-2類 口縁形状が直立する類。

VIb-3類 口縁形状が内傾気味になる類。

C類—口縁部以外の胴部・底部片の類。

第I群土器（第22図）

縄文時代早期の土器。

Ia類 早期の白浜・小船渡平式前後に位置すると思われる土器である。

復元個体ではなく、破片で36点出土した。16・20・23と、14・17・19・21・26は、それぞれ同一個体のようである。

胎土中に明瞭に纖維混入の痕跡のあるものは少ない。砂粒が多く混入され纖維が認められないもの（7・14・17・19・21・26）もみられる。焼成、色調にはばらつきがあるが、灰褐、黄橙、黄灰色

等が多い。焼成は全体的に非常に良好で、硬質な焼きのものが多い。

全体器形の把握できるものはないが、全て尖底の深鉢と見られる。底から口縁までの形状は、目立った変化点なくスムーズに立ち上がるものがほとんどと思われるが、直線的に開くと思われるものの(1)、キャリバー状を呈すると思われるもの(11)もある。口縁は断面がやや尖り気味で、全て平口縁になるようである。

文様要素は口縁部で①貝殻腹縁文(1~6・11)②爪形刺突文(2・7~12・16)③ヘラ状工具による刻み(9)、④竹管状工具による刺突(1・2)、⑤単節斜縞文(10)がある。胸部で⑥複節斜縞文(1・13)、⑦条痕(12・14~25・27~31・33・34)が施される。無文部も見られる(26・32)。

①貝殻腹縁文によるモチーフで連続移動波状を呈するものはない。2~4本平行させての連続押圧によって文様帶の区画線とし、さらに区画線同士の連結や、余白を充填する事によって、羽状様のモチーフを作り出している。②爪形刺突文は①の区画帶内に列をなす場合(2・11)と、それのみで文様帶を作る場合(7~10)とがある。全て爪先によるものと思われ、半裁竹管使用のものは認められない。指の腹側にくると思われる粘土のめくれあがりは、顯著なもの(2・7・16)とそうでないものとがある。③ヘラ状工具による刻みと⑥単節斜縞文はそれぞれ1点のみの出土である。ともに口唇際に施文されている。④の竹管状工具としたものは、正円に近い圧痕で、径8mm、管の厚さは1mm(1)と薄い。⑥複節斜縞文は、擦りが細く施文も浅い。⑦条痕は胸部の地文として多く施文されているが、口縁部でそのまま、あるいはナデ消されて(3~5・11)から他の文様の下地になるものがある。

内面調整は条痕調整によるものが多いが、ナデもしくはミガキのものもある。

1片のみの出土だが、補修孔を持つ例(7)がある。

第II群土器(第23図1~14)

縄文時代前期の土器。

II a類(1~11)

前期前葉の表館XIII群、又はその前後に位置する土器群と思われる。

11片出土した。同一個体と思われる破片を含む(1・2、3~7)。復元個体ではなく、全体器形は把握できなかったが、丸底の深鉢になるとと思われる。かなり厚手の造りで、口縁下で厚さ1.5cmにも達するものもある。口縁断面は直下の厚みに比して薄作りだが、尖るという印象はない。繊維は多量に含まれる。そのため、厚みの割に手にしたときの重量感があまりない。

文様は全て縄文地文のみで、口縁部文様帶は形成しないようである。使用原体は、単輪絡条体第1類(1)が希にみられる他は、全て0段多条の2段の繩である。きわめて太い原体を使用しており、節の大きさが8mm×2mmに達するもの(1)もある。施文は深い。施文方向は横位・縦位を交互に繰り返しているため、天地軸をとる羽状縞文を所々形成している。

内面調整は、貝殻による条痕調整をさらにナデ消したものがあるが(1)、他には調整らしい痕跡は確認できない。粘土くずの付着が目立つところから、未調整ではないかとの印象を受ける。

II b類(12~14)

円筒下層式期のいずれかに属すると思われる破片である。

横位の不整燃糸文が施された口縁部片（12）と、燃糸圧痕の施された口縁部片（13）は纖維混入量が多く、焼きもろい。単軸絹条体の回転による木目状燃糸文様になると思われる破片（14）は纖維混入は少ないが、12同様砂粒は目立つ。

第III群土器（第23図15～第24図18）

縄文時代中期の土器。

III a類（第23図15）

榎林式に比定される土器。

1片のみの出土である（15）。やや内湾気味の断面形を呈すが口唇は膨隆しない。波頂部を欠失しているが、山形の突起を持ち、太い沈線で渦巻き状文様が施されていると思われる。

III b類（第24図16～30）

最花式期に比定される土器。

同一個体の破片を含む（23・24・25）。

胎土は、砂粒が多いもの（22～25）は希で、砂粒の目立たない、比較的密なものがしめる。断面でみれる胎土の色調も、黄橙色系に集中する。砂粒の多いものは、赤褐色で焼成も堅緻である。

口縁部片は全て折り返し状口縁を呈し、折り返し状部分が無文帯となり丁寧にミガキが施されるもの（16～19）と、胴部と区別されない纏文地文がはいるもの（20）がある。器形は、口縁断面形が外反気味のもの（16・17・20）、やや外反の強いもの（18）と内湾するもの（19・30）があり、前2者は深鉢に、後者は深鉢乃至広口の壺形土器になると思われる。口縁部片ではないが、折り返し状によってではなく、2列の竹管状刺突によって地文と区画された無文帯を持つもの（22～25）もある。器形はいわゆる広口壺形になると思われる。胴部文様は、垂下する2～4本組の沈線によるもの（20・26～28）が多いが、逆U字文と識別できるもの（16・21）、ワラビ状懸垂文のモチーフをとるもの（29）等が見られる。

内面調整は比較的丁寧なミガキが多いが、荒いナデのみのもの（18）もある。胴部内面には焼けはぜたような剝落の目立つもの（21・27・38）が見られる。地文は単節L R・R Lが最も多く、希に無節（22）がある。

また、大木9式と思われる破片（30）が出土している。

III c類（第23図31・32、第24図1～18）

中期末葉、大木10式に併行すると思われる土器。

同一個体と思われる破片（1・4）を含む。

胎土に含まれる砂粒は、他の群に比べて少ないながらも、粒が大きい傾向がある。焼成は概して良好だが、やや不良なものが目立つ。色調は褐灰、灰黄褐が多い。

器形の全体が分かる資料は少ないが、多くは深鉢で、若干壺形（2・16）が含まれる。深鉢は胴下部が膨らみ気味のものが多い。口縁部片のほとんどは外反する。

文様要素は①纏文と沈線の組み合わせ②燃糸圧痕（1）③竹管状刺突（11・12・14）、立体装飾として④隆沈線（9）⑤館状隆起（10・15・16・18）⑥隆起帶（2・14・15）⑦橋状取手（2）⑧疣状の突起（12）である。

文様構成は、①では地文繩文の構成を取るもの（31・32・6）と、磨消繩文とがある。復元個体が少ないためモチーフのわかる例は少ないが、J字状（36）、波頭状（35・8）、逆U字状（1）を呈するものが多いと思われる。2は電話の受話器を逆さまにしたような形のモチーフである。繩文は単節に次いで、縦位の単軸絡条体第1類が多用される（2・5）。②の撚糸圧痕は、波状口縁の波頂部口唇に施されている。③の竹管状刺突は、⑧の頂部に付される場合（12）が多く、他に磨消部（11・12）、又は隆起帯の両側に沿って（14）点列される傾向が見られる。⑤の鱗状隆起は胴部（16）、口縁部外面（14・15・18）に見られる。内1片は、隆起全面に地文が施されている（16）。

成形は、識別可能なもの全て、外面押さえ内面引き上げである。

第IV群土器（第25図1～第26図25）

縄文時代後期の土器。第VI群土器に次いで最も多く出土した。

IV a 類（第25図1～3）

後期初頭、牛ヶ沢（3）遺跡（青森県教、1984）第III群土器に相当する土器。

隆起帯を巡らして、口縁無文部と胴部地文を区画した口縁片（1・3）は、口縁断面が内湾する。口唇直下と隆起帯上に単節R Lが押压される（3）場合がある。他に、縦方向の撚糸圧痕によって、地文と無文部を区画した文様を持つ胴部片（2）がある。

IV b 類（第25図4～第26図18）

十腰内I式の範疇に含まれると思われる土器である。いくつか同一個体の組み合わせ（4・10、32・36・37）がある。

胎土は全体に砂粒が目立つ。焼成は良好だが、堅い印象のものはない。色調は橙色系にかたまる傾向にある。器種は深鉢が多く、口縁が開き気味で胴部上半の膨らみの強い深鉢・鉢形が多い。口縁は平口縁がほとんどだが、波頂部がいくつか小山状に分かれるもの（第25図4）等を含む波状口縁部片が若干出土している。文様帶の位置は胴部上半にかたまるようである。

IV b -1類（第25図4～25）

磨消繩文による文様を持つものである。

全て幅1cm程の細い磨消繩文帯によって文様が構成されている。二条の平行する磨消繩文帯によつて上下を区画し、満巻き状文様（4・6・7・23）とカギ状（22・24・25）等のモチーフを横位に展開させている。繩文は節の細かい単節R Lが多く、施文もほとんどが浅い。

IV b -2類（第25図26～40、第26図1～6）

沈線のみで文様モチーフを構成するもの。

繩文地文に沈線文様を施すもの（26・27・28）もみられるが、その他の多くは 直線主体の入り組み状文様（30～37）と②縦位に展開すると思われる稚拙な波状文（1・2・4・5）が目立つ。①②ともに地文に繩文は施されず、沈線は三本一組で用いるのが基本のようである。区画された口縁部文様帶には、窓状の沈線文が描かれる例がある。①の沈線は、幅5mm前後と、②や他の類と比べかなり太い工具を使用している。一例のみだが、沈線施文後に器面をナデ調整してある（30）。

IV b -3類（第26図7～10）

刷毛目状沈線を施した沈線区画帯によってモチーフを構成するもの。

刷毛目状沈線は、その深さ、太さが均一で、皆細く浅い。三~四本一単位の工具と思われる。施文手順は①区画沈線②刷毛目状沈線③④施工時の粘土くずのケズリ処理の順であると観察できる。モチーフの判別のできる資料は少ないが、ギザギザ状のもの(10)等が見られる。

IV b - 4類 (第25図41、第26図11~18)

無文の土器

いずれも器形は壺である。幅1~1.5cm程の粘土帶を、内面押さえ外面引き上げで接合、成形している。頸部、あるいは口縁部と思われる破片には、三条ほどの粘土貼付帶、又はつまみ出し状の隆線を持つもの(13~18)が多い。

IV c 類 (第25図40・41、第26図19~25)

IV a・IV b 類に含まれない後期の土器。

細い沈線による文様が施された破片(21・22、38)は、別類とはしたが、胎土・焼成等はIV b 類に似る。他に二条の区画沈線内に列点文がはいる口縁部片(19・23)、成形時の積み上げ痕が明瞭に残る口縁部片(39)、十腰内II式ないしIII式と思われる注口土器片(25)と胸部片(24)がある。

第V群土器 (第26図26~50)

縄文時代晩期の土器。

大洞B式(26~43)、BC式(44~46)、C₁式(47・48)、A'(49・50)にそれぞれ比定される破片が出土した。

第VI群土器 (第27図~第31図)

縄文時代中・後・晩期の粗製・無文土器。

特徴的な文様を持たない、無文あるいは地文のみの土器をこの群であつかった。VI a 類と、VI b 類の単軸絡条体が施文されるもの、縦位の原体施文がなされるものと口縁の外反するものの多くは、中期末葉~後期初頭にはいると思われる。

VI a 類 (第27図1~14)

口縁部に無文帯を持つ深鉢の類。

無文帯とは①折り返し状口縁(1・2)、②沈線(3・4)、③地文と同じ原体の燃糸圧痕(5・6・7)等によって区画されるものと、他の要素で区画せず、地文を同一線上で止めるもの(8~14)とが見られる。④には顕著な原体の閉端部痕が、無文部との境界になる例(10)がある。口縁は平縁で断面形状が直立するものが多い。原体は、④で縦位の単軸絡条体第1類が目立つ。③・④は胎土に砂粒が若干目立つ。

VI b 類 (第27図15~第30図)

VI a 類を除く、文様帯を持たない類。口縁形状によって三類に小別した。

VI b - 1類 (第27図15~第28図4、第30図30)

口縁形状が外反気味になる類。

全て平縁で、比較的口縁近くから外反するものが多い。口唇形状は丸くなるものが多く、次に削

り取ったような平坦面をもつもの（第27図20・25・30・33・34）が多い。また、この類には、口唇外端がめくれて玉縁気味に見えるもの（第27図15・17・18・22・23）もある。

原体は2段の繩、単軸絡条体第1類の順に多く使用されている。他に少量1段の繩（第27図17）による無節や、結節回転（第28図1・4）が見られる。いずれも、施文方向は縦位が大半を占めるが、口縁のみ横位施文する例（第27図32、第28図2）が若干存在する。成形は、確認できるもので外面押さえ内面引き上げである。器形は殆どが深鉢であるが、無文土器の口縁片（第30図30～33）では、広口の壺形なるものが多いと思われる。

VI b - 2類（第28図5～17、第29図1～4・15～18、第30図29）

口縁形状が直立する類。

口唇の断面形は、1類同様丸くおさまるか平坦面を持つが、平坦面に胸部と同じ原体が回転施文される例（第29図1・2）がある。原体は単節が最も多く、他に無節、単軸絡条体第1類がわずかに見られる。全体に節が細くなる傾向がある。施文方向は斜位、横位が多く、縦位は少ない。単軸絡条体第1類を、縦位・横位と重ねて施文している例（第28図17）等が、少数ながら見受けられる。

成形は、確認できるもので外面押さえ内面引き上げである。

刻み状口縁、B突きを持つ晩期の粗製土器（15～18）や、無文の口縁部片（第30図29）も、この類中に見られる。

VI b - 3類（第29図5～14・16）

口縁形状が内傾気味になる類。

全て平縁で、薄作りのものが多い。口唇部断面形状は丸くなるもの以外に平坦面を持つものがあり、よく磨かれている。使用される原体は、2段の繩が最も多く、1段や反燃りも少量見られる。2段の繩には異条になる例がある（第29図9）。いずれも施文方向の大半は横位と観察できる。成形は、確認できるもので内面押さえ外面引き上げである。

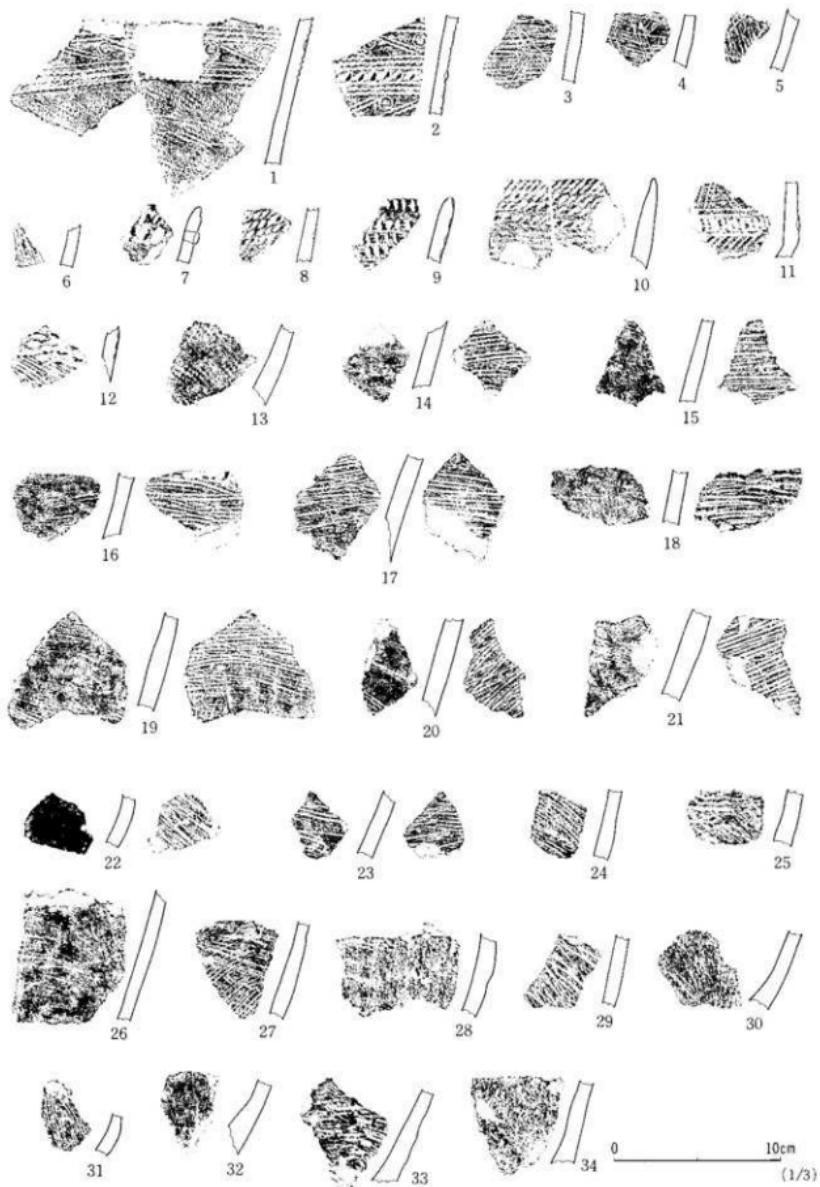
VI c 類（第30・31図）

口縁部以外の胸部・底部片の類。本来VI a・VI b類のいずれかに分類されるものである。

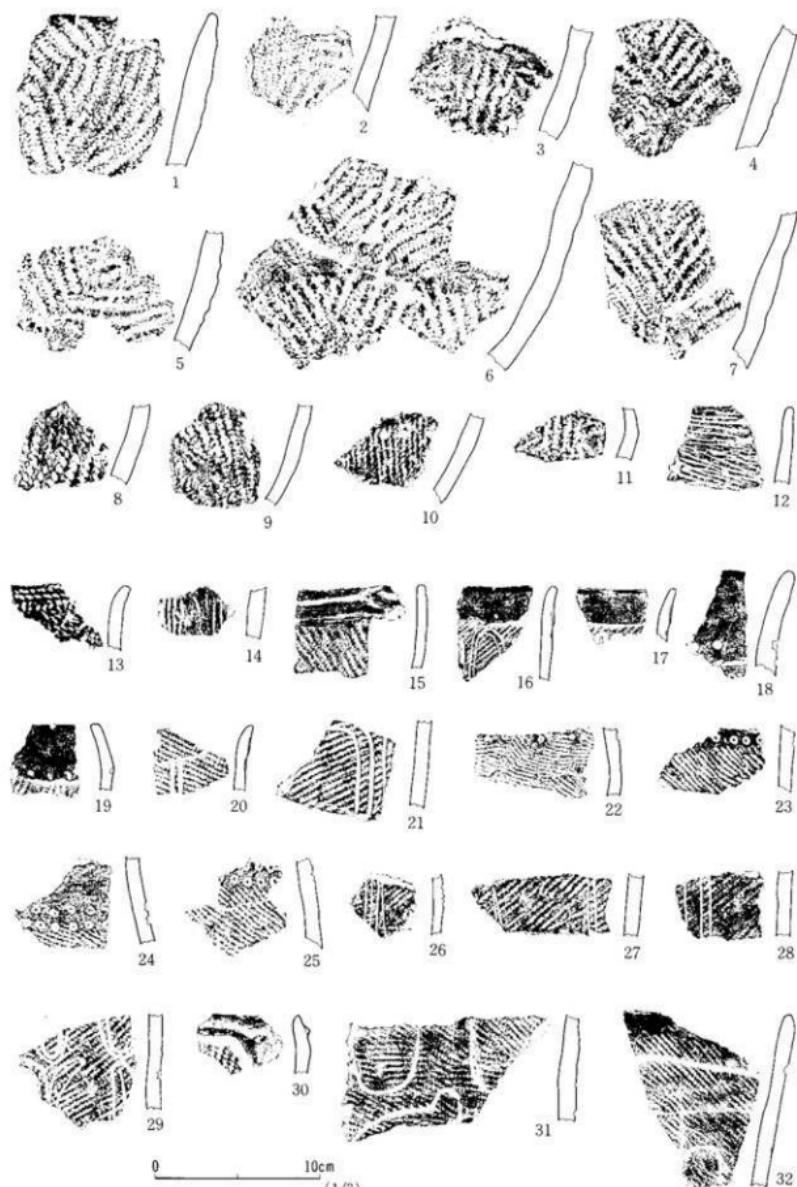
VI a・VI b類で確認できなかった原体として、単軸絡条体の第2類（第30図16）がある。

底部際ははりだす傾向にあり、ナデ、ミガキなどの調整の他、ケズリ（第31図11）などの器面調整が加えられる。また、底径5cm以下の小型土器を除く、ほとんど全ての底面に網代圧痕がつく。

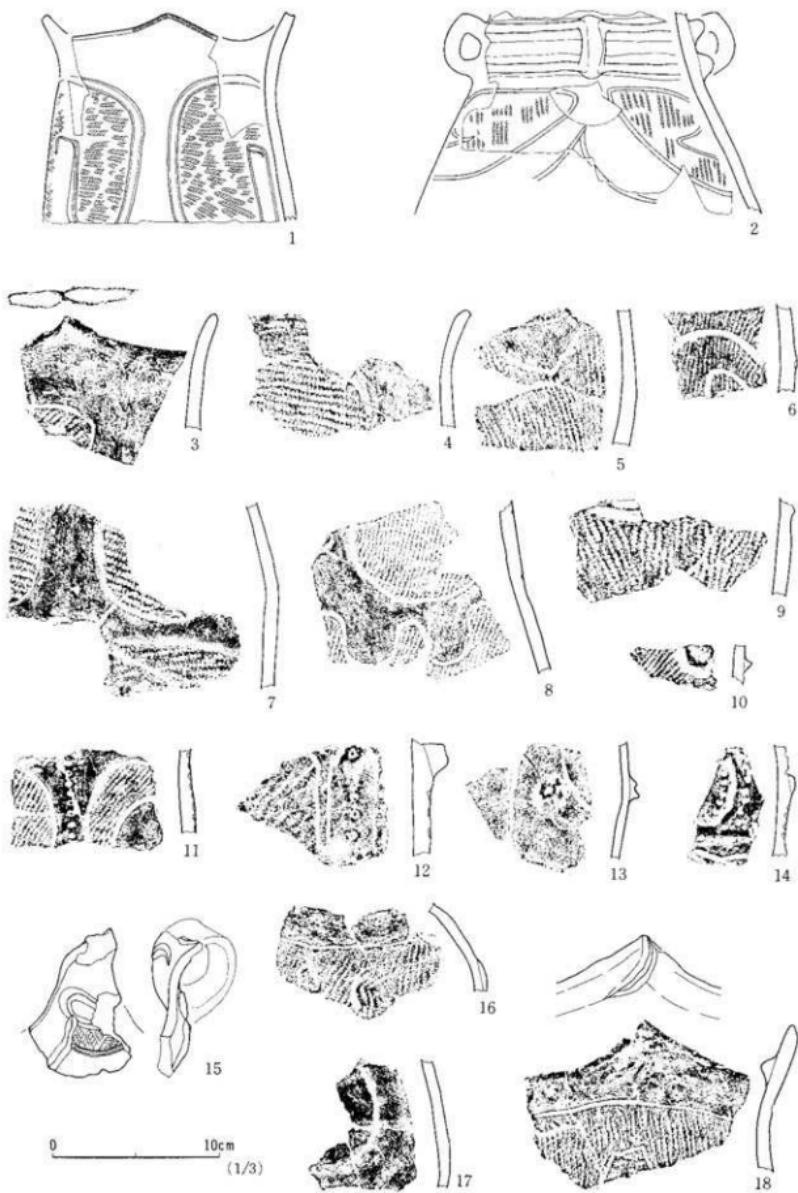
（秦）



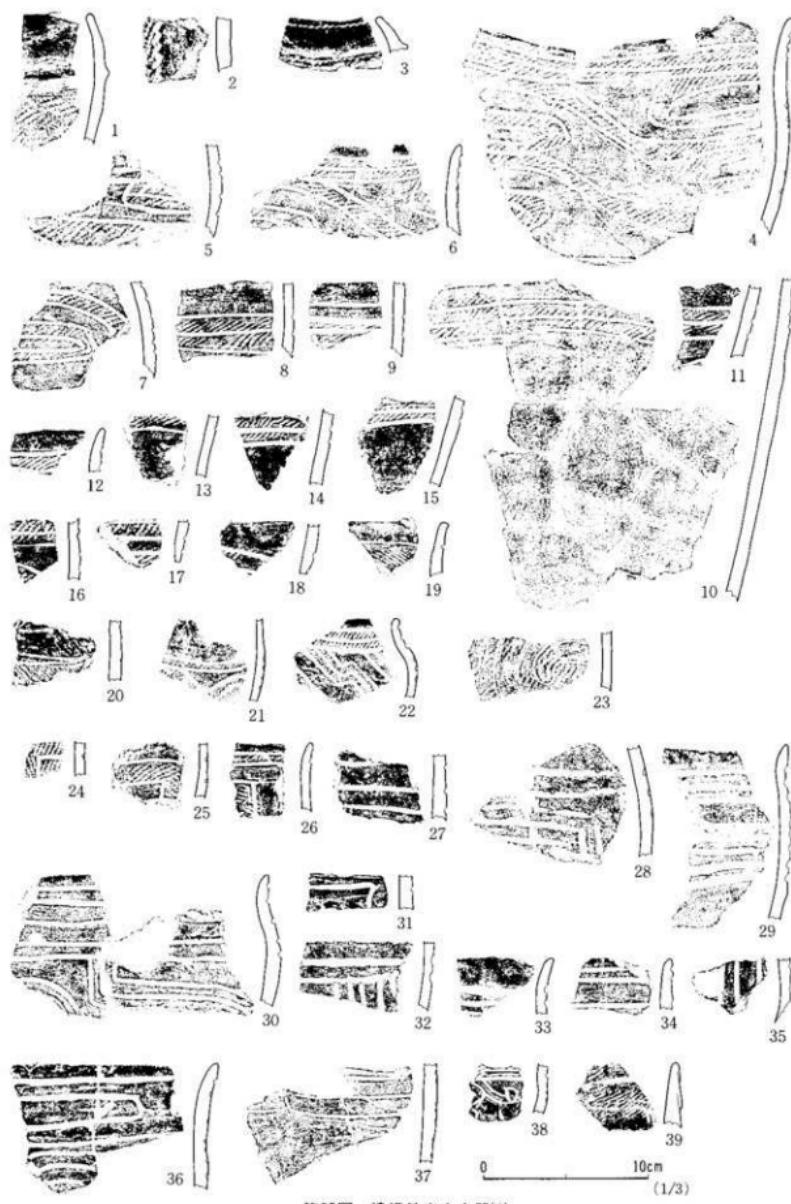
第22図 遺構外出土土器(1)



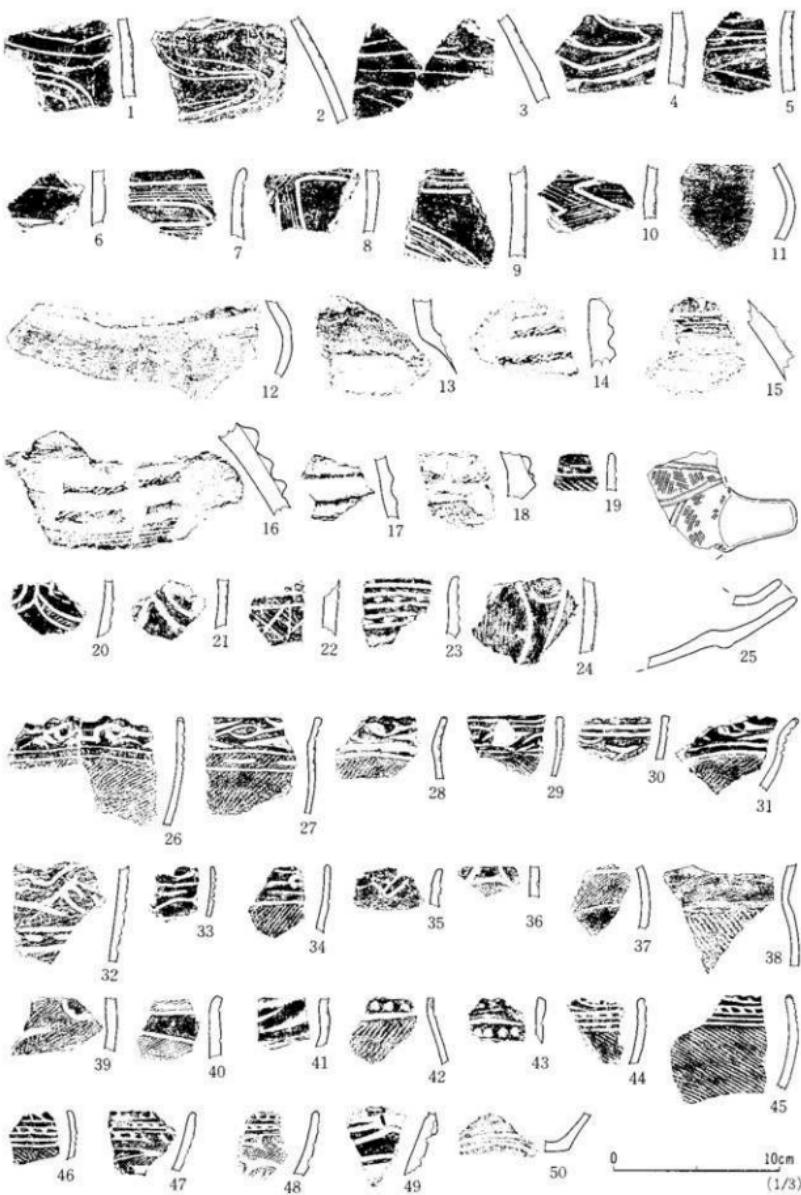
第23図 遺構外出土土器(2)



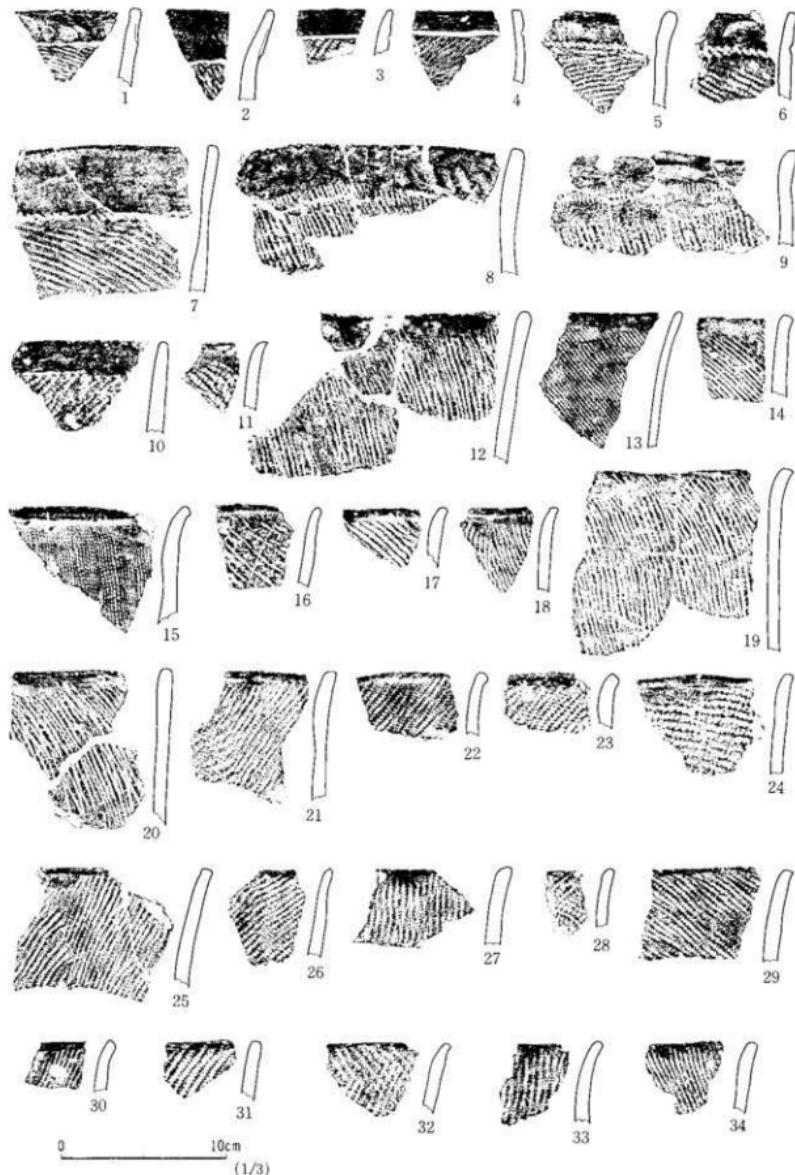
第24図 遺構外出土土器(3)



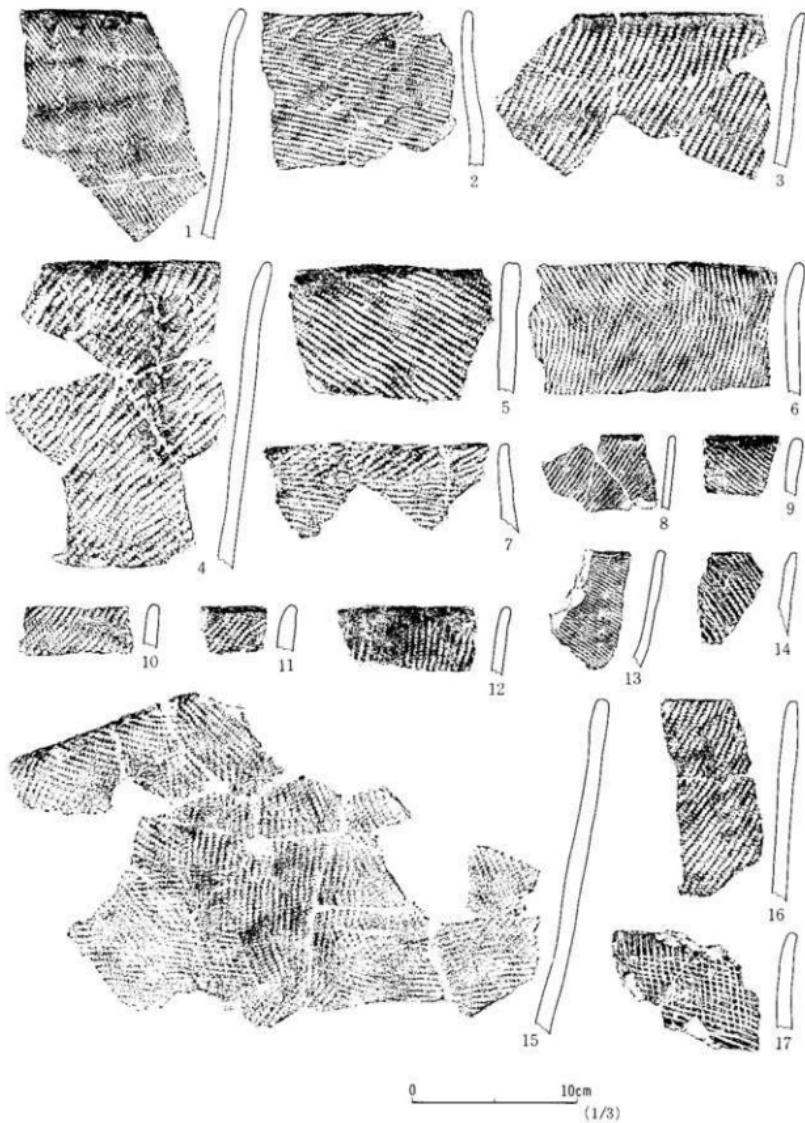
第25図 遺構外出土土器(4)



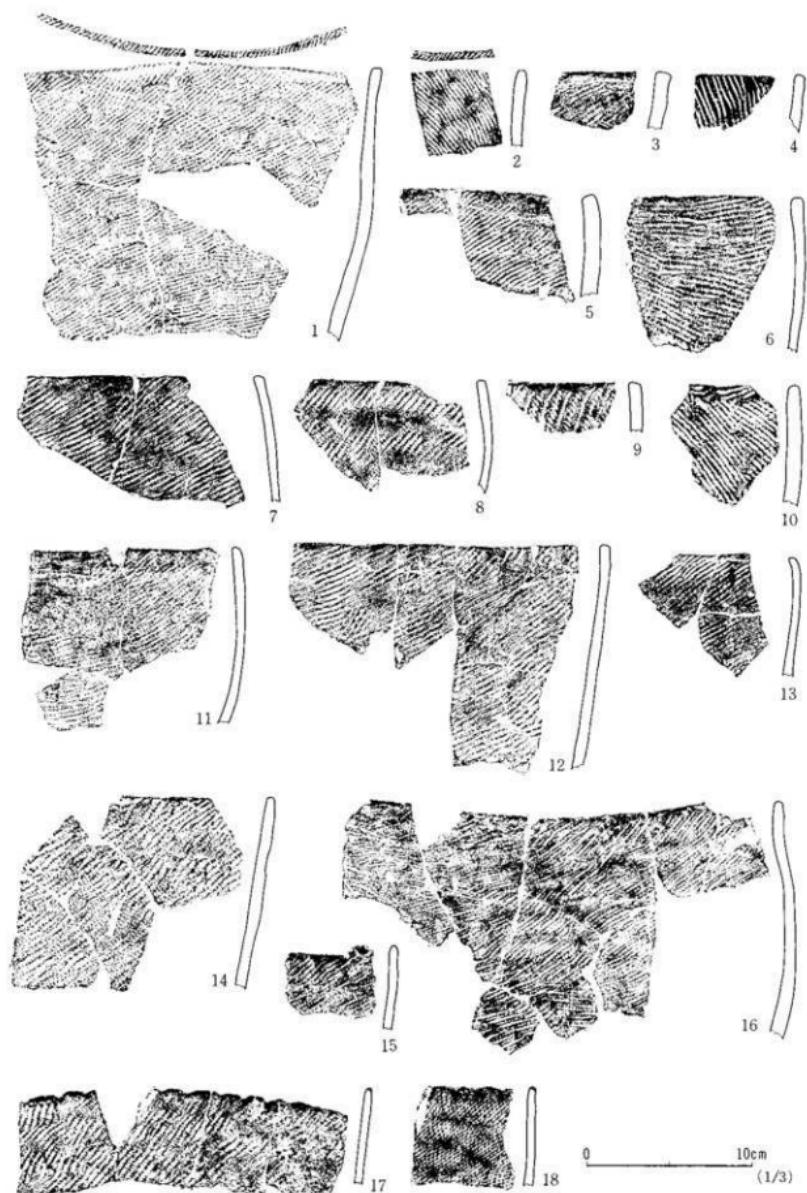
第26図 遺構外出土土器(5)



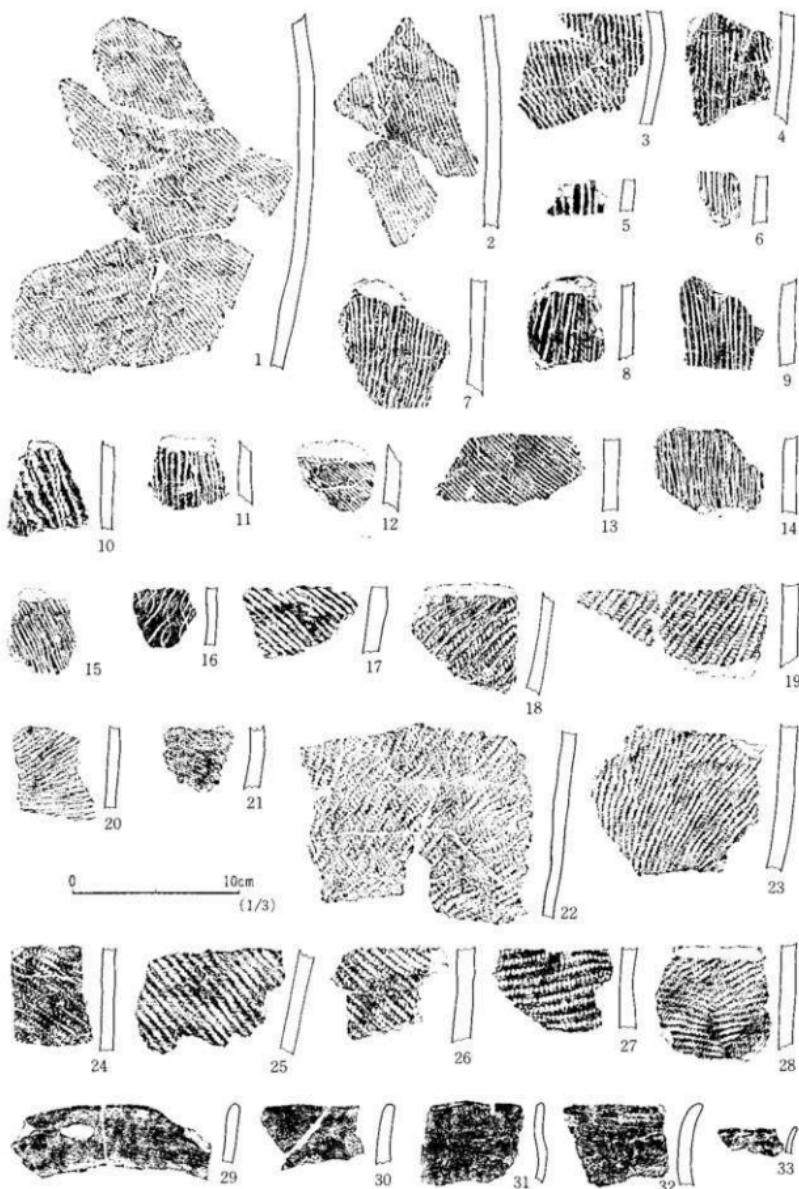
第27図 遺構外出土土器(6)



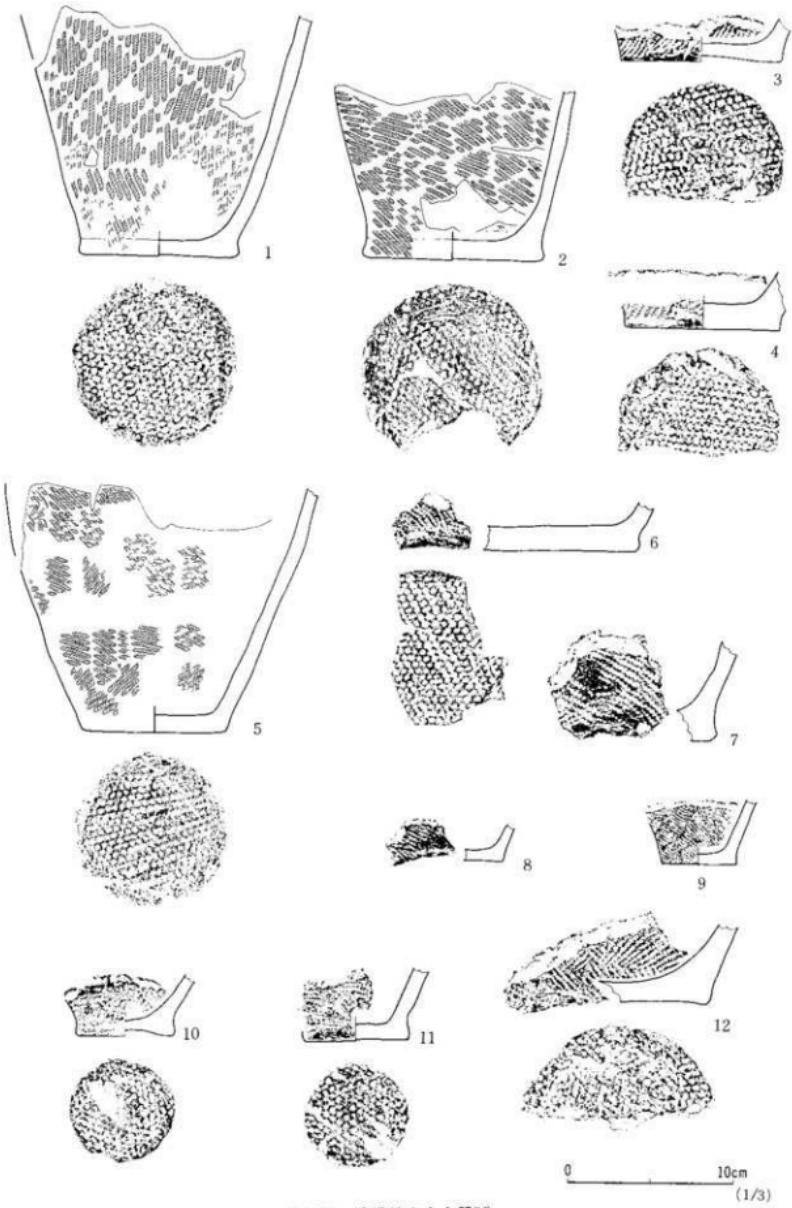
第28図 遺構外出土土器(7)



第29図 遺構出土土器(8)



第30図 造構外出土土器(9)



第31図 遺構外出土土器10

2. 石器

本遺跡の遺構外から出土した石器類は、剥片及び剥片石器が1444点、礫石器59点、総数1503点である。グリッド別出土状況は、調査区A区西側の遺構が集中するE～G16～19グリッドからの出土が全体の約6割を占める。出土層位は、約8割のものが第IV・V層からの出土である。

出土した石器類の内訳は、石鎌・石匙・石範・石錐・楔形石器・不定形石器・石核・磨製石斧・敲石・磨石・凹石・砥石・石皿・台石である。以下に、各器種ごとに分けて記述する。

石鎌 (第32図1～6)

6点出土した。完形品は2点で、すべて無茎である。1・2は凹基鎌である。1は、器厚がうすく両面側縁から細かく丁寧な剝離が施されている。2は、1に比べ肉厚である。先端部が欠損している。基部の調整はともに浅く、1は平基ともとれる。3は柳葉形のものである。素材の肥厚した部分に両面から調整を施し、尖頭部を作出している。4は凸基鎌である。剝離調整は稚で、素材の厚みを取りきれていない。5と6は形状と器厚、剝離調整の状態から石鎌に含めた。

石錐 (第32図7)

1点出土した。つまみを有する錐で、錐部を欠損する。両面から均一な調整を施し、断面菱形の刃部を作りだしている。つまみ部分には石材の表皮が残る。

石匙 (第32図8～12)

5点出土した。11以外は縦型石匙である。9・10は丁寧な背面調整で、全体形を切出しナイフ状に作りあげている。器体に比べつまみ部の作りだしは小さい。10のつまみ部分は、被熱のため剝落している。8は綾長剥片の一縁辺に、両面から調整を加えている。つまみ部は、素材の形状を利用しているものと思われる。11は素材剥片の周縁を調整している。つまみ部はパルプ部分に作られている。12は形状から器体上部が欠損した縦型石範の刃部と判断した。

石範 (第32図13～17・19)

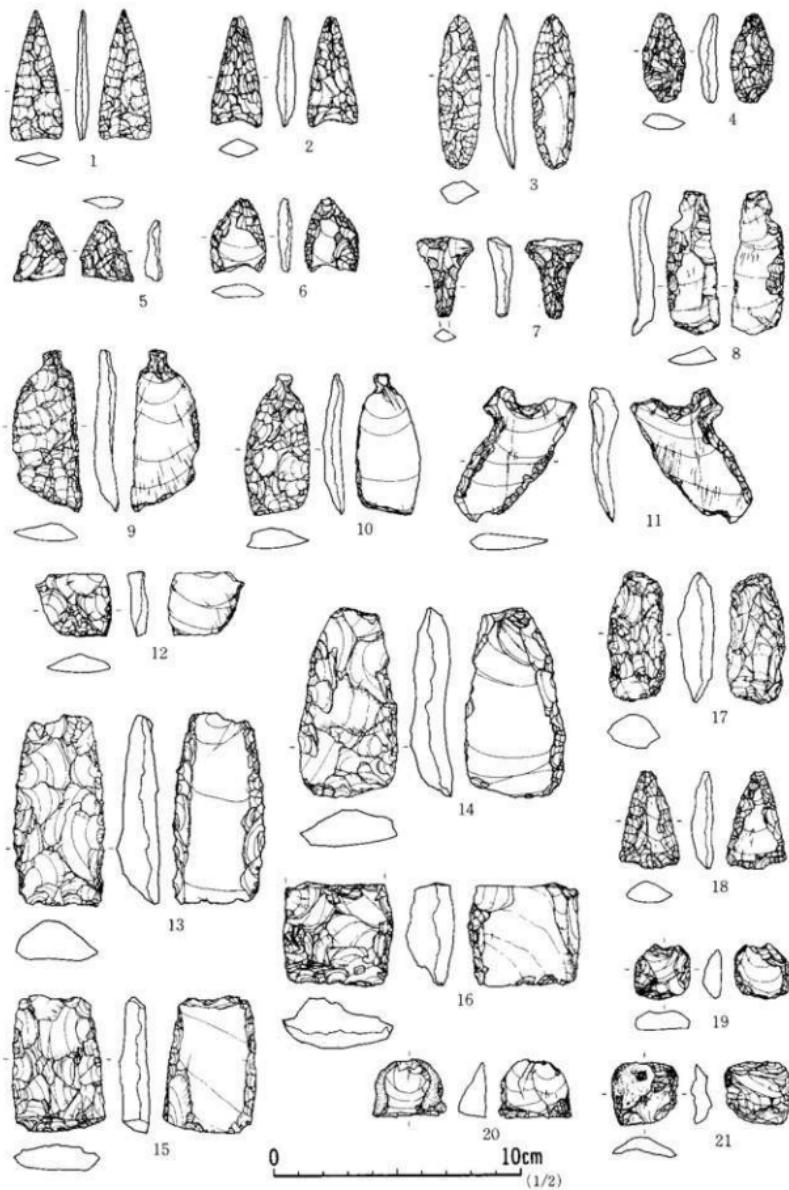
6点出土した。完形品は13～15・19の4点ある。形状は、短冊形のものと撥形のものがある。13～16は、主要剝離面を広く残すもので、調整の主体は背面にある。13・14の腹面の両側縁に施される調整は、背面調整用の剝離と思われる。15・16は基部を欠損するものである。刃部となる剥片端部には、急角度の剝離が施されている。16の背面には、剥取しきれない高まりが残る。17は厚手の剥片を素材とし、両面調整で形作られている。形状から本類に含めた。18は平面形状が撥形で周縁から急角度の調整が施される。刃部と思われる端部の調整が急角度であることから、本類に含めた。

楔形石器 (第32図19～21)

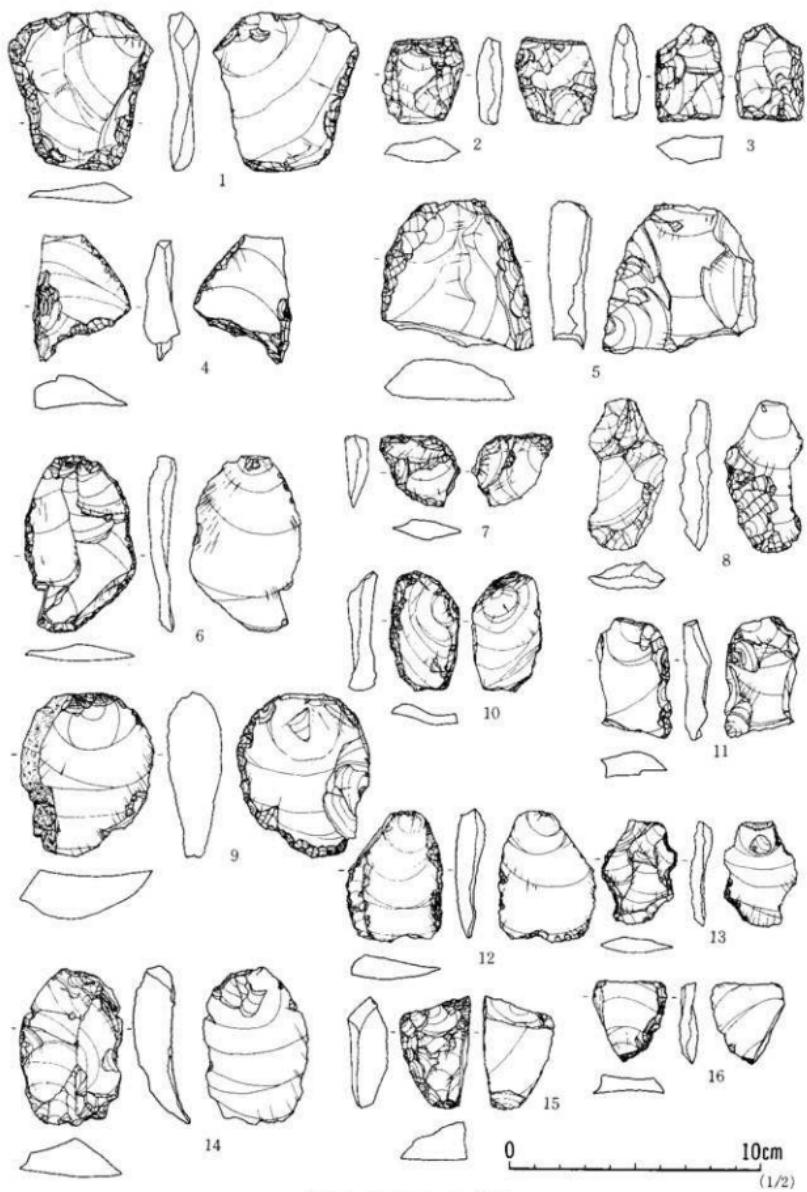
3点出土した。器体の上下両端と周縁に、階段状の細かい剝離あるいは潰れがある。平面形状は、不整楕円形と方形状である。20と21は原石の表皮が残り、素材が小円錐であったものと判断される。背面には、両極打法の痕跡がのこる。19の周縁剝離は、使用打撃によるものか調整によるものか区別がつかない。

不定形石器 (第33図・第34図1～7)

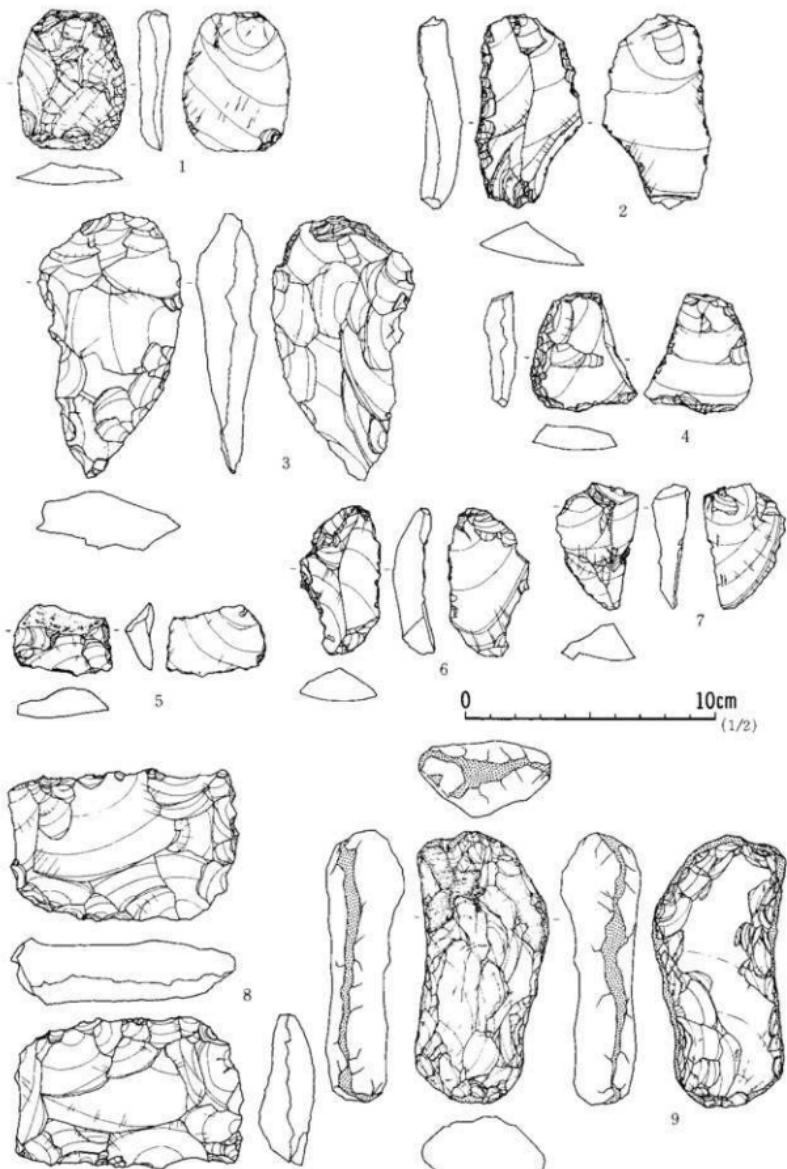
上記の定形石器以外の石器で、削器及び撃器として機能したと思われるものである。施される剝離



第32図 遺構外出土石器(1)



第33図 遺構外出土石器(2)



第34図 遺構外出土石器(3)

調整の状態から次のように分けた。

- (I) 両面調整が施されているもの。(第33図1~4)
- (II) 片面調整で、周縁部に調整が施されているもの。(第33図5~10・12・14・15)
- (III) 片面調整で、側縁部のみに調整が施されているもの。(第33図11・13・16、第34図1~2・4)
- (IV) 側縁部に、微細な極浅形調整が施されているもの。(第34図3・5~7)

不定形石器のほとんどが、素材の剥片の周縁及び縁辺に不規則で細かな調整加工を施すもので、形状は意識されず、刃部作出だけを目的としている。そのため、個々の形状は、素材の剥片に依存しており多様である。

ここに掲載した不定形石器以外に、剥片の鋭利な側縁や末端に極微細な剝離が部分的に見られるものや、側縁が折損しているものなど、無調整のまま使用されたと思われる剥片や破砕片も多数ある。

石核 (第34図8、第35図1)

2点出土した。第34図8は、ほぼ長方形で両面に大まかな剝離が見られる。周縁に細かな剝離が見られないことから、これ自体が製品として機能したものとは思われない。剥片の剥取が進んだプランクと思われる。第35図1は、一見して円盤状の石核に見えるが、両面中央に残る剝離面は風化が進んでいるもので、当概期の所産とは思われない。しかし、周縁の一部に剥片剥取の痕跡が數カ所あることから含めた。

磨製石斧 (第36図1~5)

5点出土した。石材は全て緑色細粒凝灰岩である。1は、刃部の一部を欠損するがほぼ完形品である。全面丁寧に研磨されている。器体側縁部分に製作時のものと思われる、敲打の痕が残る。

敲磨器類 (第34図9、第35図2~4、第36図6~15、第37図1~5)

小型の加工蹠及び自然蹠の器面に、敲打や刺突による痕跡や、磨面を有するもので、敲石・磨石・凹石・砥石をまとめて本類とした。使用痕跡と使用部位から次のように分けられる。

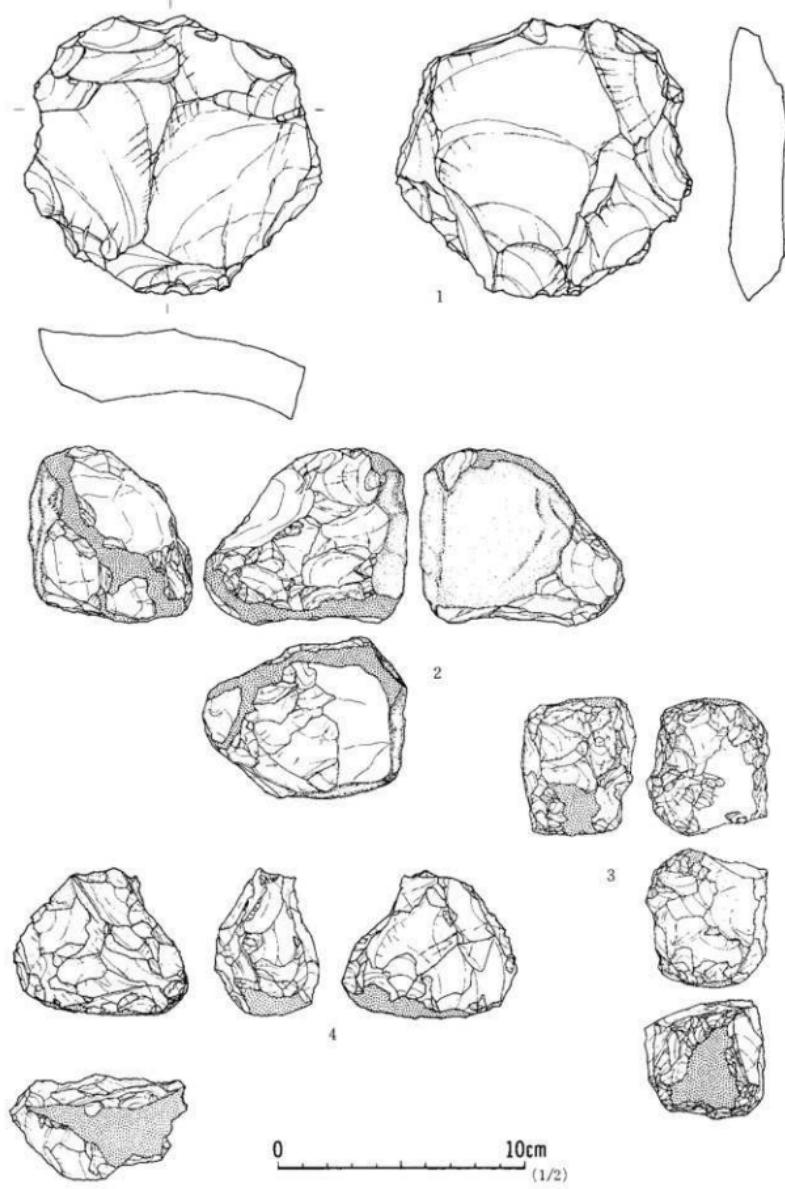
- (I) 加工蹠の側縁及び稜に、敲打痕を持つもの (第34図9、第35図2~4)
- (II) 自然蹠の器面に敲打痕を持つもの (第36図6・8~12・14)
- (III) 自然蹠の器面が敲打痕及び刺突により凹るもの (第36図7・15)
- (IV) 自然蹠の器面に敲打痕と磨面を持つもの (第36図13、第37図2~4)
- (V) 蹠の器面に幅の広い磨面を持つもの (第37図5)

第35図2~4は、珪質頁岩の石核を使用している。稜の部分と一部の面が敲きにより潰れている。第34図9も珪質頁岩である。周縁が敲きにより潰れており、敲きによる小さな剝落が周縁に見られる。器面には剝離の痕跡を残すが、風化しており、形状成形のための剝離とは思われない。

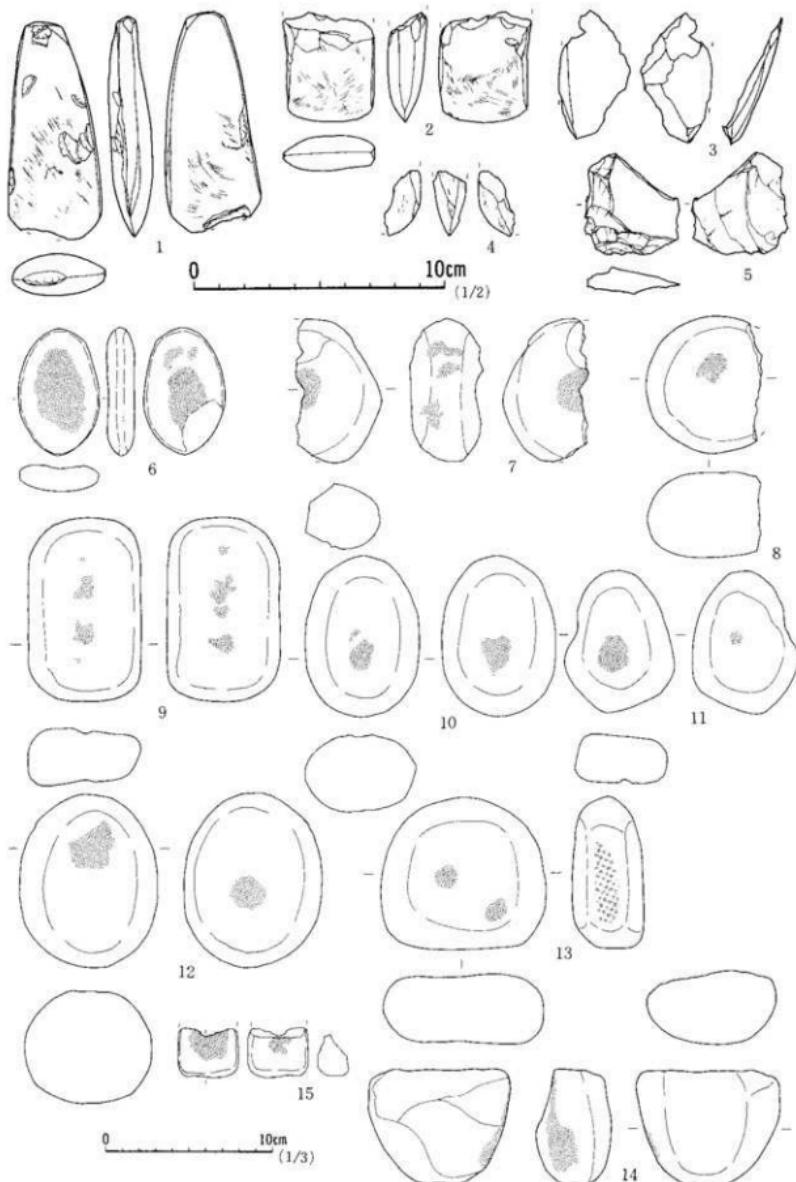
第36図7・15は、両面のほぼ同一箇所を敲打(刺突)され、深く凹んでいる。凹みが進んだために最終的には、破損したものと思われる。第37図2も敲打により、やや深く凹む。

第37図5は、器面に幅の広い磨面をもつ砥石である。機能面には細かな擦痕が残る。器体に剝離が見られることから、角柱状の石材をある程度加工してから使用しているものと思われる。

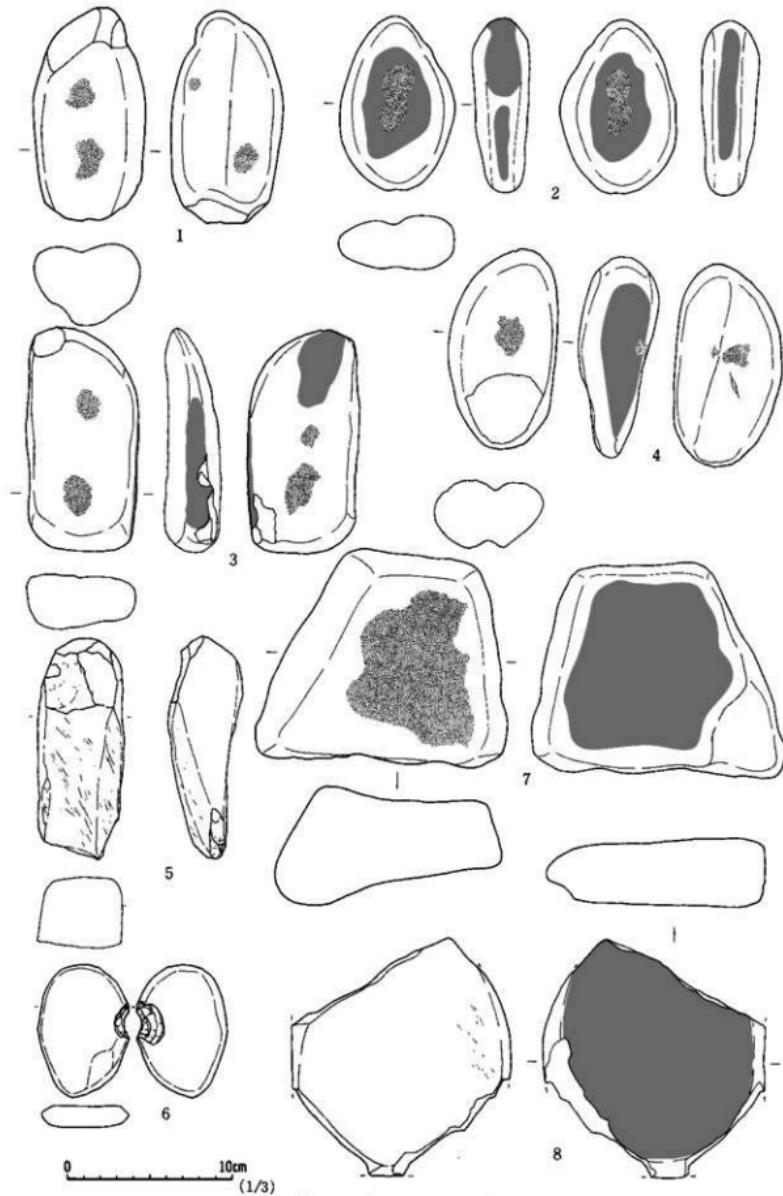
本調査で出土した、自然蹠を用いる敲石は、その痕跡が器面の表裏に、浅き小範囲に残るものがほとんどである。蹠の側縁や端部を使用するものはなく、石核を転用しているものだけが、側縁と稜の部分を使用している。磨面を持つものは、蹠の側縁を使用しているが、使用により原形が変化してい



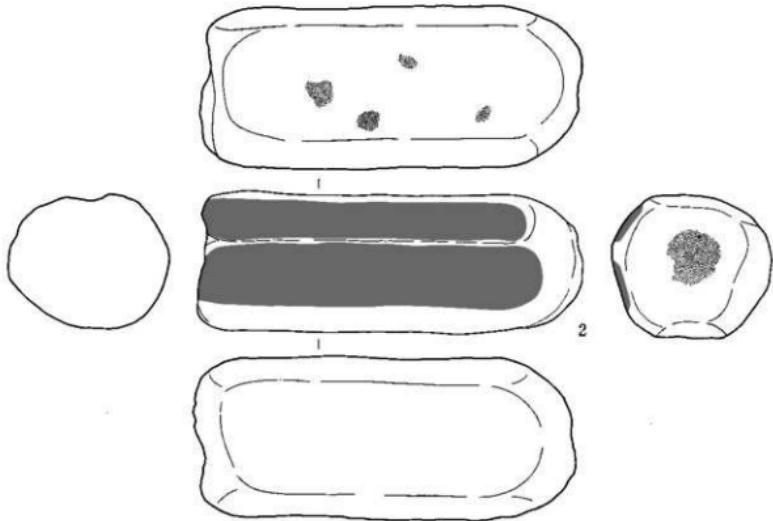
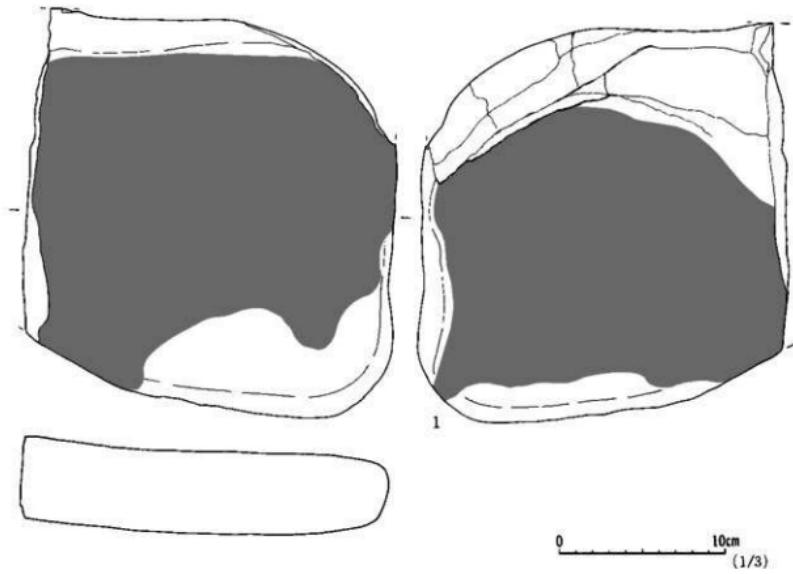
第35図 遺構外出土石器(4)



第36図 遺構外出土石器(5)



第37図 造標外出土石器(6)



第38図 遺構外出土石器(7)

るものはない。石核を転用した敲石と第36図の7・15を除けば、比較的使用頻度の少ないものが多いと思われる。

石皿・台石類（第37図7・8、第38図1・2）

敲磨器類よりも大型の自然縁の器面に、敲打による痕跡や、磨面を有するものである。

第37図7は、片面に敲打痕、片面がスリにより磨耗している。同図8は、片面だけが磨面として使用されている。第38図1は、両面が使用されている。同図2は、柱状の縁を使用している。側面の一部には磨面が、端部には敲打による凹みが見られる。

石錘（第37図6）

比較的薄く小型な礫が使われている。橢円形状の縁で、側縁の一箇所を両面から削離している。通常、対する側縁も削離されるが、本遺物は片側だけの調整である。（中村・小田川）

3. 土製品（第39図）

ミニチュア土器1点、スプーン形土製品1点、耳飾り2点、蓋形土製品1点、円盤状土製品（土器片利用）1点、板状土製品1点の計7点が出土している。

ミニチュア土器（第39図1）

1点出土した。遺構外の出土である。体部中央にふくらみをもつ深鉢形で、口縁は平坦で、無文である。口縁部に粘土紐を巻き上げた痕が残る。手づくね成形である。

スプーン形土製品（第39図2）

1点出土した。遺構外の出土である。手づくね成形で、外面には指頭圧痕がみられるが、内面にはヘラなどで削り取った痕が残っている。体部はかなり深めで、口唇部には沈線が1条めぐらされている。柄にあたる部分は短く、貫通孔を有する。

耳飾り（第39図3・4）

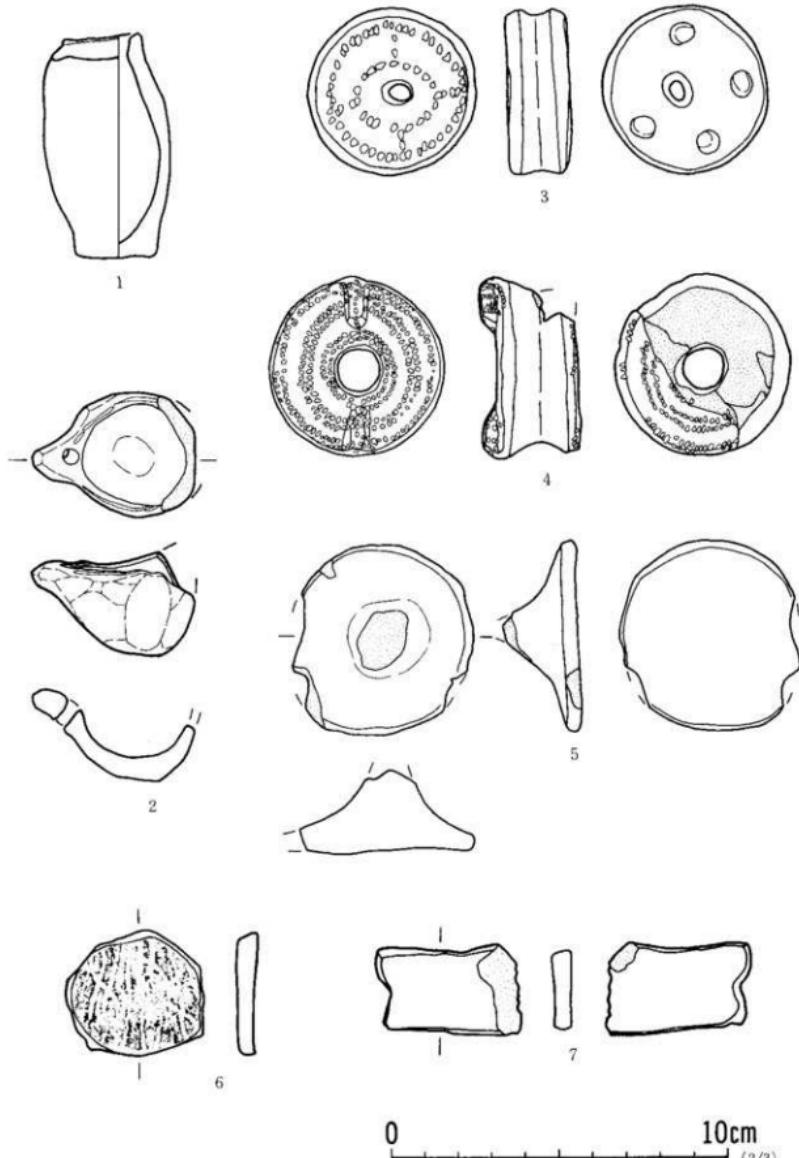
2点出土した。いずれも遺構外の出土である。3は断面形は鼓形を呈し、貫通孔を有する。表面には連続した細かい刺突による文様が施される。刺突列は同心円状に二重にめぐり、その内円と外円を結ぶように刺突列が十字に施文されている。裏面には棒状工具によると思われる大きな刺突が4つ施されるだけである。4も断面形は鼓形を呈し、貫通孔を有するが、表面につまみ状の1対の突起をもつ。表面にはかなり細かい刺突による文様が施される。2列1組の刺突列が同心円状に三重にめぐり、突起上には内円と外円を結ぶような刺突列が施されている。刺突には、向きや並び方から4～6個の単位がみとめられた。裏面は破損のため明らかではないが、残存部に刺突列がみられることから、表面と同様の文様をもつと考えられる。

蓋形土製品（第39図5）

1点出土した。遺構外の出土である。下端が平坦で、つまみ部を有し、平面形は円形を呈する。無文で、赤色顔料の付着がみとめられた。

円盤状土製品（第39図6）

1点出土した。遺構外の出土である。土器片の周縁を打ち欠き、すたるもので、ほぼ円形を呈する。体部破片が利用され、捺糸文が施文されている。



第39図 土 製 品

板状土製品（第39図7）

1点出土した。遺構外の出土である。形状は、2.5cm×4cm程の方形を呈する。一辺に浅い抉りがあり、対する辺側は破損している。抉りから土錐の可能性も考えられる。器体全面の磨滅が激しく、明確にできないが土器片を利用した可能性もある。

4. 石製品（第40・41図）

岩版1点のほか、小礫の器面に線刻及び擦痕をもつ礫13点の、計14点が出土している。この線刻及び擦痕は、前述した敲磨器類の使用痕跡と比べると、その痕跡が鋭利で、ある特定の工具ないしは特定の対象物があったものと考えられるため、敲磨器類とは区別した。使用痕の種類により、盲孔のある礫、敲打痕・擦痕のある礫、擦痕のある礫の3つに分類した。

岩版（第40図1）

1点出土している。遺構外の出土である。下端のややせばまたた格円形の扁平な礫を素材としている。器体の表面には、11個の盲孔があり、器体のほぼ中央部に施された3条の線刻を境に、ほぼ左右対称に配置されている。裏面はほぼ中央部にまとまって5個の盲孔がある。この盲孔も配置をある程度意識しているものと思われる。また、器体の下端部にも1個の盲孔がある。側縁の一部には連続した剝離が加えられている。

盲孔のある礫（第40図2・3）

2点出土している。いずれも遺構外の出土である。2は破損のためもとの形は明らかではないが、方形の扁平な礫であったと考えられる。盲孔は表面に1カ所、側面に1カ所である。3は円形の扁平な礫で、表面、裏面、側面に数個の盲孔をもち、さらに破断面にも盲孔がみられる。

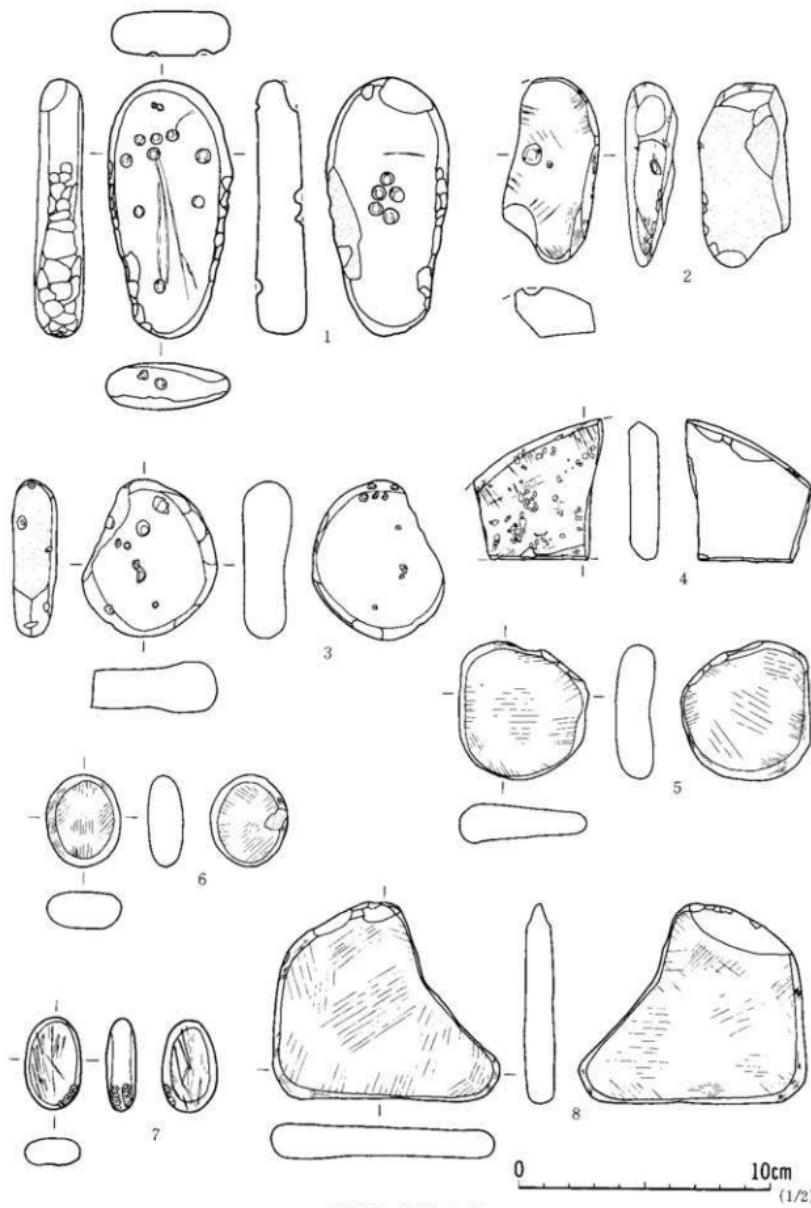
敲打痕・擦痕のある礫（第40図4）

1点出土している。遺構外の出土である。扁平な礫で、もとは半円形だったと考えられる。表面と側縁部に擦痕をもち、表面全体に敲打痕がみられる。

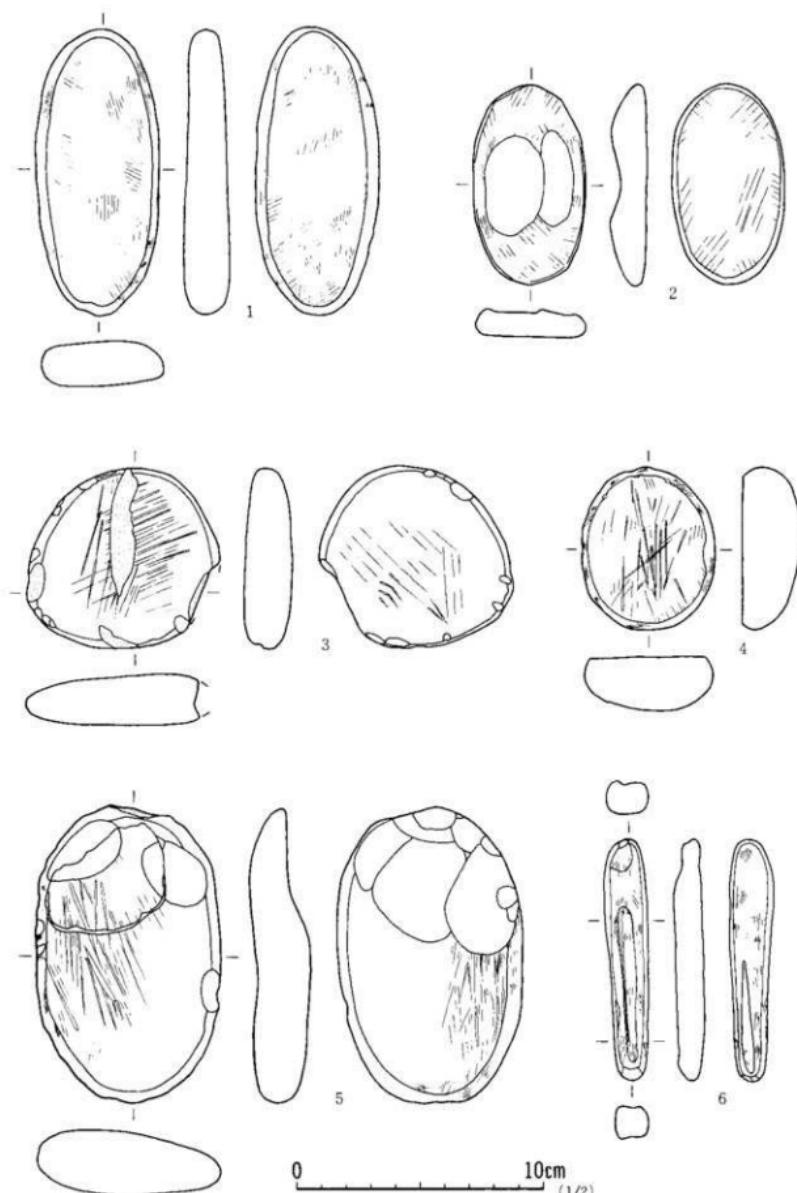
擦痕のある礫（第40図5～8、第41図）

10点出土している。全て遺構外の出土である。ほとんどが扁平な小礫で形態は多様である。いずれも、ほぼ器面全体に擦痕がみられるが、両面に著しい擦痕と深い線刻をもつもの（第40図7、第41図3～5）もある。第40図5は、ほぼ円形の扁平な礫である。第40図6と7は、ほぼ同じ大きさの扁平な小礫を用いている。同図6は、器面全体に細かな擦痕が多くみられる。同図7は、両面に著しい擦痕と線刻をもつほか、側面の一部に鼠歯状痕様の細かな剝離が見られる。第41図1は、扁平な長格円形の礫であり、全面に細かな擦痕を持つ。形態は第40図1の岩版に類似している。第41図2の表面は被熱により剝落している。棱線の磨滅が激しい。第41図3は、格円形礫のほぼ中央部に線刻と擦痕が集中している。第41図4は円礫を打ち割り、割れ面と縁辺をすっている。平坦にすられた面には著しい線刻と擦痕がある。第41図5は、表面左側、裏面右側に線刻と擦痕が集中している。第41図6は、細い棒状の礫で、両面のくほんだ部分が集中的にすられている。

（田中）



第40図 石 製 品 (1)



第41図 石 製 品 (2)

第III章　まとめ

本遺跡の発掘調査で検出された遺構は、住居跡6軒、土坑23基、小穴群、道跡である。遺物は、縄文時代早期から晩期までの土器・石器類が約7,400点出土した。

遺構のうち、住居跡は、ローム面かその直上層を床面としているものがほとんどである。

この中で、第1号住居跡と第2号住居跡については、分けて記述したが、同一住居の炉と出入口施設の可能性が極めて高い。同様なものが『井沢遺跡』(平賀町埋蔵文化財報告書第5集)で報告されている。また、第3号住居跡の炉は、土器埋設部がないものの複式炉の形態をとるもので、形態から大木10式併行期に比定されるものである。

土坑は、検出面が深かったこともあるが、比較的に小型のものが多く、礫を出土するものも数基ある。機能用途については不明である。第7号土坑を除き、時期は不明である。小穴群についても同様である。

出土土器は、縄文時代早期(白浜・小船渡平式)、縄文時代前期(表館XⅢ群・円筒下層式)、縄文時代中期(楕林式・最花式・大木10式併行)、縄文時代後期(牛ヶ沢式・十腰内I式)、縄文時代晩期(大洞B・C1・A式)の縄文時代の各時期の型式が出土した。比較的出土量が多いのは、中期末葉の大木10式併行期と十腰内I式期のものである。逆に全くの空白となるのが、早期前葉以降と円筒上層式の各期である。第7号土坑から出土した土器は、沈線の文様から第IV群a類に属するものとおもわれるが、突起を貼付する点で特異であり、今後の類例を待ちたい。

出土石器類では、剥片数が多く出土遺物全体の25%を占める。これは他の遺跡と比較しても多く、石材を産する場所が周辺にある可能性がある。また、剥片数に比して定形石器の数も少なく思われる。

土製品のうち耳飾りは、階上町野場(5)遺跡から同様なものが出土しており、その時期は縄文時代中期末葉期である。

石製品は、岩版のほか線刻と擦痕を持つ礫がある。線刻は、剥片等の鋭利な物で付けられた可能性がある。時期については特定できない。

検出遺構と出土遺物は、ともに調査区の西側の標高90m前後の河岸段丘面に集中している。出土土器は縄文時代早期から晩期までの各時期にわたっており、各時期とともに遺跡内のほぼ同じ場所が使われていたものと判断される。しかし、遺構数も少なく、特に重複もないことから拠点的な場所ではなく、何らかの生活活動の一端を担う場所であったと思われ、本調査区の周辺に各時期の主体となる集落が存在する可能性が指摘される。

(調査員一同)

付 章 出土遺物觀察表

遺構内出土土器

図版No	地区	層	胴部	外面文様構成(地文)	分類	備考
7-1	1H	床	胴部	(R L 縦位)	VIC	
8-1	3H	床	口縁部	(L R 縦位)	VIb-2	
8-2	3H	床	胴部	(L R 縦位)	VIC	
11-1	4H		底部	(R L 縦位)	VIC	底面網代痕
11-2	4H	炉	底部	(L R 縦位)	VIC	底面網代痕
13-1	5H	炉	胴部	(R L 縦位)	VIC	石匂炉炉底面出土
13-2	5H	床	口縁部	(L R 縦位)、L R 撫糸圧痕	VIb-1	
13-3	5H	床	胴部	(R L 縦位)	VIC	
13-4	5H	床	胴部	沈線、(L R 橫位)	VIb-1	
13-5	5H	床	胴部	R L - 結束第2種縦位	VIC	
13-6	5H	床	胴部	(R 単路1類縦位)	VIC	
13-7	5H	床	胴部	R L - 結束第2種縦位	VIC	
13-8	5H		胴部	(R 単路1類縦位)	VIC	
13-9	5H		底部	(R L 縦位)	VIC	底面網代痕
13-10	5H	床	底部		VIC	
15	6H	覆土	底部	(R L 縦位)	VIC	底面網代痕
19	7土	覆土	口縁部	疣状突起、沈線、L R 充填	IVa	

遺構外出土土器

図版No	地区	層	胴部	外面文様構成(地文)	分類	備考
22-1	F-20		胴上部	貝殻腹縞文、竹管状刺突、(R L R 橫位)	I a	
22-2	F-20		胴上部	貝殻腹縞文、竹管状刺突、爪形文	I a	
22-3	F-26	VII	胴部	貝殻腹縞文、(条痕文)	I a	内面条痕ナデ消し
22-4	F-26	VII	胴部	貝殻腹縞文、(条痕文)	I a	内面条痕ナデ消し
22-5	F-26	VII	胴部	貝殻腹縞文、(条痕文)	I a	
22-6	F-26	VII	胴部	貝殻腹縞文、(条痕文)	I a	
22-7	E-25	VI	口縁部	爪形文、(条痕文)	I a	補修孔あり
22-8	F-33	VII	胴部	爪形文	I a	
22-9	F-27	VII	口縁部	爪形文、(条痕文)	I a	
22-10			口縁部	爪形文、(条痕文)	I a	
22-11	F-27	VII	胴部	貝殻腹縞文、爪形文、(条痕文)	I a	内面条痕文
22-12	F-27	VII	胴部	爪形文、(条痕文)	I a	内面条痕文
22-13	F-20	VI	胴部	(R L R 橫位)	I a	
22-14	E-20		胴部	(条痕文)	I a	砂粒多く含む
22-15	E-25	IV	胴部	(条痕文)	I a	
22-16	F-19		胴部	爪形文、(条痕文)	I a	内面条痕文
22-17			胴部	(条痕文)	I a	内面条痕文
22-18	E-20		胴部	(条痕文)	I a	内面条痕文
22-19			胴部	(条痕文)	I a	内面条痕文
22-20			胴部	(条痕文)	I a	内面条痕文
22-21			胴部	(条痕文)	I a	内面条痕文
22-22	G-21		胴部	(条痕文)	I a	
22-23	F-20		胴部	(条痕文)	I a	内面条痕文
22-24			胴部	(条痕文)	I a	内面条痕文
22-25			胴部	(条痕文)	I a	
22-26	E-21		胴部	(条痕文)	I a	
22-27	F-27	VII	胴部	(条痕文)	I a	
22-28	F-18		胴部	(条痕文)	I a	
22-29	F-18	IV	胴部	(条痕文)	I a	
22-30	B-9	IV	胴下部	(条痕文)	I a	
22-31	A-8		胴下部	(条痕文)	I a	
22-32	B-15		底部		I a	

遺構外出出土土器

図版No	地区	層	肩部	外面文様構成(地文)	分類	備考
22-33	E-26	IV	底部	(条痕文)	I a	
22-34	G-17	III	底部		I a	繊維混入
23-1			口縁部	(O段多条L R)	II a	
23-2	F-20		肩部	(O段多条L R)	II a	繊維混入
23-3	F-20		肩部	(O段多条L R)	II a	繊維混入
23-4	F-20		肩部	(O段多条L R)	II a	繊維混入
23-5	F-20		肩部	(O段多条L R)	II a	繊維混入
23-6	F-20		肩部	(O段多条L R)	II a	繊維混入
23-7	F-17		肩部	(O段多条L R)	II a	繊維混入
23-8	F-18		肩部	(L R)	II a	繊維混入
23-9			肩部	(R L)	II a	繊維混入
23-10			肩部	(L單絆1類横位)	II a	繊維混入
23-11	F-18		肩部	(R L)	II a	繊維混入
23-12	G-17		口縁部	(L單絆1類横位)	II b	繊維混入
23-13	G-24		口縁部		II b	繊維混入
23-14	B-10		肩部	(R單絆1類縱位)	II b	繊維混入
23-15	E-18	IV	口縁部	沈線、(L R横位)	III a	
23-16	F-19	IV	口縁部	(L R横位)、折り返し口縁、沈線	III b	
23-17	F-16	IV	口縁部	(L R横位)、折り返し口縁、沈線	III b	
23-18	G-27		口縁部	折り返し口縁、(R L斜位)、刺突	III b	
23-19	E-17	IV	口縁部	折り返し状口縁、管状刺突	III b	内面炭化物
23-20	E-17	IV	口縁部	折り返し口縁、(R L横位)、沈線	III b	
23-21	G-19	IV	肩部	(L R横位)、沈線	III b	
23-22	G-20	IV	肩部	(L R横位)、竹管状刺突	III b	
23-23			肩部	(L横位)、竹管状刺突	III b	
23-24	G-19	IV	肩部	(L R横位)、竹管状刺突	III b	
23-25	G-20	IV	肩部	(L R横位)、竹管状刺突	III b	
23-26	G-19	IV	肩部	(L R横位)、沈線	III b	
23-27	F-19	IV	肩部	(L R横位)、沈線	III b	
23-28	G-19	IV	肩部	(L R横位)、沈線	III b	
23-29	E-19		肩部	(L R横位)、沈線、竹管状刺突	III b	
23-30	E-19		口縁部	隆沈線、(R L縦位)	III b	
23-31	G-19		肩部	(L R斜位)、沈線	III c	
23-32	G-19		口縁部	(L R斜位)、沈線	III c	
24-1	E-18	IV	口縁部	(L R斜位)、沈線、L R撫系圧痕	III c	内外面黒色化
24-2			頸部	隆帶、(R單絆1類縦位)、沈線	III c	
24-3	B-11	IV	口縁部	沈線、(L R横位)	III c	外面炭化物付着
24-4	E-18	IV	口縁部	沈線、(L R縦位)	III c	内外面黒色化
24-5			口縁部	(L單絆1類縦位)、沈線	III c	
24-6	G-17	IV	肩部	(R L縦位)、沈線	III c	
24-7	E-18	IV	肩部	(L R斜位)、沈線	III c	内面黒色化
24-8	A-8		肩部	(L R斜位)、沈線	III c	
24-9			肩下部	(R L横位)、斜位)、隆沈線	III c	
24-10	F-16		肩部	(R L横位)、斜位)、鱗状隆起	III c	
24-11	B-8	IV	肩部	(R L縦位)、沈線	III c	内外面黒色化
24-12	E-19	IV	肩部	(R L)、沈線、疣状隆起、竹管状刺突	III c	
24-13	B-10		肩部	疣状隆起、竹管状刺突、沈線	III c	
24-14	E-22		口縁部	鱗状隆起、竹管状刺突、沈線	III c	
24-15	B-13	V	口縁部	鱗状隆起、(R L縦位)、沈線、取手	III c	
24-16	F-17	IV	肩部	鱗状隆起、(R L縦位)、沈線	III c	
24-17	F-18	IV	肩部?	無文、片切り状沈線	III c	
24-18			口縁部	(R單絆1類縦位)、沈線、鱗状隆起	III c	
25-1			口縁部	隆起帶、(L R横位)、磨り消し	IV a	
25-2	E-21		肩部	L R撫系圧痕、磨り消し	IV a	

遺構外出土土器

図版No	地区	層	剖部	外面文様構成(地文)	分類	備考
25-3	B-14	IV	口縁部	隆起帯、R L 撥糸圧痕	IV a	
25-4	B-8	IV	口縁部	(L R横位)、沈線、磨り消し	IV b	
25-5	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-6	B-8	IV	口縁部	L R充填、沈線	IV b	
25-7	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線、磨り消し	IV b	
25-8	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-9	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-10	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-11			口縁部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-12	B-11	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-13	B-11	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-14	B-11		胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-15	B-11	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-16	B-8		胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-17	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-18	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-19	F-17	IV	口縁部	(L R斜位)、沈線	IV b	
25-20	E-18	IV	胴部	(R L横位)、沈線	IV b	
25-21	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-22	B-8	IV	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-23	A-8		胴部	(R L斜位)、沈線	IV b	
25-24			胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-25	B-8	II	胴部	(L R横位)、沈線	IV b	
25-26	B-9	IV	口縁部	(R 斜位)、沈線	IV b	
25-27	B-12	IV	胴部	沈線	IV b	
25-28	B-9		胴部	沈線	IV b	
25-29	B-8		口縁部	沈線	IV b	
25-30	B-12	IV	口縁部	沈線	IV b	
25-31	B-11	IV	胴部	沈線	IV b	
25-32	B-9		胴部	沈線	IV b	
25-33	B-9		口縁部	沈線	IV b	
25-34	B-12	IV	胴部	沈線	IV b	
25-35	B-12	IV	胴部	沈線	IV b	
25-36	B-11	IV	口縁部	沈線	IV b	
25-37	B-8		胴部	沈線	IV b	
25-38	B-11	IV	胴部	沈線	IV c	
25-39	B-8	IV	胴部	(L R横位)	IV c	接合痕明瞭
26-1	B-11	IV	胴部	沈線	IV b	
26-2	B-11	IV	胴部	沈線	IV b	
26-3	B-11	IV	胴部	沈線	IV b	
26-4	B-11	IV	胴部	沈線	IV b	
26-5	B-11	IV	胴部	沈線	IV b	
26-6	F-16		胴部	沈線	IV b	
26-7	B-9	IV	口縁部	刷毛目状沈線	IV b	
26-8	B-11	IV	口縁部	刷毛目状沈線	IV b	
26-9	A-8		胴部	刷毛目状沈線	IV b	
26-10	B-11	IV	胴部	刷毛目状沈線	IV b	
26-11			胴部	無文	IV b	
26-12	G-20		胴部	無文	IV b	
26-13	A-8		頸部	無文	IV b	
26-14			胴部	粘土貼付帶	IV b	
26-15			胴部	刷毛目状沈線	IV b	粘土貼付帶剥落
26-16	A-8		胴部	粘土貼付帶、刷毛目状沈線	IV b	
26-17			胴部	つまみ出し状隆起	IV b	
26-18	A-8		頸部	粘土貼付帶、沈線	IV b	

遺構外出土土器

図版No	地区	層	胸部	外面文様構成(地文)	分類	備考
26-19			口縁部	沈線、刺突、(R L横位)	IV c	
26-20	B-11	IV	胴部	沈線、(L R横位・縦位)	IV c	
26-21			胴部	沈線	IV c	
26-22	G-18		胴部	沈線	IV c	
26-23	G-20	IV	口縁部	沈線、列点文	IV c	
26-24	A-10		胴部	沈線、(L R横位)	IV c	
26-25	H-20	IV	注口部	沈線、R L充填	IV c	
26-26	E-17	IV	口縁部	沈線、(L R)	V	
26-27	E-16	IV	口縁部	沈線、(L R横位)	V	
26-28	F-17	IV	口縁部	沈線、(L R横位)	V	
26-29	F-17	IV	口縁部	沈線、(R L横位)	V	
26-30	F-17	IV	口縁部	沈線、刻み口縁	V	
26-31	E-20	IV	口縁部	沈線、(L R横位)、刻み口縁	V	
26-32	F-17	IV	胴部	沈線、R L磨消	V	
26-33	E-17	IV	口縁部	沈線	V	
26-34	E-17	IV	口縁部	沈線、(L R横位)	V	
26-35	B-8	IV	口縁部	沈線、粘土紐貼付	V	
26-36	G-18	IV	胴部	沈線、(R L)	V	
26-37	G-17	IV	胴部	沈線、(L R)	V	
26-38	E-17	IV	胴部	沈線、(R L)	V	
26-39	E-16	IV	胴部	沈線、(L R)	V	
26-40			口縁部	沈線、(L横位)	V	
26-41	E-18	IV	胴部	雲形文	V	
26-42	F-17	IV	胴部	沈線、列点文、(L R横位)	V	
26-43	E-18	IV	口縁部	沈線、列点文、(L R横位)	V	
26-44	G-19	IV	口縁部	羊齒状文、(R L横位)	V	
26-45	F-19	IV	口縁部	羊齒状文、(R L横位)	V	
26-46	G-20		口縁部	羊齒状文、(R L横位)	V	
26-47	E-21		口縁部	雲形文、(L R横位)	V	
26-48	G-17	IV	口縁部	雲形文、(L R横位)	V	
26-49	E-31	II	口縁部	沈線、粘土粒貼付	V	
26-50	B-9	IV	底部	沈線	V	
27-1	A-8		口縁部	折り返し状口縁、(L R縦位)	VI a	
27-2	F-17		口縁部	折り返し状口縁、(L L反撚り縦位)	VI a	
27-3	B-14	IV	口縁部	沈線、(R L縦位)	VI a	
27-4	F-17	IV	口縁部	沈線、(L R縦位)	VI a	
27-5	B-11	IV	口縁部	L R燃系圧痕、(L R横位)	VI a	
27-6	B-14	IV	口縁部	L R燃系圧痕、(L R縦位)	VI a	
27-7			口縁部	L R燃系圧痕、(L R縦位)	VI a	炭化物付着
27-8	B-12	IV	口縁部	(R単縦1類縦位)	VI a	
27-9	B-12	IV	口縁部	(R単縦1類縦位)	VI a	
27-10	G-17	IV	口縁部	(L R横位)	VI a	
27-11	F-14	IV	口縁部	(L R縦位)	VI a	
27-12	B-9	IV	口縁部	(R単縦1類縦位)	VI a	
27-13	H-19	IV	口縁部	(R L横位)	VI a	
27-14	A-8		口縁部	(R L横位)	VI a	
27-15	G-17		口縁部	(R単縦1類縦位)	VI b-1	
27-16	B-7		口縁部	(付加条彫文)	VI b-1	
27-17	B-9		口縁部	(L縦位)	VI b-1	
27-18	A-8		口縁部	(L R斜位・縦位)	VI b-1	
27-19	B-13		口縁部	(r 単連1類縦位)	VI b-1	
27-20	B-10		口縁部	(R単縦1類縦位)	VI b-1	
27-21	E-17		口縁部	(L R縦位)	VI b-1	
27-22	B-14	IV	口縁部	(R L縦位)	VI b-1	
27-23	F-27	VII	口縁部	(R L縦位)	VI b-1	
27-24	F-16		口縁部	(L R縦位)	VI b-1	

遺構外出土土器

図版No.	地区	層	剖部	外面文様構成(地文)	分類	備考
27-25	B-14	IV	口縁部	(R L 縦位・横位)	V1b-1	
27-26	G-19	IV	口縁部	(R L 縦位)	V1b-1	
27-27	B-14	IV	口縁部	(R L 斜位)	V1b-1	
27-28	F-18	IV	口縁部	(異条縞文)	V1b-1	
27-29	B-11	IV	口縁部	(L R 縦位)	V1b-1	
27-30			口縁部	(R L 縦位)	V1b-1	
27-31			口縁部	(R L 縦位)	V1b-1	
27-32			口縁部	(R L 縦位・縦位)	V1b-1	
27-33	G-19	IV	口縁部	(L R 斜位)	V1b-1	
27-34	B-14	IV	口縁部	(L R 縦位)	V1b-1	
28-1	F-22		口縁部	(R L 横位)、R結節縞位	V1b-1	
28-2	G-17		口縁部	(L R 縦位・横位)	V1b-1	
28-3	B-9	IV	口縁部	(R L 縦位)	V1b-1	
28-4	B-11	IV	口縁部	(R L 縦位)、R結節縞位	V1b-1	
28-5	B-9	IV	口縁部	(L R 縦位)	V1b-1	
28-6	B-9		口縁部	(R L 縦位・横位)	V1b-1	
28-7	B-8	IV	口縁部	(L R 斜位・横位)	V1b-2	
28-8	E-17	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-2	
28-9	B-8		口縁部	(L R 縦位)	V1b-2	
28-10	F-17	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-2	
28-11	F-18	IV	口縁部	(R L 縦位)	V1b-2	
28-12	G-17	IV	口縁部	(R L 斜位)	V1b-2	
28-13	G-9	IV	口縁部	(L 縦位)	V1b-2	
28-14			口縁部	(R 単結1類縦位)	V1b-2	
28-15	B-14	IV	口縁部	(R L 縦位・横位)	V1b-2	
28-16	B-9		口縁部	(R L 縦位)	V1b-2	
28-17	B-15		口縁部	(L 単結1類縦位・横位)	V1b-2	
29-1	G-20		口縁部	(L R 横位)	V1b-2	口唇にL R回転
29-2	H-20	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-2	口唇にL R回転
29-3	E-19	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-2	
29-4	G-17	IV	口縁部	(L 単結1類縦位)	V1b-3	
29-5	H-46	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-3	P-1
29-6	G-18	IV	口縁部	(L R 縦・斜位)	V1b-3	
29-7		IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-3	
29-8	G-18	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-3	
29-9			口縁部	(L R 異条横位)	V1b-3	
29-10	B-15		口縁部	(R 横位)	V1b-3	
29-11	F-17	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-3	
29-12	E-18	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-3	
29-13	F-17	IV	口縁部	(L 横位)	V1b-3	
29-14	G-17	IV	口縁部	(L R 横位)	V1b-3	
29-15	F-17	IV	口縁部	B突起、(L R 横位)	V1b-3	
29-16	B-8	IV	口縁部	(L L R 横位)	V1b-3	
29-17	F-17	IV	口縁部	刻み状口縁、(L R 横位)	V1b-2	内外面炭化物付着
29-18	G-19	IV	口縁部	刻み状口縁、(L R 横位)	V1b-2	
30-1	B-8	IV	胴部	(L R 縦位)、R結節縞位	VIC	
30-2	B-8	IV	胴部	(L R 縦位)、R結節縞位	VIC	
30-3	E-25	IV	胴部	(L 単結1類縦位)	VIC	
30-4	B-10	IV	胴部	(R 単結1類縦位)	VIC	
30-5	E-17	IV	胴部	(R 単結1類縦位)	VIC	
30-6	E-17	IV	胴部	(L 単結1類縦位)	VIC	
30-7	B-10		胴部	(R 単結1類縦位)	VIC	
30-8	B-9		胴部	(R 単結1類縦位)	VIC	
30-9	B-14	IV	胴部	(R 単結1類縦位)	VIC	
30-10	G-17		胴部	(R 単結1類縦位)	VIC	
30-11	G-21		胴部	(L 単結1類縦位)	VIC	

遺構外出土土器

図版No	地区	層	胸部	外面文様構成(地文)	分類	備考
30-12	B-9		胸部	(r 単絡1類縦位)	VIC	
30-13	G-21		胸部	(L 単絡1類縦位)	VIC	
30-14	B-15		胸部	(R 単絡1類縦位)	VIC	
30-15	B-14	IV	胸部	(R 単絡1類縦位)	VIC	
30-16	B-19		胸部	(R 単絡2類縦位)	VIC	
30-17	B-8		胸部	(r 縦位)	VIC	
30-18	B-8		胸部	(L L R 横位)	VIC	
30-19			胸部	(R L 縦位)	VIC	
30-20			胸部	(L L R 横位)	VIC	
30-21	B-8		胸部	(R 横位)	VIC	
30-22	B-8		胸部	(L L R 横位)	VIC	
30-23			胸部	(R L 横位)	VIC	
30-24	E-19		胸部	(L L R 縦位)	VIC	
30-25			胸部	(L 縦位)	VIC	
30-26	E-19		胸部	(L R 縦位)	VIC	
30-27	B-10		胸部	(L R 縦位)	VIC	
30-28	B-14	IV	胸部	(L R 横位)	VIC	
30-29	B-9	IV	胸部	無文	VIC	
30-30			胸部	無文	VIC	
30-31			胸部	無文	VIC	
30-32	E-20		胸部	無文	VIC	
30-33	F-18	IV	胸部	無文	VIC	
31-1	F-17	IV	底部	(L R 斜位)	VIC	底面網代圧痕
31-2	F-17		底部	(L R 縦位)	VIC	底面網代圧痕
31-3	E-17	IV	底部	(R L 縦位)	VIC	底面網代圧痕
31-4			底部	(R L 縦位)	VIC	底面網代圧痕
31-5	B-13		底部	(L R 縦位)	VIC	底面網代圧痕
31-6	A-10		底部	(L R 縦位)	VIC	底面網代圧痕
31-7	E-20		底部	(L R 縦位)	VIC	
31-8	B-22	IV	底部	(L R 縦位)	VIC	
31-9	B-14	IV	底部	(L 縦位)	VIC	
31-10	B-11	IV	底部	(L R 縦位)	VIC	底面網代圧痕
31-11	B-8	IV	底部	(L R 縦位)	VIC	底面網代圧痕
31-12	A-10		底部	(L R 縦位・横位)	VIC	底面網代圧痕

石器觀察表

圖版No	地區	層	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	分類	整理番号	備 考
32- 1	G - 18	IV	52.5	21.0	7.0	4.0	珪質頁岩	石鑿	21	
32- 2	表探	-	44.5	20.5	7.0	5.5	珪質頁岩	石鑿	22	
32- 3	表探	-	62.0	18.0	9.0	9.2	珪質頁岩	石鑿	24	
32- 4	B - 8	IV	36.0	17.0	6.5	3.8	珪質頁岩	石鑿	94	
32- 5	E - 18	IV	24.5	21.5	6.5	2.7	珪質頁岩	石鑿	48	
32- 6	F - 17	IV	30.0	22.0	5.5	3.2	珪質頁岩	石鑿	53	
32- 7	E - 19	IV	32.5	23.5	8.5	3.7	珪質頁岩	石鑿	88	
32- 8	E - 17	IV	57.5	21.0	8.0	7.5	珪質頁岩	石匙	70	
32- 9	E - 19	IV	65.5	27.5	7.0	12.1	珪質頁岩	石匙	41	
32-10	E - 20	IV	56.0	26.0	9.0	9.6	珪質頁岩	石匙	23	
32-11	G - 18	IV	54.5	49.0	11.0	14.7	珪質頁岩	石匙	37	
32-12	G - 18	IV	25.0	31.0	7.0	6.0	珪質頁岩	石匙	91	
32-13	E - 17	IV	77.0	36.0	16.0	46.7	珪質頁岩	石鑿	26	
32-14	F - 17	IV	76.0	41.0	17.0	46.7	珪質頁岩	石鑿	25	
32-15	表探	-	52.0	23.5	4.5	16.5	珪質頁岩	石鑿	38	
32-16	G - 20	IV	41.5	45.0	20.5	34.3	珪質頁岩	石鑿	92	
32-17	B - 11	IV	39.0	24.0	8.5	6.2	珪質頁岩	石鑿	39	
32-18	B - 9	IV	22.0	22.5	7.0	4.7	珪質頁岩	楔形	32	
32-19	SX-1	-	55.0	37.0	10.0	27.6	珪質頁岩	石鑿	95	
32-20	B - 8	IV	23.0	30.0	11.0	9.0	珪質頁岩	楔形	35	
32-21	E - 17	IV	25.0	26.5	6.0	5.2	珪質頁岩	楔形	36	
7 - 2	2H・炉	-	54.0	32.0	8.0	13.6	珪質頁岩	不定形	111	
7 - 3	1H・床	-	74.0	39.0	11.0	46.8	珪質頁岩	不定形	96	
13-11	5H・床	-	54.5	57.0	26.5	39.4	珪質頁岩	不定形	109	
13-12	5H・土瓦	-	58.0	32.5	11.5	12.1	珪質頁岩	不定形	40	
33- 1	B - 11	IV	64.5	58.0	11.0	28.0	珪質頁岩	不定形	78	
33- 2	E - 19	IV	35.0	33.0	10.5	12.4	珪質頁岩	不定形	93	
33- 3	G - 18	IV	39.0	27.0	11.0	15.4	珪質頁岩	不定形	82	
33- 4	G - 18	IV	51.0	39.0	12.0	15.7	珪質頁岩	不定形	98	
33- 5	G - 17	IV	61.0	61.0	16.0	71.3	珪質頁岩	不定形	99	
33- 6	B - 9	IV	71.0	43.5	10.0	23.8	珪質頁岩	不定形	49	
33- 7	F - 19	IV	29.0	32.0	8.0	6.8	珪質頁岩	不定形	89	
33- 8	拂土	-	61.0	30.6	11.0	17.5	珪質頁岩	不定形	50	
33- 9	E - 19	IV	66.0	53.0	19.0	61.5	珪質頁岩	不定形	100	
33-10	E - 19	IV	48.0	28.0	10.0	11.9	珪質頁岩	不定形	107	
33-11	E - 17	IV	48.0	30.0	10.0	15.1	珪質頁岩	不定形	73	
33-12	拂土	-	54.0	39.0	9.0	16.2	珪質頁岩	不定形	56	
33-13	B - 11	IV	30.0	43.0	6.0	6.4	珪質頁岩	不定形	47	
33-14	表探	-	64.0	42.0	15.0	38.0	珪質頁岩	不定形	63	
33-15	B - 18	IV	46.0	28.0	15.0	20.3	珪質頁岩	不定形	66	
33-16	F - 17	IV	32.0	61.0	16.0	6.7	珪質頁岩	不定形	72	
34- 1	E - 19	IV	57.0	43.0	12.0	27.4	珪質頁岩	不定形	105	
34- 2	B - 2	IV	79.0	43.0	17.0	37.6	珪質頁岩	不定形	113	
34- 3	B - 8	IV	107.0	57.0	24.0	97.6	珪質頁岩	不定形	31	
34- 4	E - 17	IV	47.0	43.0	10.0	21.0	珪質頁岩	不定形	76	
34- 5	E - 19	IV	29.0	39.0	12.0	8.1	珪質頁岩	不定形	103	
34- 6	F - 17	IV	60.0	33.0	13.0	23.8	珪質頁岩	不定形	54	
34- 7	不明	-	51.0	43.0	14.0	15.5	珪質頁岩	不定形	44	
34- 8	B - 9	IV	92.0	61.0	22.0	149.3	珪質頁岩	石核	27	
34- 9	G - 17	IV	109.0	53.0	31.5	187.9	珪質頁岩	敲磨器	97	
35- 1	E - 17	-	113.0	120.0	35.0	432.2	珪質頁岩	石核	28	
35- 2	B - 7	-	71.5	82.5	65.0	423.4	珪質頁岩	敲磨器	108	
35- 3	G - 17	IV	49.0	55.5	44.0	166.7	珪質頁岩	敲磨器	61	

石器観察表

図版No	地区	層	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	分類	整理番号	備考
35-4	G-17	IV	59.0	70.0	42.0	163.2	珪質頁岩	敲磨器	42	
13-13	5H・炉	-	124.0	55.0	48.0	380.8	安山岩	敲磨器	142	
36-1	A-8	-	88.0	37.0	16.0	79.8	綠細凝岩	磨斧	16	
36-2	D-21	VII	44.0	37.0	16.0	37.4	綠細凝岩	磨斧	19	
36-3	G-18	IV	52.0	28.0	-	10.1	綠細凝岩	磨斧	106	
36-4	不明	-	26.0	13.0	-	3.5	綠細凝岩	磨斧	18	
36-5	E-31	IV	40.0	37.0	10.0	15.4	綠細凝岩	磨斧	20	
36-6	B-9	-	78.0	49.0	19.0	51.6	凝灰岩	敲磨器	3	
36-7	F-17	-	86.0	52.0	40.5	20.2	頁岩	敲磨器	134	
36-8	表探	-	83.0	70.0	53.0	474.2	凝灰岩	敲磨器	126	
36-9	B-7	-	112.0	68.0	34.0	496.5	砂岩	敲磨器	140	
36-10	H-19	IV	97.0	69.0	45.0	477.3	安山岩	敲磨器	135	
36-11	B-7	-	86.0	66.0	34.0	249.2	安山岩	敲磨器	138	
36-12	F-17	IV	105.0	83.0	68.0	965.1	安山岩	敲磨器	141	
36-13	E-19	-	92.0	101.0	43.0	668.0	安山岩	敲磨器	133	
36-14	E-17	-	30.0	38.0	19.0	22.2	綠凝岩	敲磨器	17	
36-15	F-18	-	70.0	87.0	47.5	392.5	砂岩	敲磨器	137	
37-1	F-17	-	132.0	69.0	50.0	605.6	安山岩	敲磨器	131	
37-2	B-9	IV	108.0	71.0	33.0	287.9	頁岩	敲磨器	136	
37-3	F-19	-	136.0	68.0	33.0	508.8	砂岩	敲磨器	144	
37-4	E-17	IV	123.0	66.0	42.0	307.0	凝灰岩	敲磨器	132	
37-5	G-17	-	134.0	53.0	42.0	271.5	凝灰岩	敲磨器	130	
37-6	G-46	III	130.0	155.0	72.0	2028.0	安山岩	石錐	145	
37-7	B-9	IV	80.0	52.0	10.0	90.6	安山岩	石・台	9	
37-8	表探	-	145.0	134.0	42.0	1175.9	安山岩	石・台	147	
38-1	F-17	IV	248.0	225.0	61.0	5969.2	頁岩	石・台	148	
38-2	F-18	IV	232.0	101.0	83.0	3188.9	石英安岩	石・台	149	

土製品観察表

図版No	地区	層	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	分類	整理番号	備考
39-1	B-11	IV	-	-	-	57.7	ミニチュア土器		
39-2	B-19	IV	37.0	48.0	32.0	18.3	スプーン形土製		
39-3	表探	-	50.0	50.0	20.0	46.9	耳飾り		
39-4	B-9	IV	54.0	51.0	29.0	53.7	耳飾り		
39-5	A-8	IV	56.0	56.0	22.0	32.6	蓋形土製品		
39-6	B-8	IV	38.0	42.0	80.0	10.4	円形容土製品		土器片利用
39-7	E-17	IV	27.0	43.0	38.0	8.6	板状土製品		土器片利用?

石製品観察表

図版No	地区	層	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	分類	備考
40-1	表探	-	104.0	49.0	17.0	93.6	綠細凝岩	岩版	
40-2	表探	-	75.0	35.0	21.0	31.0	綠細凝岩	盲孔のある疊	
40-3	B-10	IV	63.0	53.0	19.0	88.9	砂岩	盲孔のある疊	
40-4	表探	-	56.0	48.0	13.0	40.8	綠細凝岩	岐擦痕のある疊	
40-5	B-9	IV	51.0	55.0	16.0	49.1	綠細凝岩	擦痕のある疊	
40-6	B-11	IV	37.0	30.0	14.0	17.3	凝灰岩	擦痕のある疊	
40-7	B-17	IV	48.0	22.0	12.0	10.2	凝灰岩	擦痕のある疊	
40-8	表探	-	79.0	91.0	14.0	102.1	綠細凝岩	擦痕のある疊	
41-1	G-17	IV	117.0	49.0	19.0	116.7	綠細凝岩	擦痕のある疊	
41-2	不明	-	101.0	45.0	15.0	53.5	凝灰岩	擦痕のある疊	
41-3	B-15	IV	73.0	77.0	2.0	111.4	綠細凝岩	擦痕のある疊	
41-4	G-17	IV	65.0	53.0	24.0	79.6	綠細凝岩	擦痕のある疊	
41-5	G-17	IV	118.0	74.0	25.0	119.3	綠細凝岩	擦痕のある疊	
41-6	G-20	IV	95.0	13.0	13.0	21.2	凝灰岩	擦痕のある疊	

報告書抄録

ふりがな	かみた いせき						
書名	上田遺跡						
副書名	国道394号線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第195集						
編著者名	小田川哲彦、相沢治、中村博文、秦光次郎、田中珠美						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038 青森市大字新城字天田内152-15 TEL 0177-88-5701						
所収遺跡名	所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみたいせき 上田遺跡	青森県 上北郡 七戸町 山屋10-1 外	市町村 02-402	遺跡番号 41-027 41-054	40度 41分 26秒	141度 6分 5秒	19940901 ～ 19941031	2,940m ² 国道394号線道路改良事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上田遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居6軒 土坑 23基	縄文土器 (早期・白浜式 ～ 晩期・大洞A') 他に石器類	縄文時代中期～晩期の集落跡		
	道跡	近代					

写 真 図 版



遺跡遠景 西→



調査区現況 西→



調査 A 区 土層



調査 B 区 土層



調査 A 区 自然堆積土包合標 北→

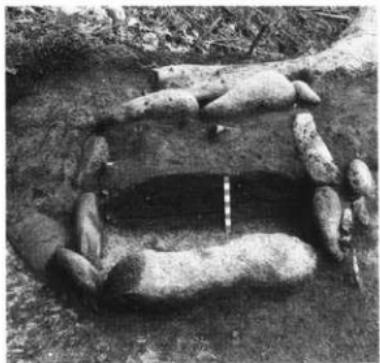
写真 1



第1号・第2号住居炉 東→



第1号・第2号住居炉 北→



第1号住居炉堆積土 北→

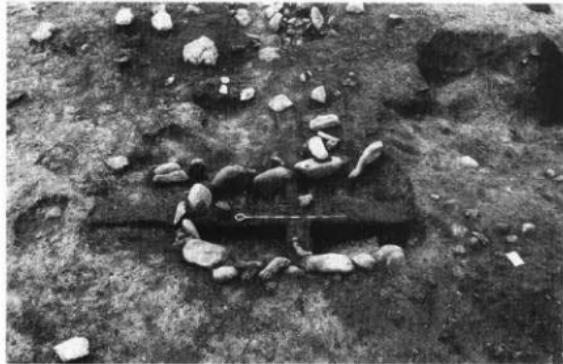


第2号住居跡炉堆積土 西→



第1号・第2号住居炉完掘 東→

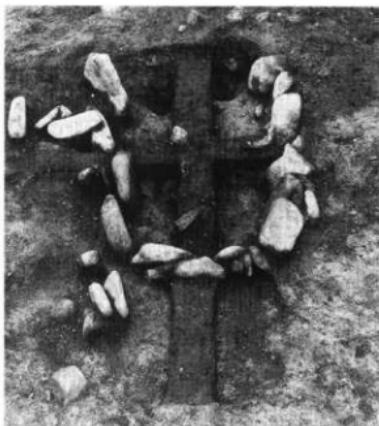
写真2



第3号住居跡 南→



第3号住居跡炉堆積土 東→



第3号住居跡炉堆積土 西→



第3号住居跡炉窓掘 南→

写真3



第4号住居炉検出 東→



第4号住居炉 東→



第4号住居炉掘形 南→



第5号住居 北→



第5号住居炉 南→



第5号住居炉堆積土 東→

写真4



第6号住居跡 西→



第6号住居跡 北西→



第6号住居旧炉 北→

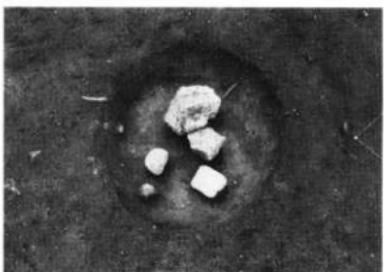


第6号住居出土遺物 東→

写真5



第3号土坑堆積土 北→



第3号土坑完掘 西→



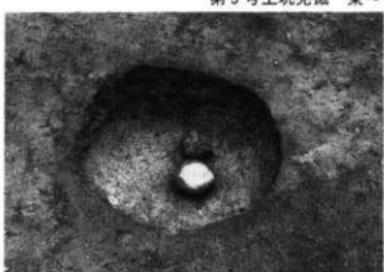
第5号土坑堆積土 東→



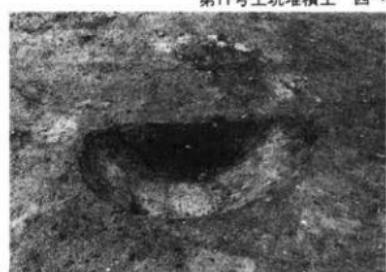
第5号土坑完掘 東→



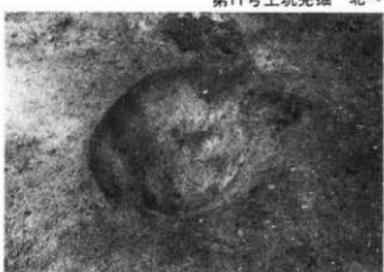
第11号土坑堆積土 西→



第11号土坑完掘 北→



第14号土坑堆積土 西→



第14号土坑完掘 西→



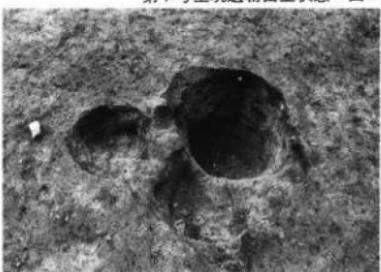
第7号土坑遺物出土状態 南→



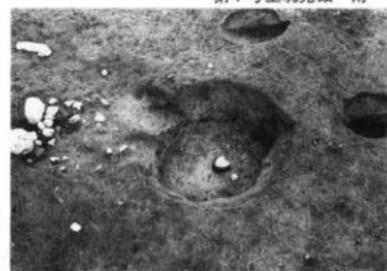
第7号土坑遺物出土状態 西→



第7号土坑完掘 南→



第8a・8b号土坑完掘 南→



第2号土坑完掘 東→



小穴群A 東→



道跡 東→



道跡 西→



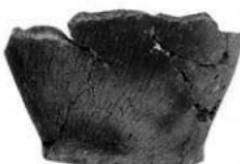
7-1



8-1



8-2



11-1



11-2



13-2



13-5



13-6



13-8



15



19

写真 8

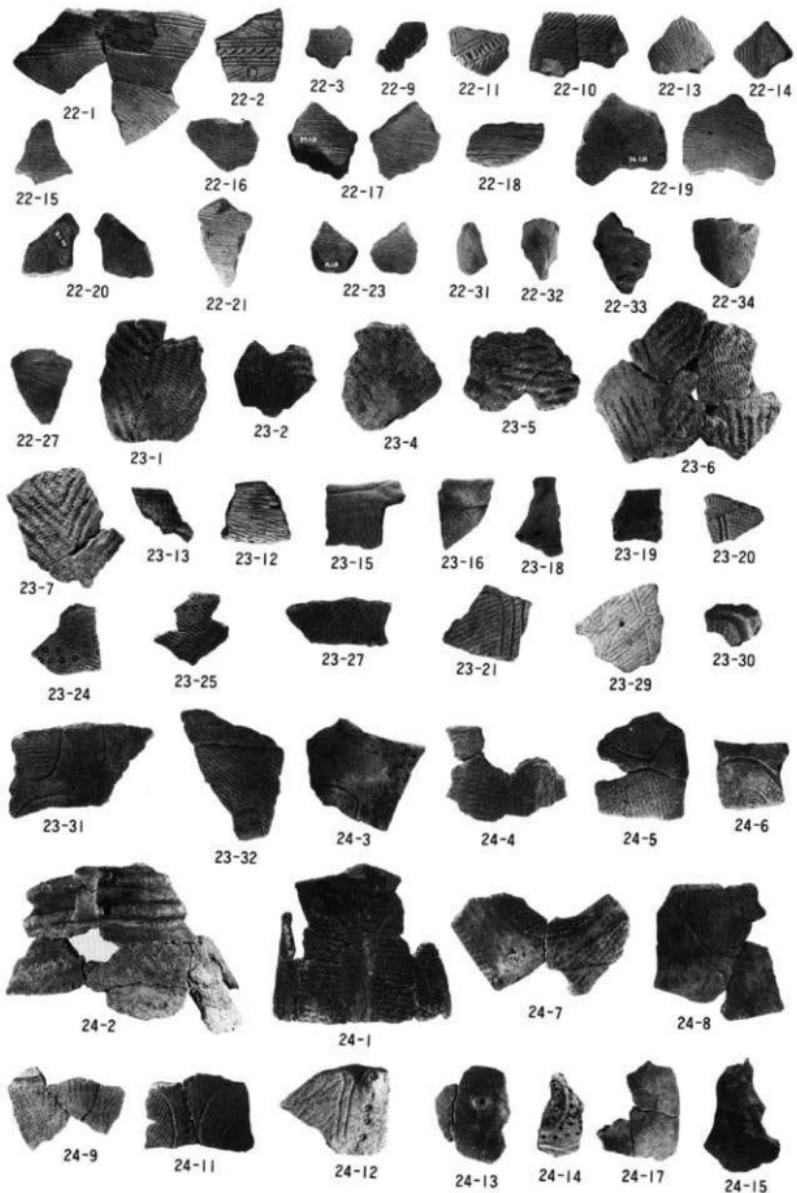


写真9

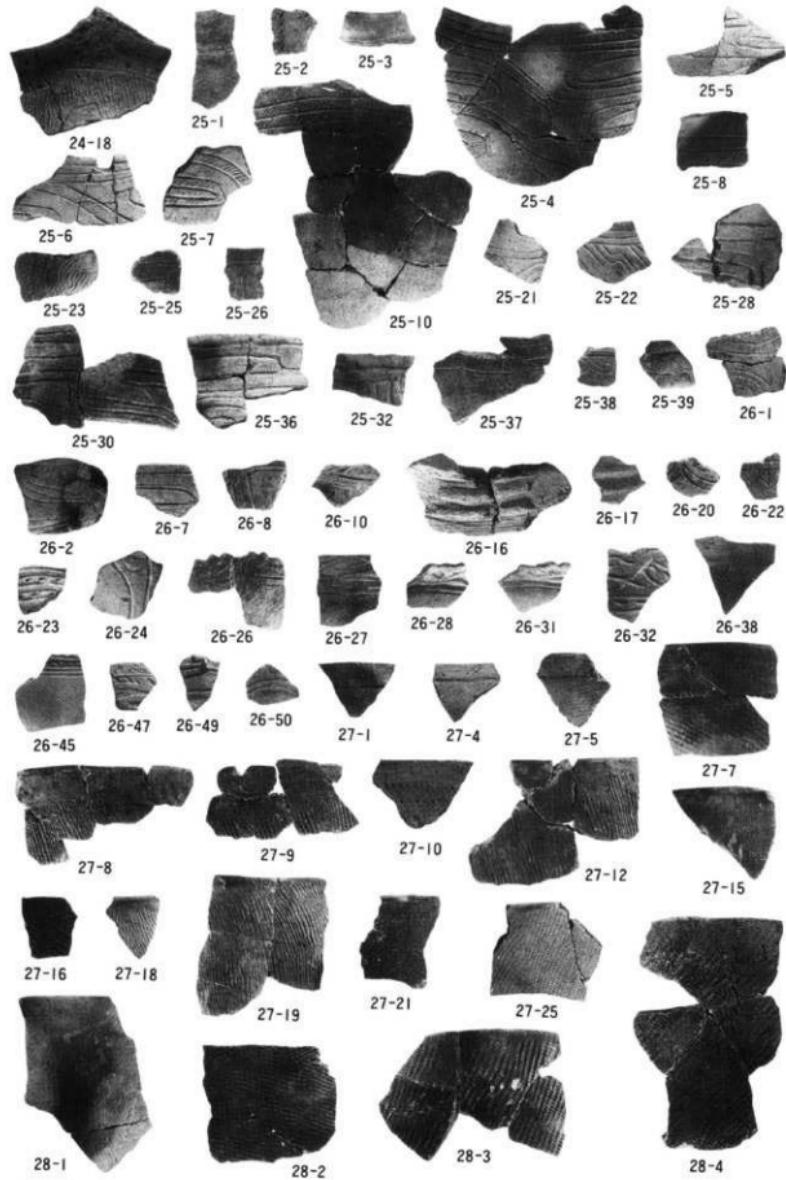


写真10

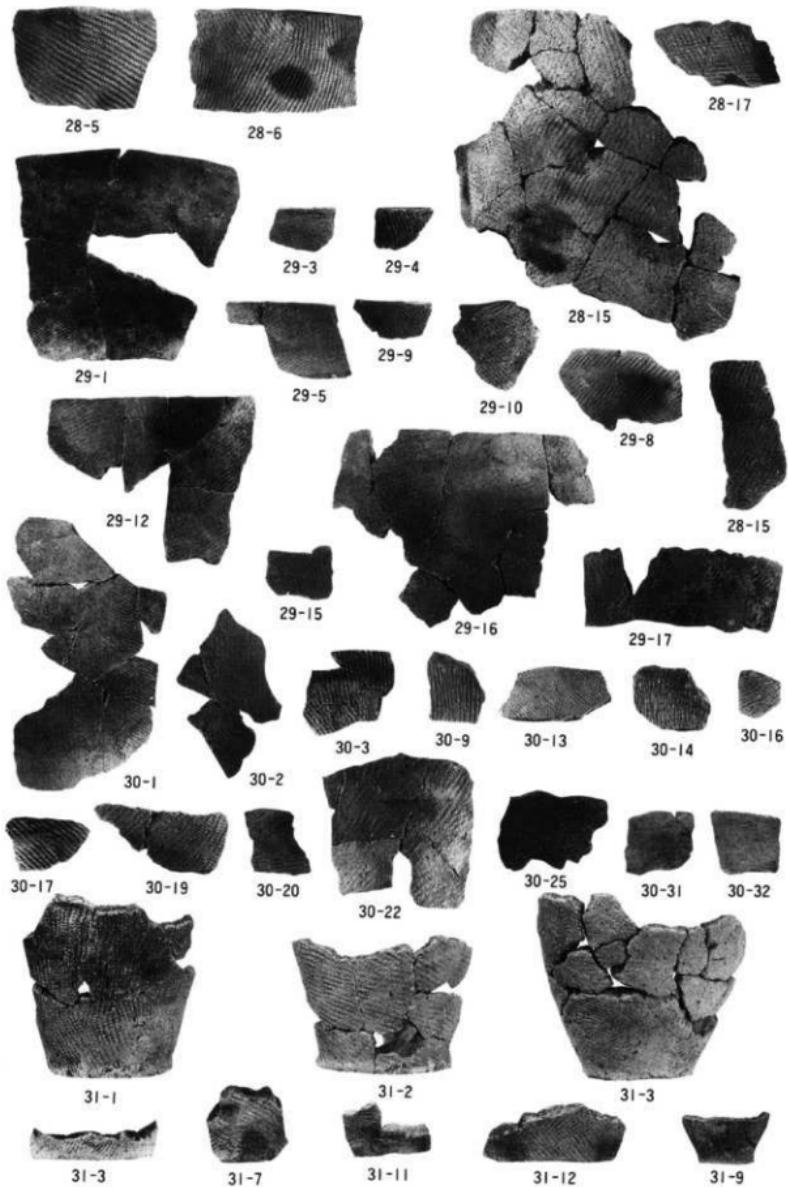


写真11

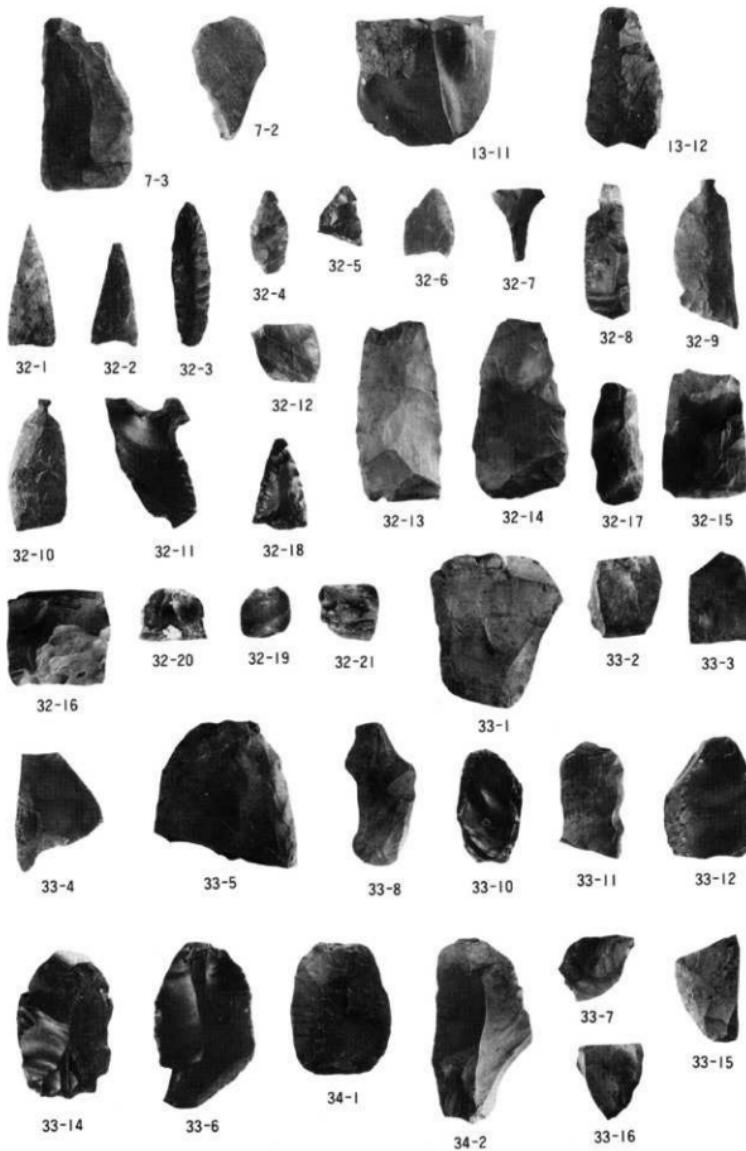


写真12

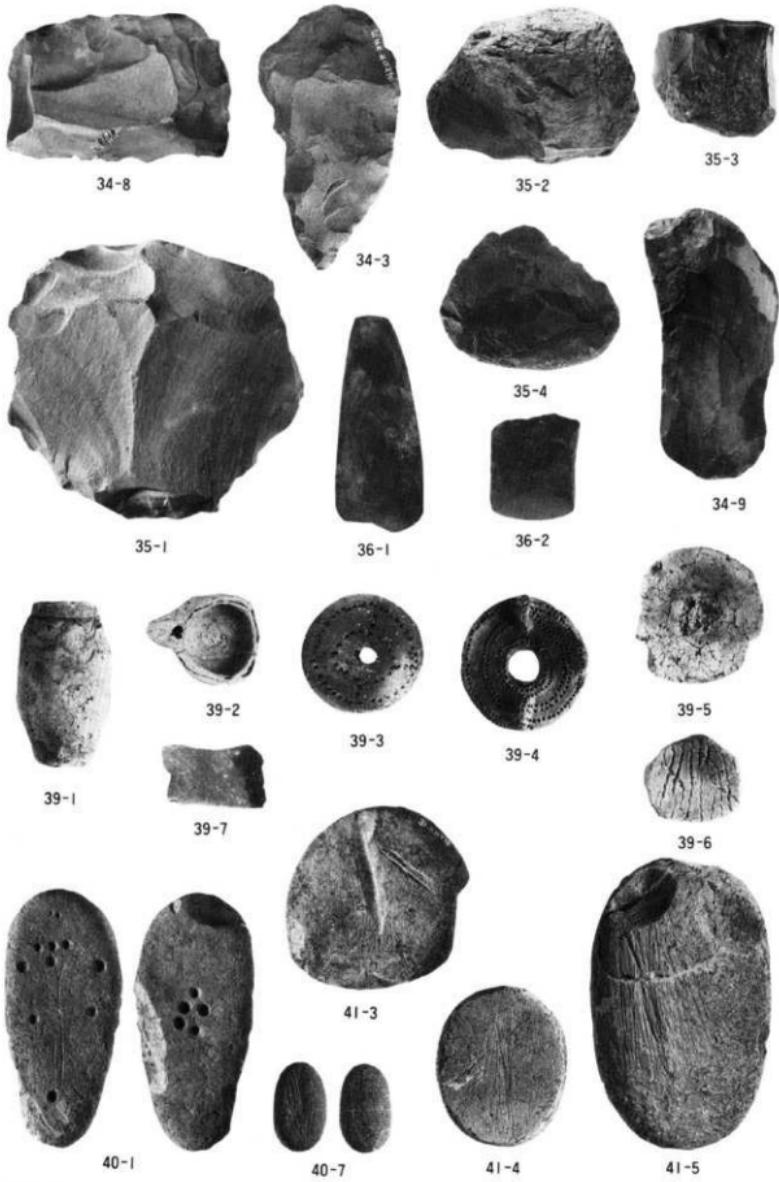


写真13

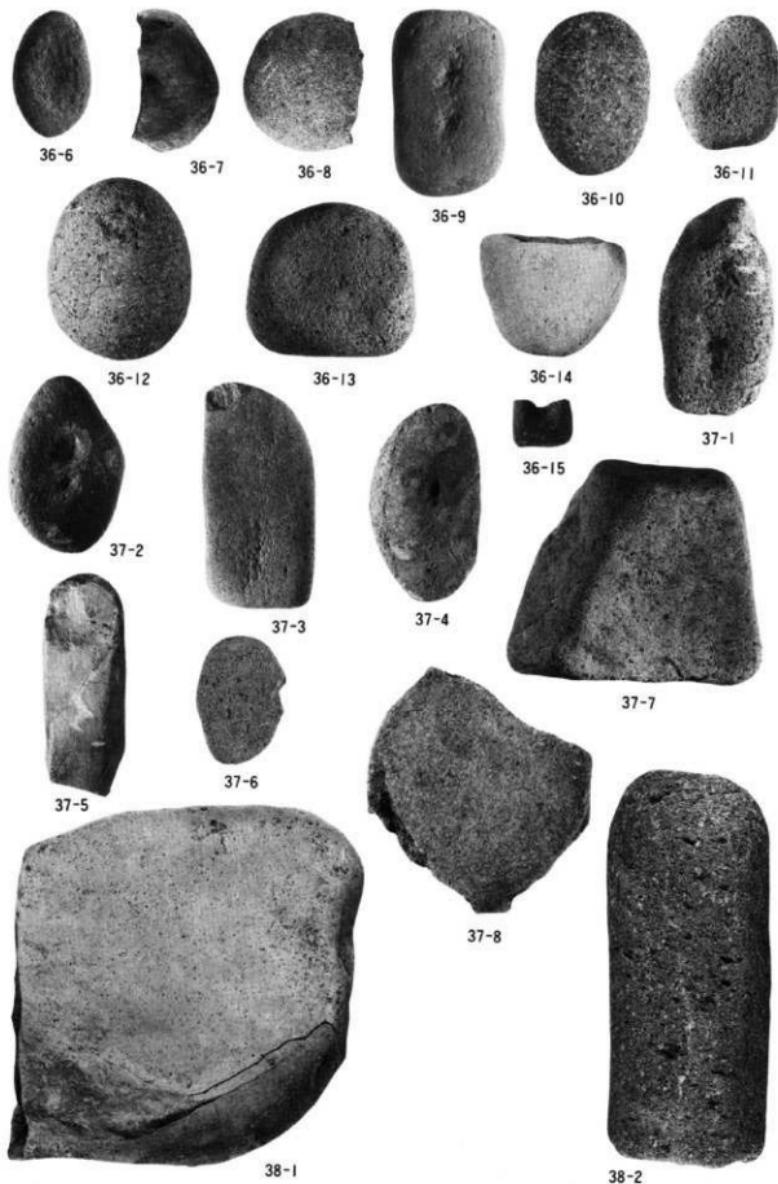


写真14

青森県埋蔵文化財調査報告書第195号

上田遺跡発掘調査報告書
— 国道394号線道路改良工事に係る発掘調査報告書 —

発行年月日 平成8年3月31日
発 行 青森県教育委員会
〒030 青森市新町二丁目3-1
編 別 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市野市字田畠内152-15
TEL 0177-88-5701, FAX 0177-88-5702
印 刷 所 株式会社 三栄企画印刷
〒030-01 青森市鈴置三丁目2-19
TEL 0177-38-0040, FAX 0177-38-0880

